

神木坂古墳群 II

榛原町文化財調査報告 第3集

1988

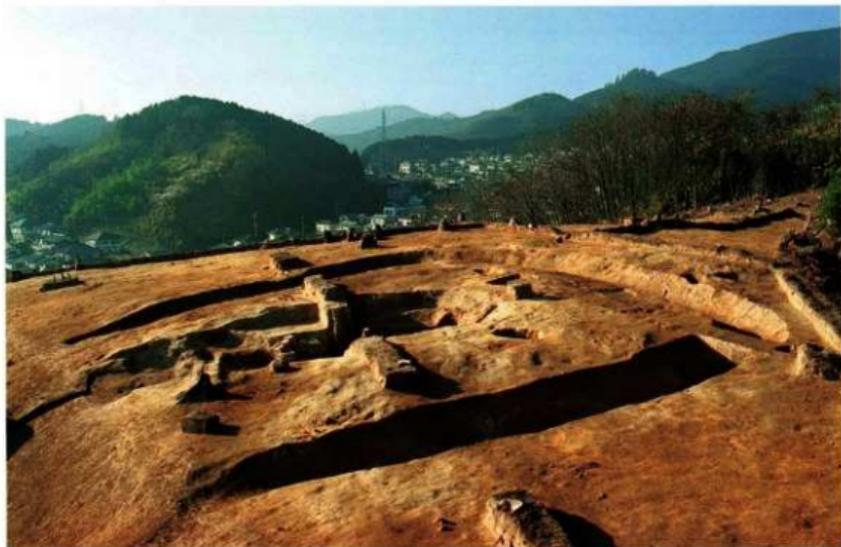
榛原町教育委員会

神木坂古墳群 II

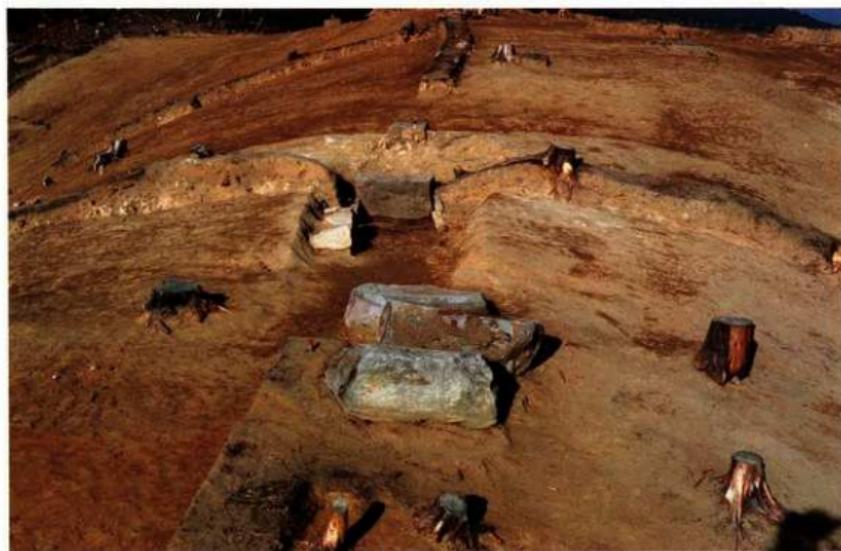
榛原町文化財調査報告 第3集

1988

榛原町教育委員会



神木坂2号墳 全景（東から）



神木坂3号墳（南から）

序 文

神木坂古墳群は、土地区画整理事業にともない昭和59年度と昭和61年度に発掘調査を実施しました。本書は、昭和61年度に行った2次・3次調査の結果を榛原町文化財調査報告第3集として刊行いたします。

神木坂の尾根上には、縄文時代から中世に至る多くの遺構・遺物が遺されていましたが、なかでも7世紀の横穴式石室2基は、当時の墓制を知る好資料と考えられます。本遺跡はすでに消滅していますが、横穴式石室は谷畑古墳横に移築しています。

本書が先に刊行いたしました榛原町文化財調査報告第2集とあわせて、今後の調査・研究に資するところがあれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際して御協力・御援助を賜りました奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所をはじめとする関係諸機関ならびに地元関係各位に厚く感謝の意を表します。

昭和63年3月

榛原町教育委員会

教育長 西 田 俊 也

例 言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡榛原町大字萩原、下井足に位置する神木坂古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、榛原町役場の依頼をうけて榛原町教育委員会が実施し、現地調査は榛原町教育委員会技師 柳沢一宏があたった。
- 3 出土人骨は岡山理科大学理学部 池田次郎氏に鑑定いただき、その結果を第5章に収録した。
- 4 本書の遺構名は、すでに発行している『神木坂古墳群』に順じた名称を使用しており、遺構一覧表を第3章第2節の末尾に掲載した。
- 5 本書の方位は、図1～3の真北を除いてすべて磁北である。
- 6 本書の執筆、編集は柳沢が担当した。

目 次

第1章 調査の契機と経過	1
第1節 調査の契機と経過	1
第2節 調査日誌抄	2
第2章 位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	10
第3章 遺跡の地形と遺構・遺物の検出状況	18
第1節 地 形	18
第2節 遺構・遺物の検出状況	18
第4章 遺跡の調査	21
第1節 神木坂西尾根地区	21
第2節 神木坂2号墳	22
第3節 神木坂3号墳	51
第4節 神木坂上墳墓7	63
第5節 神木坂中世墓群	65
第6節 神木坂遺跡その他の遺構	73
第7節 神木坂遺跡出土の遺物	75
第8節 谷畑古墳裾部	84
第5章 自然科学的研究	86
第1節 奈良県橿原町神木坂古墳群遺跡出土の中世人骨について	86
第6章 考 察	
第1節 神木坂2号墳と磚槨式石室	88
第2節 神木坂3号墳と新羅土器	92

第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機と経過

榛原町は大阪方面への通勤に比較的至便なことから、近鉄大阪線、国道165号線に沿って宅地造成が進められている。これまでに天満台、あかね台などの大規模な団地造成がされ、さらにその範囲が広がろうとしている。榛原町では近鉄榛原駅北側を開発することを目的とした土地区画整理事業（事業名 榛原駅北特定土地区画整理事業）をおこなうことになった。

当初の事業計画では谷畑古墳と神木坂古墳群が含まれていたため、榛原町役場計画課はこれらの埋蔵文化財の取り扱いについて奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立権原考古学研究所等と協議を重ねた。この結果、事業地の中心に位置する神木坂1号墳を除く他の古墳および古墳状隆起は緑地として保存することに決定した。そして1984年9月から1985年1月にかけて榛原町教育委員会、奈良県立権原考古学研究所が神木坂1号墳とその周辺の尾根およびドタニ遺跡の尾根の発掘調査を実施した（1次調査）^(註1)。

その後、事業計画が一部変更され、緑地保存することとなっている谷畑古墳と神木坂2号墳、3号墳、4号墳^(註2)の取り扱いについて榛原町役場計画課は再度、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立権原考古学研究所、榛原町教育委員会と協議を重ねた。協議の結果、宇陀地方で数少ない前期古墳である谷畑古墳はあくまで緑地保存することとし、神木坂古墳群については調査の結果、重要な遺構等が発見されればその保存等について改めて協議することになった。

1985年5月21日に榛原町役場計画課から埋蔵文化財発掘通知書が提出され、先述の関係機関が調査方法等について協議の結果、発掘調査は権原考古学研究所の指導をうけて榛原町教育委員会が担当することとなった。

周辺事業地との関係および他の遺跡の発掘調査日程等から調査を2回に分けて実施すること



図1 神木坂古墳群位置図

となり、まず神木坂3号墳から西へのびる尾根の試掘調査を1986年3月27日から4月8日まで実施した(2次調査)。3次調査は1986年9月から実施し、調査の経過については次節の調査日誌抄に詳しいので、ここでは略したい。調査の結果、2基の横穴式石室と1基の土塚墓、中世墓などを検出した。なかでも神木坂2号墳の埋葬施設は数少ない磚郭式石室であることが判明した。調査と並行して12月19日以降、これらの埋蔵文化財の保存対策について関係機関が協議を重ねたが、事業計画との関係上、遺跡の現状保存は困難との見解に至った。しかし、神木坂2号墳、3号墳の石室は緑地保存される谷畑古墳期に移築することになった。現地調査は1987年1月に終了し、同年3月に石室移築復原作業を実施した。

調査にあたっては榛原町役場計画課の諸氏に多大な御協力、御援助をいただき、周辺の西峠、下井足、桧牧、上井足、高井地区の方々には連日、作業員として参加いただいた。2回にわたる現地調査から遺物整理、報告書刊行に至るまでの関係者の芳名を次に記して謝意にかえたい。(敬称略)

調査指導

奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所

事務局

榛原町役場 計画課

調査作業員

井坂シゲコ、桑原 勉、桑原のぶえ、角岡きみよ、林 勝代、森本君子、山岡義朝、朝日鎮夫、井谷弥次郎平、小野文司、梶本弘子、高西綾子、武本末長、東金次郎、藤村虎慶、藤村奈々子、藤村秀雄、山本美恵子、山本繁雄

調査補助員

岡本幾代、熊倉弥生、谷川晴子、松本昌子、嘉満直英、杉本淳子、高田昭年、筒井義和、能見明子、福島 永、藤井朋子、玉井千砂登

調査協力者(計画課)

穴田宗宏、新木仁司、久保雅則

註1) 松田真一ほか『神木坂古墳群』(榛原町文化財調査報告 第2集)榛原町教育委員会 1986

註2) 3次調査で古墳でないことを確認。

第2節 調査日誌抄

2次調査

1986年（昭和61年）

3月27日（木）曇

本日より調査を開始。調査前の写真撮影。

3月28日（金）～3月29日（土）

雨のため作業中止。

3月31日（月）晴

器材搬入。掘り下げ作業開始。

神木坂古墳群の遠景写真撮影。

4月1日（火）晴

掘り下げ作業。第2層より土師器皿片1点が出土。

4月2日（水）晴

第2層を掘り下げ、地山を検出する。明確な遺構・遺物は認められない。



写真1 西尾根地区調査風景

4月3日（木）曇時々晴

地山検出作業。

4月4日（金）

雨のため作業中止。

4月5日（土）曇時々雨

遺構検出作業。午後、雨のため作業中止。

4月6日（日）晴

トレンチ全景の写真撮影。

トレンチ内の一部をさらに掘り下げる。器材搬出。

4月7日（月）曇時々雪

平板測量図作成。

4月8日（火）晴

土層断面図作成。

調査後の遠景写真撮影。

本日で2次調査を終了する。

3次調査

1986年（昭和61年）

9月1日（月）晴

本日より調査を開始。器材搬入。

午後、慰霊祭。草刈り作業。

9月2日（火）晴

表土はぎを開始。

9月3日（水）晴

表土はぎを継続。

9月4日（木）晴

表土はぎを継続。中世の上器片が出土。

9月5日（金）晴

表土はぎを継続。表土中より寛永通宝出土。

9月8日（月）晴

2号墳周辺の表土はぎ開始。中世土器、寛永通宝が出土。

9月9日（火）晴のち雨

2号墳の表土はぎ継続。表土中より中世土器、須恵器、土師器が出土。

9月10日（水）

雨のため作業中止。

9月11日（木）晴

表土はぎ継続。元祐通宝、元豊通宝が出土。

9月12日（金）～9月17日（水）

雨のため作業中止。

9月18日（木）曇のち雨

表土はぎ継続。2号墳西側斜面から中世土器片がややまとまって出土。午後、雨のため作業中止。

9月19日（金）

雨のため作業中止。

9月20日（土）晴のち雨

3号墳周辺の表土はぎ開始。中世土器片が出土。

9月22日（月）曇

3号墳の表土はぎ継続。中世土器片が出土。

- 9月24日(水)晴
3号墳の表土はぎ継続。3-5区中世土器片、寛永通宝が出土。
- 9月25日(木)晴
3号墳南側の表土はぎ開始。須恵器片が出土。本日でほぼ表土はぎが終了する。
- 9月26日(金)晴
掘り下げ作業。
- 9月27日(土)晴
掘り下げ作業。
- 9月29日(月)
作業休み。
- 9月30日(火)晴
掘り下げ作業。中世土器片、須恵器片出土。
- 10月1日(水)
雨のため作業中止。
- 10月2日(木)晴
掘り下げ作業。
- 10月3日(金)晴
掘り下げ作業。
- 10月4日(土)晴
尾根西斜面掘り下げ作業。
- 10月6日(月)曇時々雨
尾根西斜面掘り下げ作業。
- 10月7日(火)晴
3号墳周辺掘り下げ作業。
- 10月8日(水)晴
2号墳掘り下げ作業。元豊通宝、須恵器片、土師器片が出土。
- 10月9日(木)晴
2号墳掘り下げ作業。
- 10月11日(土)雨のち曇
2号墳掘り下げ作業。
- 10月13日(月)
雨のため作業中止。
- 10月14日(火)晴
2号墳掘り下げ作業。
- 10月15日(水)晴
作業休み。
- 10月16日(木)晴
2号墳茨道部分の掘り下げ作業。
- 10月17日(金)晴のち曇
2号墳周辺掘り下げ作業。
2号墳、石室内の覆乱土の掘り下げ作業。覆乱が著しい。
31号墓(SK-31)を検出。
- 10月18日(土)晴
2号墳内覆乱土の掘り下げ作業。
32号墓(SK-32)を検出。
- 10月20日(月)晴
2号墳周辺の精査。
2号墳の南北土層断面の写真撮影、実測図作成。
31号墓掘り下げ作業。土層断面の写真撮影。
32号墓掘り下げ作業。鉄釘出土。
- 10月21日(火)晴
2号墳周辺精査。
2号墳南側、中央アゼ除去(掘り下げ)。
31号墓土層断面図作成。
32号墓写真撮影および実測図作成のち鉄釘を取り上げる。
- 10月22日(水)
雨のため作業中止。
- 10月23日(木)晴
2号墳周辺精査。
31号墓写真撮影および実測図作成。
奈良県教育委員会(以下、県教委)楠元哲夫氏来訪。
- 10月24日(金)曇一時雨
2号墳周辺精査。周溝をほぼ検出。辺約15mほどの方墳か。
2号墳覆乱部分掘り下げ作業。ようやく石室の一部を検出する。磚積された石室であることが判明。
尾根西斜面で土塚墓を検出。
- 10月25日(土)晴
2号墳茨道部の石組遺構の写真撮影、実測。
- 10月27日(月)曇
尾根西斜面の調査範囲を拡張する。
- 10月28日(火)曇
2号墳、覆乱土の掘り下げ作業。
- 10月29日(水)曇のち雨

2号墳南北土層断面の写真撮影、実測図作成。
土塚墓7周辺を精査。

3号墳石室内の掘り下げ作業。石室内法は長さ
3m、幅1m。

10月30日(木)曇

2号墳内でSK-42を検出。

3号墳石室内掘り下げ作業。黒色土器出土。

10月31日(金)晴

2号墳、東西土層断面、南北土層断面の写真撮
影、実測図作成。

2号墳北側の尾根頂上部精査。

SK-42を完掘し、写真撮影、実測図作成。

榎原考古学研究所(以下、榎考研)千賀、竹田
氏来訪。

11月1日(土)曇

2号墳東西土層断面の写真撮影、実測図作成。
石室内攪乱土の掘り下げ。石室東側壁の一部を検
出。

2号墳南側斜面の第2層掘り下げ作業。中世土
器片が多く出土。

榎考研 松永氏来訪。

11月4日(火)雨のち曇

2号墳東西土層アゼ東半部除去。攪乱土掘り下
げ。2号墳南斜面の第2層掘り下げ作業。

SK-43の写真撮影、実測図作成。

尾根西斜面、第2層掘り下げ作業。

11月5日(水)曇

2号墳石室内の南北土層断面の写真撮影、断面
図作成。2号墳南斜面、第2層~第3層掘り下
げ作業。

3号墳南北土層断面の写真撮影、断面図作成。

尾根西斜面の第2層掘り下げ作業。

11月6日(木)晴

2号墳内掘り下げ作業。西壁の一部を検出。奥
壁は未確認。2号墳南斜面掘り下げ作業。

3号墳南北アゼ除去。石室南端の散乱石材の写
真撮影。

11月7日(金)晴

2号墳石室内掘り下げ作業。石室内に落ち込ん
だ天井石をほぼ検出。周溝掘り下げ作業。
南斜面掘り下げ作業。

11月8日(土)曇

2号墳天井石検出状態の写真撮影。

2号墳、3号墳間の南斜面、掘り下げ作業。縄
文土器片出土。

土塚墓7掘り下げ作業。

11月10日(月)晴

2号墳内天井石(2石)を移動。

2号墳、3号墳間の南斜面掘り下げ作業。

土塚墓7、ほぼ完掘。



写真2 2号墳調査風景

11月11日(火)曇

SK-45掘り下げ作業。

土塚墓7土層断面の写真撮影、実測図作成。

11月12日(水)晴

2号墳周溝掘り下げ作業。周溝検出面から須恵
器(平瓶)片出土。石室右袖部を検出。

11月13日(木)曇

2号墳石室内(玄室)掘り下げ作業。周溝掘り
下げ作業。

土塚墓7写真撮影、実測図作成。

11月14日(金)晴

2号墳石室内掘り下げ作業。

3号墳石室内掘り下げ作業。

榎考研・菅谷、関川氏来訪。

11月15日(土)

作業休み。

11月17日(月)曇時々晴

2号墳石室ほりかた検出作業。2号墳内で土器
墓(33号墓)を検出。

11月18日(火)曇時々晴

2号墳石室ほりかた検出作業。周溝掘り下げ作
業。鉄沖出土。

- 33号墓土層断面の写真撮影、実測図作成。
榎考研 泉森、伊藤(勇)氏来訪。
- 11月19日(水)晴
2号墳石室ほりかた掘り下げ作業。
3号墳周辺掘り下げ作業。
33号墓掘り下げ作業。
榎考研 林部氏来訪。
- 11月20日(木)晴
2号墳石室奥の西側壁の石材をさらに確認。
3号墳石室ほりかた検出作業。背後溝掘り下げ作業。土師器片出土。
- 11月21日(金)晴
2号墳周溝掘り下げ作業。攪乱土掘り下げ。
榎考研「現地検討会」視察。
- 11月22日(土)晴
2号墳周溝掘り下げ作業。下層より土師器出土。
- 11月25日(火)
雨のため作業中止。
- 11月26日(水)
作業休み。
- 11月27日(木)晴
2号墳周溝掘り下げ作業。
谷畑古墳裾、2号墳間の精査。北端で炭の広がりを検出。中世墓か？
33号墓人骨出土状態写真撮影のち実測図作成。
人骨取り上げ作業。
- 11月28日(金)晴
2号墳周溝内土器出土状態写真撮影。周溝掘り下げ作業。石室内土層断面写真撮影。
3号墳石室背後で溝を検出。
36号墓を検出。
- 11月29日(土)曇のち雨
2号墳周溝土層断面写真撮影、実測図作成。
33号墓、SK-42写真撮影。
第2層掘り下げ作業、精査。
午後、降雨のため作業中止。
- 12月1日(月)曇
2号墳東土層断面写真撮影、実測図作成。
2号墳南斜面精査。
3号墳南北土層断面図作成。
- 12月2日(火)晴
調査地内の土層断面図作成。
- 12月3日(水)晴
3号墳写真撮影。
2号墳、3号墳間の斜面第3層掘り下げ作業。
- 12月4日(木)
雨のため作業中止。
- 12月5日(金)晴
2号墳遺物出土状態写真撮影、平面図作成、遺物取り上げ作業。南斜面精査。
- 12月6日(土)晴
3号墳石室実測図作成。
SK-44写真撮影。
- 12月8日(月)晴
3号墳石室実測図作成。
作業は午前中のみ。
- 12月9日(火)晴
2号墳石室床面精査。2号墳周溝アゼ(東西)除去。
2号墳石室床面精査。
3号墳石室写真撮影。
2号墳、3号墳間斜面第3層掘り下げ作業。
- 12月10日(水)曇のち雨
2号墳床面精査。周溝アゼの一部を除去。
36号墓土層断面図作成、写真撮影。
- 12月11日(木)晴
2号墳墓道攪乱土掘り下げ作業。
36号墓土層断面図作成。
SK-45掘り下げ作業。2号墳全景写真撮影の準備。
- 12月12日(金)晴
2号墳全景写真撮影。
36号墓掘り下げ作業。
航空写真撮影の準備。
- 12月13日(土)晴
航空写真撮影。
調査地遠景写真撮影。
36号墓写真撮影、平面図作成。
SK-45掘り下げ作業。
36号墓掘り下げ作業。鉄釘出土。
- 12月16日(月)

雨のため作業中止。

12月16日(火)曇

平板測量開始。(計画課の協力)

SK-45写真撮影。

35号墓掘り下げ作業。

午後、広陵古文化会来訪。

12月17日(水)晴

平板測量を継続。

35号墓掘り下げ作業。

SK-45平面図作成。

12月18日(木)曇時々晴

平板測量終了。

35号墓写真撮影、平面図作成。

12月19日(金)雨

12月20日(土)雪

雨・雪のため作業中止。

12月21日(日)晴

3号墳石室実測図作成。

12月22日(月)雨のち晴

2号墳石室平面図作成。

12月23日(火)晴

2号墳石室実測図作成。

道具の手入れ。

12月24日(水)曇

2号墳石室実測図作成。

12月25日(木)

雨のため作業中止。

1987年(昭和62年)

1月6日(火)晴

5日の残雪のため作業中止。

1月7日(水)晴

2号墳石室実測図作成。石室ほりかた内掘り下げ作業。

3号墳石材移動の準備。

1月8日(木)晴

2号墳石室ほりかた内埋土掘り下げ作業。

3号墳石材移動。

1月9日(金)晴

2号墳石室写真撮影、床面精査。

3号墳石室ほりかた内精査、写真撮影、平面図作成。

1月10日(土)

作業休み。

1月11日(日)曇

2号墳石室写真撮影、石室実測図加筆、石材移動の準備。

3号墳石室ほりかた平面図作成。3号墳の調査終了。

1月12日(月)～1月14日(水)

雪のため作業中止。



写真3 雪の神木古墳群

1月16日(金)晴

慰霊祭。

37号墓を検出。

2号墳石材移動。

一部器材の搬出。



写真4 慰霊祭

1月17日(土)晴

2号墳ほりかた埋土掘り下げ作業。

ほとんどの器材搬出。

1月19日(月)晴時々曇

作業は午後から。

2号墳東西アゼ東側土層断面図加筆。

37号墓土層断面図作成、写真撮影、実測図作

成。

1月20日(火) 晴時々曇

2号墳内より34号墓を検出。写真撮影、平面図作成。

2号墳ほりかた写真撮影。

1月21日(水) 晴時々曇

2号墳石室ほりかた平面図作成。

1月23日(金) 晴のち曇

2号墳石室ほりかた平面図補草。

1月27日(火) 晴時々曇

器材撤収。石室の移築復原作業を残し、現地調査を終了。

3月4日(水) 晴

石室移築にともなう発掘調査開始。草刈り。表土はぎ。

尾根の土取り作業が進んでいる。

3月5日(木) 晴

土葬墓4基(38号墓~41号墓)を検出。写真撮影。

3月6日(金) 曇

土葬墓の実測図作成。

調査地の平板測量。

3月10日(火) 晴

2号墳、3号墳移築地の整地後、復原作業を開始。

3月26日(木) 晴

石室の移築作業が終了。



写真5 移築後の2号墳

谷畑古墳墳丘測量作業継続。

3号墳消滅。

3月31日(火) 曇

谷畑古墳墳丘測量作業終了。

谷畑古墳を残し、すべての古墳が消滅。



写真6 移築後の3号墳

3月27日(金) 晴

谷畑古墳墳丘測量作業開始。

3月28日(土) 晴

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

宇陀郡は奈良県中部の東方、山中とよばれる山間部に位置し、三重県と境を接している。この宇陀郡は行政区画では榛原町、大宇陀町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっており、前三町には、低丘陵と平地部が複雑に入り乱れた小盆地がいくつも形成され、「**口宇陀**」と総称されている。標高300m～400mの各所には、過去から現在に至る生活の舞台がくりひろげられ、さらに、未来へと歩もうとしている。これに対して宇陀郡東部は室生山地、高見山地などからなる山岳地帯で「**奥宇陀**」と呼ばれている。

榛原町の西部には小盆地が広がり、東部、北部は屏風状に山々が連なっている。また、南方には宇陀川、芳野川の源である吉野の山塊が広がっている。口宇陀の西に宇陀川、東に芳野川があり、それぞれが南から北へと流れ、神木坂古墳群の南西約600mの榛原町下井足で合流する。ここで芳野川を合わせた宇陀川はさらに北東に流れ、内牧川などの支流と合流しながら人造湖である室生ダムへと至る。ダムの水は奈良県の飲料水として使われる一方、三重県へと流れ、名張川に合流する。その後、山あいを流れて木津川、平野を流れて淀川となり、大阪湾へとそそいでいる。宇陀西部には人和（国中）との分水界である龍門山地が横たわるため、国中の水を集めて西流する大和川（大和川水系）と宇陀川（木津川水系）とは水系を異にしている。

榛原町の北辺には桜井市朝倉から榛原町萩原へと続く初瀬推定断層、伊賀から室生村大野、榛原町萩原、桜井市栗原へと続く近江・伊賀大断層が認められる。これらの構造谷の北側は急傾斜となっており、大和高原との境である額井岳（通称 大和富士、標高 816 m）、香酔山（標高799 m）、貝ヶ平山（標高822 m）、鳥見山（標高734 m）などの山々が榛原の街へとせまっている。ここからはいくつもの尾根が派生し、神木坂古墳群もこの尾根上に築か



図2 榛原町位置図

れている。神木坂の地からは先述の山々がすぐ近くに見え、あたかも見上げんばかりにせまっている。

榛原を東西に横断する構造谷は古くから大和と伊勢とを結ぶ主要交通路となっており、このことは『古事記』、『日本書紀』の記載からも明らかである。この構造谷によって萩原、下井足周辺は交通の要所、分岐点として重要な位置を占めるようになる。国中と榛原とを結ぶ主要道はふたつあり、ひとつは三輪山麓の桜井市朝倉から初瀬を経て、榛原町西峠を越える道（現在の国道165号線）である。もうひとつは桜井市朝倉、忍坂から榛原町笠間、篠栗を経て萩原へと至る道（現在の国道166号線、県道栗原榛原線）である。また榛原から伊勢へと続く道もふたつあり、ひとつは榛原町山辺三、室生村大野、三重県名張市を経て伊勢へと至る道（現在の国道165号線）、もうひとつは榛原町内牧、御杖村神木、三重県三杉村を通る道（現在の国道369号線）である。いずれの道も幹線道として今もその役割を果たしている。

かつて宇陀郡から三重県にかけて広く活動した室生火山帯があり、今もその火山岩層が広範囲に認められる。榛原町はこの室生・火山帯の西端に位置し、町域の約 $\frac{1}{3}$ は室生火山帯に含まれている。火山岩層中には斜長流紋岩が認められ、灰白色系のものが一般に「榛原石」と呼ばれている。榛原石は柱状節理が発達しているため、比較的、切り出しや加工が容易である。このため、古墳の石室、石棺、建物礎石、石造物、石垣などに古くから使用され、町内はもとより国中へも運ばれている。榛原石の露頭は各所に認められるが、神木坂古墳群の東方約1kmの通称「不動堂付近」には明治20年代から昭和40年頃まで石切場が営まれていた。この周辺から各地に榛原石が運ばれていたであろうか。

第2節 歴史的環境

宇陀を流れる宇陀川、芳野川、内牧川などの流域には数多くの遺跡が存在している。これらの流域では近年、宅地造成、農地造成をはじめとする多くの開発事業が実施され、生活環境は大きく変わりつつある。このような状況のもと、山野は大きく景観を変え、いくつかの遺跡はその姿を消し、調査記録だけが残されている。また、宇陀は『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献に度々登場し、今に伝える地名、伝承なども多い。

縄文時代

縄文時代に先だつ旧石器時代の遺物としては宇陀川の川底からサヌカイト製の有舌尖頭器が採集されている（文献1）。他の遺構、遺物は確認されていないが、宇陀地方の歴史が少なくとも旧石器時代末頃にまでさかのぼるといえる。これと同様の石器は桜井市（文献2）臨本などでも採集されており、宇陀と桜井とを結ぶ旧石器時代の道を予想できる。

縄文時代の遺跡のほとんどは、採集遺物によっているため、各遺跡の詳細な実態が明らかでない

ものが多く、このような状況のもと、内牧川流域の高井遺跡において、遺跡全域の発掘調査を実施し、早期から後期の遺物、中期末から後期前葉の遺構を検出している。この遺跡は早期から後期にかけての断続的に営まれた集落であるが、集落としての盛期は中期末から後期前葉と考えられ、内牧川流域の母集落のひとつであったと推定される。



写真7 天ノ森遺跡

早期の遺跡は奥宇陀に比較的多く認められるが、口宇陀にはあまり多くない。町内では室生ダムによって水没した松牧遺跡、河合第1遺跡、河合第2遺跡が確認されており、なかでも松牧遺跡からは配石遺構が検出されている。前・中期の遺跡も先述の高井遺跡のほかはその数はあまり多くない。現在、口宇陀地方で確認されている縄文遺跡のほとんどは後期、晩期に属するものである。町内ではこれまでに神木坂遺跡、能峠遺跡、丹切44号墳、尾尻遺跡、栗谷トノヤシキ遺跡、三角遺跡、福西遺跡、沢遺跡、下城・馬場遺跡から発掘調査によって遺物が出土している。このほか、採集遺物から天ノ森遺跡、鳥見山中腹遺跡、篠畑神社前遺跡、内牧川流域の諸遺跡が確認されている。まだ、未確認の遺跡の存在が予想され、縄文遺跡の調査、研究はこれからである。

弥生時代

この時代の遺跡は宇陀川、芳野川流域の河岸段丘、尾根上に位置しており、内牧川流域にはほとんど認められない。先述の縄文後・晩期の遺跡と弥生時代の遺跡とは重複または近接した位置にあるといえよう。

前期の遺跡としては沢遺跡、下城・馬場遺跡が確認されており、いずれの遺跡からも縄文時代後・晩期の遺物が出土している。両遺跡ともわずかな破片が出土しているのみで、明確な遺構も検出されていないが、比較的近接していることから非常に密接した関係が推定される。

中期の遺跡は現在までに権原町沢遺跡、高塚遺跡、能峠中島遺跡、能峠南山遺跡、池上所在遺跡、大宇陀町峰畑遺跡などが確認されているが、その数はあまり多くない。

現在、確認されている弥生時代の遺跡のほとんどは後期に属するもので、その数はこれまでと比較にならないほど増大している。国中のような大規模集落は認められないが、宇陀川、芳野川流域に点在している。谷部に位置する能峠中島遺跡からは、竪穴式住居跡、独立柱建物跡のほか、谷水田の水量調節に用いられたと考えられる井堰が検出されている。この遺跡の下流には上井足北出遺跡が存在し、両遺跡の関係が注目される場所である。また、高塚遺跡は住居跡が検出されていないものの、2条の溝が確認されており、集落の存在が十分予想される。丘陵上に位置する大王山遺跡、能峠北山遺跡、大宇陀町五津・西久保山遺跡、平尾東遺跡からも竪穴式住居跡が検出されている。

古墳時代

神木坂古墳群の北西約300mの尾根上には古墳時代初頭のキトラ遺跡が存在する。大和において最



图3 神木板古墳群周辺道跡分布図

表1 神木坂古墳群周辺遺跡分布図対照表

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	概要
1	鳥見山中腹遺跡	榑原町萩原	遺物散布地	縄文~弥生	縄文土器、弥生土器、石器
2	岩尾火葬墓	榑原町萩原	墳墓	弥生	木炭 須恵器、鉄板
3	雨山古墳	榑原町萩原	古墳	古墳	円墳、薄板式石室
4	清水谷遺跡	榑原町萩原	遺物散布地	弥生、古墳	弥生土器、須恵器
5	天ノ森遺跡	榑原町萩原	遺物散布地	縄文、弥生、中世	縄文土器、弥生土器、土師器
6	西峠古墳	榑原町下井足	古墳	古墳	円墳、薄板式石室
7	キトラ遺跡	榑原町下井足	古墳、中世墓	古墳、中世	方形台状墓、土葬墓、火葬土坑、古式土師器他
8	谷畑中世墓	榑原町萩原	中世墓	中世(室町)	土葬墓、火葬骨埋葬墓、火葬施設 土師器、陶器、五輪塔、石仏他
9	谷畑古墳	榑原町萩原	古墳	古墳	円墳
10	神木坂古墳群 萩原Dタニ遺跡	榑原町萩原	古墳、中世墓	古墳、中世	銅鏡、筒形陶器、鉄製式器他 円墳、方墳、土坑墓、横穴式石室 土葬墓、火葬施設他
11	奥ノ芝古墳群	榑原町福地	古墳	古墳	須恵器、土師器、鉄刀、鉄釘他 円墳、薄板式石室他
12	福地城跡	榑原町福地	集落跡、城跡	弥生、古墳、中世	須恵器、土師器他 竪穴式住居跡、土師、副郭他 古式土師器、土師器、瓦器他
13	長峯古墳群	榑原町長峯	古墳	古墳	円墳
14	北谷古墳群	榑原町長峯	古墳	古墳	前方後円墳、円墳
15	不動堂古墳群	榑原町松牧甲	古墳	古墳	円墳、横穴式石室
16	石風呂古墳	榑原町松牧甲	古墳	古墳	須恵器、土師器、鉄刀、鉄鏃、鉄釘 円墳、横穴式石室
17	石風呂遺跡	榑原町松牧甲	遺物散布地	縄文、古墳、中世	縄文土器、ササカイト、須恵器、土師器
18	丹切遺跡	榑原町下井足、萩原	遺物散布地	縄文~中世	縄文土器、弥生土器、ササカイト、 須恵器、土師器、瓦器
19	中西遺跡	榑原町下井足	遺物散布地	弥生	弥生、ササカイト
20	丹切古墳群	榑原町下井足	古墳他	古墳他	円墳、横穴式石室他
21	大王山古墳群	榑原町下井足	古墳、中世墓他	弥生~近世	土師器、鉄釘、黒色土器他 方形台状墓、円墳、中世墓 須恵器、土師器、鏡、鉄鏃他
22	下井足古墳群	榑原町下井足	古墳	古墳	円墳、方形台状墓
23	井足城跡	榑原町下井足	城跡	中世	平担扉、土壇、掘り割り他 土師器
24	谷古墳群、愛宕山古墳	榑原町上井足、下井足	古墳	古墳	円墳、横穴式石室他
25	谷遺跡	榑原町上井足	集落跡	弥生、古墳、中世	須恵器、鉄刀、鉄鏃他 竪穴式住居跡、河川跡
26	能峠遺跡	榑原町上井足	古墳、中世墓他	古墳、中世他	弥生土器、須恵器、土師器、瓦器他 方形台状墓、横穴式石室、竪穴式住居跡他
27	能峠中島遺跡	榑原町上井足	集落跡	弥生、古墳	土師器、須恵器、瓦器他 竪穴式住居跡、河川跡他
28	能峠前山1号墳	榑原町上井足	古墳	古墳	弥生土器、土師器、須恵器他
29	上井足北出遺跡	榑原町上井足	遺物散布地	縄文~古墳、中世	円墳、中世墓他 河川跡、建物跡、溝、縄文土器、 弥生土器、須恵器、土師器、瓦器



写真8 谷畑古墳

文獻20)
時代前期末の谷畑古墳が位置する。その規模は直径約30mの円墳で、その中央から箱形木棺が検出されている。棺内からは石釧、水銀朱を多量に含む赤色顔料塊、棺外からは内行花文鏡、筒形銅器、素環頭大刀などの刀剣類、農具類が出土している。宇陀地方における典型的な前期古墳のひとつである。中期に位置づけられる古墳も比較的少なく、大宇陀町北原古墳、北原西古墳、榛原町野山C-1号墳、能峠前山1号墳、篠楽向山古墳、愛宕山古墳などが知られているにすぎない。愛宕山古墳は、王氏作鏡銘画像鏡をはじめ、豊富な遺物が出土しており、この古墳の埋葬施設は堅穴式石



写真9 丹切古墳群と丹切遺跡

室の可能性が高い。この頃の集落としては、愛宕山古墳のすぐ南側の谷部に位置する谷遺跡が確認されている。
5世紀後半以降、宇陀にも多くの古墳が築かれはじめ、木棺直葬を主体とした古墳が群を形成するようになる。これまでに野山古墳群、丹切古墳群、大王山古墳群、トノヤシキ古墳群、尾尻古墳群などの調査が実施されている。丹切古墳群は5世紀末頃に石棺直葬墳で造墓が開始され、木棺直葬を主体として造墓活動がおこなわれてきたが、6世紀後半には新しい墓制である横穴式石室が導入され、7世紀前半には礎台式石室(丹切33号墳)が築かれている。能峠遺跡群、北谷古墳群、不動堂古墳群をはじめ、各所に点在する横穴式石室も6世紀後半から7世紀前半のものが多く。

宇陀から桜井を中心に礎台式石室が築かれており、町内においても先述の丹切33号墳のほか、奥ノ芝1号墳、2号墳、南山古墳、西峠古墳、本報告の神木坂2号墳などが確認されている。7世紀代のもうひとつの墓制の特徴として丹切古墳群、能峠南山遺跡、烏羽1号墳などで確認されている小型横穴式石室をあげることができる。尾根斜面に明確な墳丘をもたない古墳として築かれ、個人墓としての性格が強いものである。ここに宇陀地方の古墳時代終末の一端がうかがえる。

奈良・平安時代

今まで盛んに築造されていた古墳は数、規模とも衰退し、これに変わる新しい墓制である火葬墓が登場してくる。天保2年(1831年)八滝の山中で、銅製墓誌、銅箱、金銅製外容器、ガラス製蔵

初に確認された方形台状墓である。墳丘は一辺約10mほどの規模をはかり、四周には浅い溝をめぐるしている。埋葬施設は3基の木棺が検出されている。このほか、大王山遺跡、能峠遺跡群、下井足遺跡群、野山古墳群、大宇陀町五津・西久保山遺跡で、数多くの台状墓が確認されている。宇陀地方の古墳出現期を考えるうえにおいて重要な位置を占めるものである。

キトラ遺跡から神木坂古墳群へと続く尾根上には古墳

文獻20)
のすぐ南側の谷部に位置する谷遺跡が確認されている。

5世紀後半以降、宇陀にも多くの古墳が築かれはじめ、木棺直葬を主体とした古墳が群を形成するようになる。これまでに野山古墳群、丹切古墳群、大王山古墳群、トノヤシキ古墳群、尾尻古墳群などの調査が実施されている。丹切古墳群は5世紀末頃に石棺直葬墳で造墓が開始され、木棺直葬を主体として造墓活動がおこな

文獻6) 文獻7) 文獻24)
る横穴式石室も6世紀後半から7世紀前半のものが多く。

宇陀から桜井を中心に礎台式石室が築かれており、町内においても先述の丹切33号墳のほか、奥ノ芝1号墳、2号墳、南山古墳、西峠古墳、本報告の神木坂2号墳などが確認されている。7世紀代のもうひとつの墓制の特徴として丹切古墳群、能峠南山遺跡、烏羽1号墳などで確認されている小型横穴式石室をあげることができる。尾根斜面に明確な墳丘をもたない古墳として築かれ、個人墓としての性格が強いものである。ここに宇陀地方の古墳時代終末の一端がうかがえる。

奈良・平安時代

今まで盛んに築造されていた古墳は数、規模とも衰退し、これに変わる新しい墓制である火葬墓が登場してくる。天保2年(1831年)八滝の山中で、銅製墓誌、銅箱、金銅製外容器、ガラス製蔵

骨器などが発見され、墓誌銘から文祿麻呂の墓であることが明らかとなった。1981年には、出土地の確認調査が実施され、^{文献27)} 堅炭のはいた十坑と、それを覆う粘土層が検出され、丁寧に築かれた奈良時代の墳墓であることが明確となっている。

このほか、鳥見山の山腹で岩尾火葬墓が確認されている。^{文献28)}

平安時代の墳墓は八鏡鏡、灰釉陶器などが出土している神木坂SK-03をはじめ、^{文献5)} 大王山遺跡、能峠南山遺跡などで確認されている。

中世

神木坂古墳群、谷畑古墳の北側には谷畑中世墓地が位置し、^{文献29)} 宇陀地方で最初に調査が実施された中世墓群として知られている。土葬墓、火葬墓、火葬収骨墓、火葬施設約60基が検出され、鎌倉時代末から室町時代後期の造墓と考えられている。大王山中世墓群でも多数の火葬墓、土葬墓が検出されており、^{文献14)} 東尾根の造墓は鎌倉時代後半から室町時代前半頃と考えられている。このほかトノヤシキ中世墓群、^{文献9)} 能峠南山中世墓群、^{文献6)} 野山中世墓群などの調査が実施されている。^{文献17)}

この頃の宇陀地方には、宇陀三人衆（秋山、沢、芳野氏）とよばれる土豪武士集団が蟠踞しており、秋山氏は大宇陀町秋山城、沢氏は榛原町沢城、芳野氏は菟田野町芳野城をそれぞれ居城としていた。15世紀代には彼らは伊勢国司北畠氏に被官し、その下には井足、山辺、檢牧、赤埴、諸木野各氏の中小土豪の名がみえる。それぞれの本拠地が現在の地名ともなっており、各所に山城も残っている。

中世城館跡はこれまでに^{文献30)} 福地城跡、^{文献31)} 上井足・殿垣内城跡、^{注5)} 井足城跡などの調査が実施されているにすぎない。

神木坂古墳群の周辺

神木坂古墳群北方の天ノ森遺跡にはかつて墨坂神社が鎮座したといわれ、^{参考文献} 近くの街並は墨坂とよばれている。墨坂神社は文安6年（1449年）に天ノ森から現在の地に遷宮されている。

この「墨坂」の記載は「日本書紀」神武天皇即位前紀戊午年の条から登場する。ここには「九月の甲子の朔戊辰に、天皇、役の菟田の高倉山の巔に陟りて、^ミ城の中を瞻望りたまふ。時に國見丘の上に則ち八十葉師有り、又女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置く。墨坂に燧炭を置けり。其の女坂、男坂、墨坂の號は比に由りて起れり。」とあり、地名の起源ともなっている。

また、崇神天皇九年二月、四月の条には「九年の春三月の甲子の朔戊寅に、天皇の夢に神人有りて、^墨齒へて曰はく、赤盾八枚、赤矛八竿を以て、墨坂神を祠れ。赤照盾八枚、黒矛八竿を以て、大坂神を祠れとのたまふ。四月の甲午の朔己酉に、夢の教の依に墨坂神、大坂神を祭りたまふ。」とある。「大坂」は現在の北葛城郡香芝町逢坂付近と考えられており、墨坂、大坂はそれぞれ大和の東、西境界となっている。墨坂神社では今も祭儀に赤矛を用い、秋の祭礼には神輿が旧址の天ノ森に渡御している。

「壬中の乱」にも宇陀地方は登場し、天武天皇元年六月の条には吉野を發った大海人皇子の一行

が菟田の吾城、甘羅村、菟田郡家を経て東国へ向ったことが記されている。このときの従者のなかには先述の文祿麻呂（書首根麻呂）の名がみえる。菟田の吾城、甘羅村はいずれも現在の大字陀町内に比定されており、菟田郡家の所在地は一般に榛原町萩原・下井足周辺と考えられている。また、天武天皇元年七月の条には「將軍吹負、近江の為に敗られて、特一二の騎を率て走ぐ。墨坂に遶りて、遇菟が軍の至るに逢いぬ。」と記され、再び「墨坂」の地名が見える。これらの記述から萩原周辺は交通の要所として注目され、東国への拠点として軍事的にもその占める位置は大きいといえよう。

東国へと通じる軍事の道は、中・近世には伊勢参詣道として栄え、多くの人々が往来した。萩原にはこの頃の道標や灯籠などがあり、当時の面影を今に伝えている。

註1) 1986年 奈良県立権原考古学研究所 発掘調査

註2) 1985年 奈良県立権原考古学研究所 発掘調査

註3) 1987年 奈良県立権原考古学研究所 発掘調査

註4) 1983年 奈良県立権原考古学研究所 発掘調査

註5) 1986年 奈良県立権原考古学研究所 一部発掘調査

文献1) 安達厚二「奈良県宇陀郡宇陀川川底発見の有茎尖頭器」『古代文化』第22巻第3号 古代学協会 1970

文献2) 前国史知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊）奈良県教育委員会 1978

文献3) 柳沢一宏『榛原町遺跡分布調査概報』（榛原町文化財調査概要2）榛原町教育委員会 1987

文献4) 小泉俊夫・久野邦雄『室生ダム水没地埋蔵文化財調査概要』奈良県教育委員会 1973

文献5) 松田貞一ほか『神木坂古墳群』（榛原町文化財調査報告第2集）榛原町教育委員会 1986

文献6) 楠元野夫ほか『能峰遺跡群Ⅰ』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第48冊）奈良県教育委員会 1986

文献7) 菅谷文則ほか『丹切古墳群』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊）奈良県教育委員会 1975

文献8) 泉 武ほか「大和高原南部地区パイロット事業地内の遺跡調査概報」『奈良県遺跡調査概報1978年度』奈良県立権原考古学研究所 1979

文献9) 泉森 皎ほか「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報1979年度』奈良県立権原考古学研究所 1980

文献10) 松本洋明ほか「宇陀地方の遺跡調査2」『奈良県遺跡調査概報1980年度』奈良県立権原考古学研究所 1982

- 文献11) 榛原町史編集委員会『榛原町史』榛原町役場 1959
- 文献12) 柳沢一宏『下城・馬場遺跡』(榛原町文化財調査報告第1集) 榛原町教育委員会 1985
- 文献13) 島本 一「大和に於ける縄文式土器」『史前学雑誌』第6巻第4号 1934
- 文献14) 島本 一「内牧石器時代遺蹟とその遺物に就いて」『大和志』第4巻第4号 大和国史会 1937
- 文献15) 小泉俊夫「芳野川流域の先史遺跡」『古代学研究』第29号 古代学研究会 1961
- 文献16) 伊藤勇輔ほか『大下山遺跡』榛原町教育委員会 1977
- 文献17) 楠元哲夫ほか「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報1983年度』奈良県立橿原考古学研究所 1984
- 文献18) 寺沢 薫「榛原町池上遺跡採集の弥生時代遺物」『青陵』第31号 奈良県立橿原考古学研究所 1976
- 文献19) 楠元哲夫ほか「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報1981年度』奈良県立橿原考古学研究所 1983
- 文献20) 松本洋明ほか「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報1984年度』奈良県立橿原考古学研究所 1985
- 文献21) 前園実知雄・伊藤勇輔「奈良県榛原町の古墳時代初頭の墳墓」『古代学研究』第71号 古代学研究会 1974
- 文献22) 小泉俊夫・榎干善教『谷畑古墳』榛原町教育委員会 1974
- 文献23) 楠元哲夫ほか『宇陀・北原古墳』大宇陀町役場 1986
- 文献24) 伊達宗泰「宇陀郡榛原町拾叢古墳」『奈良県文化財調査報告書第3集』奈良県教育委員会 1960
- 文献25) 泉森 皎・河上邦彦『宇陀福地の古墳』(奈良県文化財調査報告第17集) 奈良県教育委員会 1972
- 文献26) 楠元哲夫ほか「石田1号墳」(奈良県文化財調査報告第44集) 奈良県教育委員会 1985
- 文献27) 泉森 皎ほか「文殊麻呂墓発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』奈良県立橿原考古学研究所 1983
- 文献28) 森本六爾「我國に於ける鉄板出土遺跡」『考古学』第1巻第2号 東京考古学会 1930
- 文献29) 白石太一郎ほか「榛原町萩原・谷畑中世墓地の調査」『青陵』第24号 奈良県立橿原考古学研究所 1974
- 文献30) 寺沢 薫ほか「福地城跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1984年度』奈良県立橿原考古学研究所 1985
- 文献31) 楠元哲夫ほか「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県立橿原考古学研究所

第3章 遺跡の地形と遺構・遺物の検出状況

第1節 地 形

神木板古墳群の周辺は開発が著しく、大きく地形が改変されつつある。かつて、西峠地区から神木板古墳群へと伸びる尾根が存在し、これが榛原町大字萩原と同大字下井足とを分ける境界となっていた。この尾根の北半部にはキトラ遺跡、谷畑中世墓地などが存在したが、現在は「あかね台」という住宅地になっている。

尾根南半部が今回の調査対象地となったもので、標高366mの最高所には谷畑古墳が位置する。ここから約5mの比高をもって主幹尾根を南へ約50mくだると神木板2号墳が存在する。谷畑古墳、



写真10 榛原駅前からみた神木板古墳群

神木板2号墳間の尾根の東半は榛原小学校建設にともなって削り取られている。神木板2号墳を基としてさらに尾根は南東と南西にのびる尾根に分岐する。南東にのびる尾根は約14mの比高差をもつてくだり、約50mほどの細長い尾根が続く。この先端には神木板1号墳が位置する。さらに尾根は急傾斜となって南へくだり、古墳状隆起が認められる神社へと至る。

神木板2号墳から南西にのびる尾根は神木板3号墳を経て急にくだり、やせた鞍部となり、さらに萩原ドタニ遺跡の位置する尾根へと続く。また、神木板3号墳から西の谷部へと伸びる小尾根も認められる。

第2節 遺構・遺物の検出状況

本報告の遺跡名は従来から用いられている神木板遺跡（神木板古墳群）とし、遺構名も「神木板古墳群」に順じた名称を呼称することとした。表2の主要検出遺構一覧表を参照されたい。

3次にわたる調査で尾根上からは縄文時代から室町時代に至る各時期の遺構・遺物を検出している。ここではすでに報告されている内容も含めて時代順にその概要を述べておく。

縄文時代

尾根各所から縄文土器片、石器、サヌカイト片を検出しているが、その数はあまり多くない。この時代の遺構は認められないが、縄文人の生活域に含まれていたと考えられる。

弥生時代

この時期の遺構は検出していない。萩原ドタニ遺跡において中期の細頸壺の破片が出土したのみである。

古墳時代

南半部の尾根上には、4基の古墳と7基の土壌墓を確認している。最初に築かれた古墳は谷畑古墳で（木棺直葬）、4世紀末頃に比定されている。谷畑古墳に続く古墳の築造は認められず、6世紀前半に至ってようやく神木坂1号墳（木棺直葬）が築造される。また、尾根斜面に位置する土壌墓は1号墳と同じく6世紀前半頃に比定される。このあと再び、古墳の築造は途切れ、7世紀代に至って2基の横穴式石室墳が築かれる。1基は磚廊式石室の神木坂2号墳、もう1基は無袖式の横穴式石室の神木坂3号墳である。また、5世紀後半頃の遺物も検出しているが、この頃の古墳が尾根上に存在したか否かは明らかでない。

神木坂古墳群は宇陀川をはさんで対峙する丹切古墳群とは大きく異なった群構成をしている。

奈良時代

南東尾根上で土師器甕を埋める土塚2基を確認しており、これらは土器棺と推定される。また、火葬墓と考えられる土塚も認められる。この頃の遺物は各尾根上で出土しており、広く利用されていたことがうかがえる。

平安時代

南東尾根斜面上で八咫鏡、灰釉陶器、鉄釘などが出土した木棺（木櫃）墓を検出している。鏡の年代から10世紀前半頃の築造と比定される。

室町時代

萩原ドタニ遺跡、神木坂遺跡においていわゆる中世墓を検出している。火葬施設、土葬墓が営まれており、その数は20基を数える。

表2 神木坂遺跡・萩原ドタニ遺跡主要検出遺構一覧表

遺構名	時代	概 要	遺 物	備 考
1号墳	古墳	円墳、径16m、高2.5m、周溝、割竹形木棺2、箱形木棺1、不明木棺1	須恵器、土師器、鉄刀、鉄鏃、鉄鎌、切子玉、甕下ほか	1次調査
2号墳	古墳	方墳、一辺15m、周溝、横穴式石室（磚廊式石室）	須恵器、土師器、金環、鉄釘ほか	3次調査
3号墳	古墳	横穴式石室	須恵器、土師器、新羅土器、鉄釘ほか	3次調査
土塚墓 1	古墳	土塚墓、周溝		1次調査
土塚墓 2	古墳	土塚墓、周溝	鉄刀子	1次調査
土塚墓 3	古墳	土塚墓	須恵器、鉄刀子	1次調査
土塚墓 4	古墳	土塚墓、周溝	須恵器	1次調査
土塚墓 5	古墳	土塚墓	鉄刀子、銅環	1次調査
土塚墓 6	古墳	土塚墓、周溝		1次調査

遺構名	時代	概 要	遺 物	備 考
土 塚 墓 7	古墳	土塚墓、周溝		3次調査
S K - 0 1	?	楕円形土坑		1次調査
S K - 0 2	奈良	土器棺	土師器(杯、甕)	1次調査
S K - 0 3	平安	木棺墓(木曜墓)	八稜鏡、灰釉壺、鉄釘	1次調査
S K - 0 4	?	方形土坑		1次調査
S K - 0 5	?	円形土坑		1次調査
S K - 0 6	?	円形土坑、焼土	炭	1次調査
S K - 0 7	?	円形土坑、焼土	炭	1次調査
S K - 0 8	?	円形土坑		1次調査
S K - 0 9	中世?	土葬墓?		1次調査
S K - 1 0	奈良	土器棺?	土師器(甕)	1次調査
S K - 1 1	?	楕円形土坑	土師器	1次調査
S K - 1 2	奈良	火葬墓?	土師器(皿)	1次調査
S K - 1 3	?	楕円形土坑、焼土	土師器(皿)	1次調査
S K - 1 4	室町	円形土坑	土師器(土釜)	1次調査
S K - 1 5	?	円形土坑		1次調査
尾根5・6区ピット群	?	円形土坑		1次調査
S K - 2 1	古墳	円形土坑	須恵器	1次調査
S K - 2 2	?	隅丸方形土坑	土師器	1次調査
ドナニ遺跡ピット群	?	ピット		1次調査
23号墓(S K-23)	室町	円形土坑、火葬施設	炭、人骨	1次調査
24号墓(S K-24)	室町	楕円形土坑、火葬施設	炭、人骨、土師器	1次調査
25号墓(S K-25)	室町	円形土坑、火葬施設	炭、人骨	1次調査
26号墓(S K-26)	室町	円形土坑、火葬施設	炭、人骨	1次調査
27号墓(S K-27)	室町	楕円形土坑、火葬施設	炭、人骨	1次調査
28号墓(S K-28)	室町	円形土坑、火葬施設	炭、人骨、土師器	1次調査
29-1号墓(S K-29)	室町	円形土坑、火葬施設	炭、人骨、土師器	1次調査
29-2号墓(S K-29)	室町	楕円形土坑、土葬墓、桶状棺	人骨	1次調査
30号墓(S K-30)	室町	楕円形土坑、火葬施設	炭、人骨、土師器	1次調査
31号墓(S K-31)	室町	楕円形土坑、火葬施設	炭、人骨	3次調査
32号墓(S K-32)	室町	円形土坑、火葬施設	炭	3次調査
33号墓(S K-33)	室町	隅丸長方形土坑、土葬墓	人骨	3次調査
34号墓(S K-34)	室町	楕円形土坑?、土葬墓	人骨	3次調査
35号墓(S K-35)	室町	隅丸長方形土坑、土葬墓	鉄釘、人骨	3次調査
36号墓(S K-36)	室町	長方形土坑、火葬施設	炭、人骨	3次調査
37号墓(S K-37)	室町	円形土坑、火葬施設	炭、人骨	3次調査
38号墓(S K-38)	室町	円形土坑、土葬墓	人骨	3次調査
39号墓(S K-39)	室町	楕円形土坑、土葬墓	人骨	3次調査
40号墓(S K-40)	室町	長方形土坑、土葬墓		3次調査
41号墓(S K-41)	室町	長方形土坑、土葬墓		3次調査
S K - 4 2	室町	円形土坑		3次調査
S K - 4 3	?	円形土坑	炭	3次調査
S K - 4 4	?	円形土坑	炭	3次調査
S K - 4 5	?	方形土坑(落ち込み状遺構)		3次調査

第4章 遺跡の調査

第1節 神木坂西尾根地区

1 位置と現状 (図版3・4)

神木坂3号墳からは南へのびる主幹尾根のほかに、西方へ約25mの比高をもって下る小尾根が認められる。

3号墳から西側へ急な傾斜をもって下るこの小尾根は先端部付近に至ると、比較的ゆるやかな傾斜となる。この先端部付近で古墳状の隆起は認められないが、中世墳墓等の存在が予想されるため、試掘調査を実施することとなった。

また、この小尾根を神木坂西尾根地区と呼称することとした。

2 調査の概要 (図版4・6)

尾根稜線上に長さ48m、幅3mのトレンチを設定した。腐植土及び黄褐色土を掘り下げると、深さ約20cm～40cmで砂質及び砂礫の地山面に達する。この基本層序は後述する第3次調査時と同様である。第2層の黄褐色土中から榛原石片、中世の土師器細片が出土したことから、地山検出面の精査を重ねたが、明確な遺構は認められない。



写真11 調査前の西尾根地区 (南から)



写真12 調査後の西尾根地区 (西から)

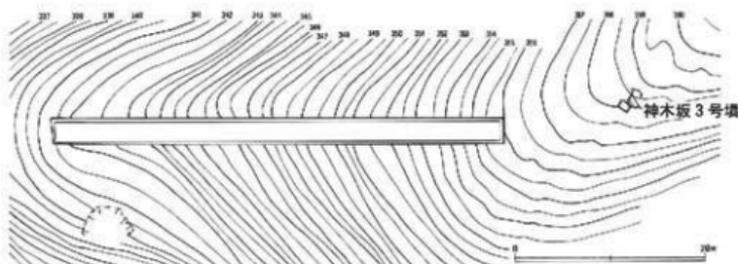


図4 西尾根地区トレンチ位置図

第2節 神木坂2号墳

1 位置と現状(図5、図版7)

2号墳は谷畑古墳から南へとのびる主幹尾根が南東と南西方向へと分岐する基部に位置する。分岐部の最高所は標高363mをはかり、以前から古墳の存在(奈良県遺跡地図番号 15-B-3)が予想されていた地点である。この地点は『神木坂古墳群』において「神木坂4号墳」と呼称している。調査の結果、自然地形の小隆起を検出したのみで古墳でないことが判明している。

この最高所から傾斜をもってやや南へ下った地点に2号墳は築かれている。ここからの眺望は比較的良く、南西にのびる尾根、谷部を見おろしながら、宇陀川、芳野川流域の各所をみわたせる。



写真13 調査前の神木坂4号地点

調査前の状況では明確な盛り上がり、及び掘り割り等は認められず、ただ南へゆるやかに傾斜する斜面である。地形測量の結果からも検討を加えたが、墳丘規模は明らかでない。このゆるやかな斜面には榛原石の一部が露出、散乱しており、露出石材の南側にはくぼみが認められることから、横穴式石室が盗掘の禍にあってることが予想された。また、露出石材は石室羨道部の天井と推定されたが、内部構造等については明らかでなかった。

2 墳丘と周溝(図6、図版8)

埋葬施設(横穴式石室)の周辺には南を除く3方に地山を穿った周溝が認められ、コの字状にめぐっている。断面形態はU字形を呈し幅1.8m~2.5m、深さ0.6m~0.95mをはかる。溝底の比高は地形にしたがって横穴式石室背後の北辺部分が最も高く、東西両辺は南にいくほど低くなっている。北辺の最高所と東西両辺の南端とでは約1.75mの比高差が認められる。東西両辺の周溝南端は明確な掘り込みがなされておらず、いずれも南斜面へと消えている。南辺は急斜面となっており、本来から溝は穿たれていなかったと推定される。

周溝内の堆積土は4層に大別でき、基本的には淡黄茶色砂質土、黄茶灰色土、暗黄灰色土、淡茶色粘質土の順に堆積している。

この周溝から東西12.7m、南北14mをはかる方墳となり、周溝外側も含めるとその規模は一辺15.5mとなる。腐植土及び流土下はすぐに地山となっており、現状ではほとんど盛土は残存していない。また、後世の攪乱、開墾などにより墳丘は削平され、盛り上がりは認められない。盛土がほとんど残っていないため、墳丘の築成状況の詳細は明らかでないが、砂質土と粘質土とを交互に積み上げていたと推定できる。ゆるやかな傾斜面に周溝と墓壇が穿たれ、墓壇内に石室が構築された後、墳丘の築成が開始されるが、現状は墳丘築成前の状態に近いといえよう。

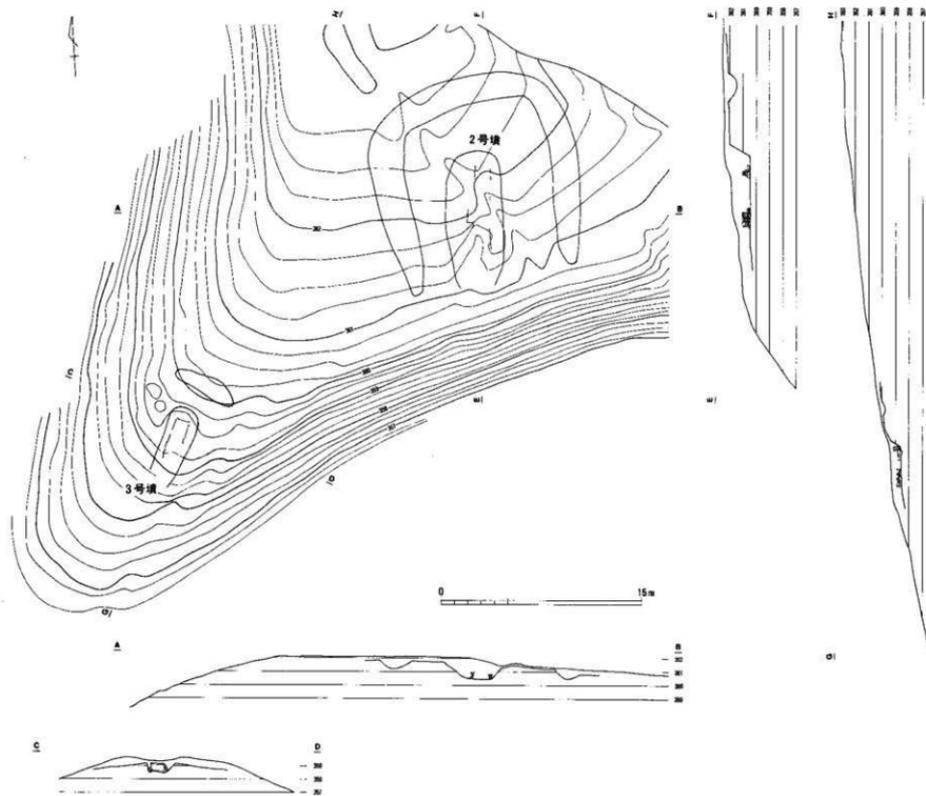


图5 2号墳・3号墳測量图(調査前)

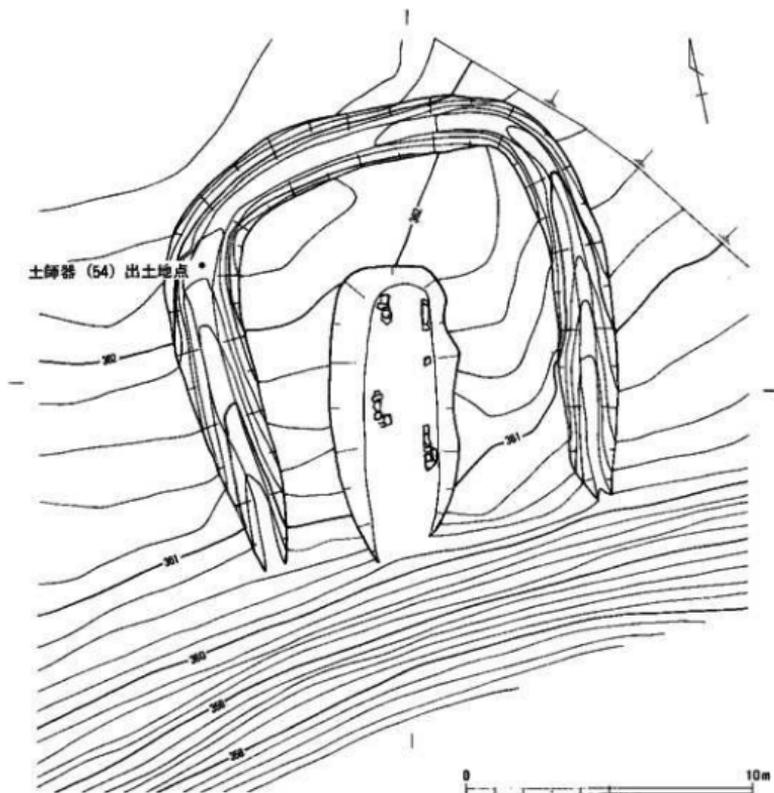


図6 2号墳測量図(調査後)

3 埋葬施設

(1) 墓塚(図10、図版17)

後述する横穴式石室をおさめる墓塚は、地山を穿って形成されており、その平面形態は不整な楕円形を呈する。規模は南北長13.5m、東西最大幅4.65m、北側での最大高は1.32mをはかる。墓塚壁は急傾斜に掘り込まれている。西側の壁面は比較的ゆるやかとなっており、壁面のなかほどには細長い平坦面が形成され石室は墓塚の東に偏って構築されている。墓塚底は北から南へとゆるやかに傾斜し、南北の比高差は40cmをはかる。石室構築に際しては、墓塚内を暗黄茶色砂質土を用いてほぼ水平に整地し、石室基面を形成している。



写真14 2号墳東西畔西半の土層断面

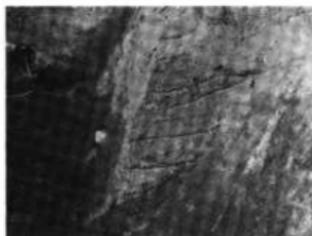


写真15 2号墳東西畔東半の土層断面



写真16 2号墳南斜面の土層断面



写真17 2号墳羨道部攪乱土の状況

なお、墓城南半部には淡黄茶色土、黒灰褐色粘質土といった黒っぽい攪乱土が認められ、古墳南斜面では黒灰色粘質土（旧表土）、その上に淡茶色土、淡褐色土などが堆積する。

(2) 横穴式石室（図8・9、図版9・14～16、写真19～21）

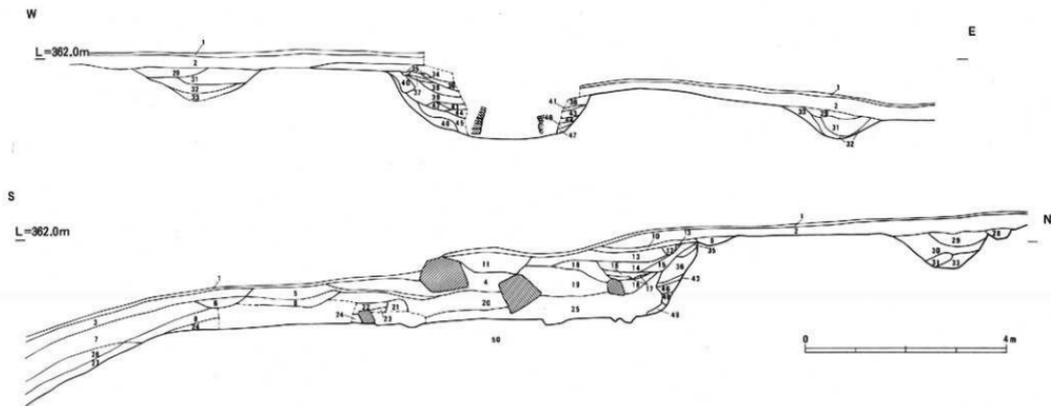
南に開口する横穴式石室で、この主軸は墓城主軸とほぼ一致している。板状の椽原石を積み上げて構築された磚櫛式石室であるが、石室は後世の攪乱、石材の抜き取りなどによって大半の石材を失っている。石室の平面形態は通例の横穴式石室のさらに奥に奥室が取り付くものと推定されるが、詳細な石室規模、形態など不明点が多い。石材は奥室の東西両壁の一部、玄室右袖部の一部、羨道東壁の一部が残っていたにすぎない。これらはいずれも石室下半部のみで、上半部の石材は認められない。



写真18 2号墳天井石検出状況

天井石の架構状況、構造なども明らかでないが、玄室の攪乱土中から2石の天井石を2次移動した状態で検出している。

石室規模は残存石材から全長6.1m、羨道長1.95m、奥室長1.15m、奥室幅1.17m以上、玄門幅1.2mをはかる。石室主軸から羨道西壁の位置も復原でき、羨門幅1.36mと推定される。羨道の平面形態は「ハ」の字形を呈し、羨門部と玄門部との幅を比較すると前者が16cm広い。



- | | | |
|---------------------------|---------------------------|-------------------------|
| 1. 腐植土 | 19. 淡茶色土 | 37. 黄灰色土 (やや粘質) |
| 2. 黄褐色土 (やわらかい) | 20. 淡茶色土 (上面に炭片を若干含む) | 38. 淡黄褐色砂質土 |
| 3. 黄褐色土 | 21. 黄褐色土 (やや粘質) | 39. 暗黄灰色土 |
| 4. 淡黄褐色土 | 22. 淡茶色砂質土 | 40. 淡黄褐色砂質土 (鳩山ブロック土含む) |
| 5. 茶灰色土 (硬代) | 23. 淡黄褐色砂質土 | 41. 黄褐色砂質土 I |
| 6. 黄灰色土 | 24. 黒灰褐色粘質土 (中阻) | 42. 淡黄褐色砂質土 (鳩山ブロック含む) |
| 7. 淡褐色土 | 25. 淡茶色土 (やや砂質、礫層石片を多く含む) | 43. 淡茶色砂質土 |
| 8. 淡黄褐色土 | 26. 淡茶色土 | 44. 黄褐色砂質土 II |
| 9. 淡茶色粘質土 | 27. 黒灰色粘質土 (粘状土) | 45. 淡黄褐色土 (礫層石片含む) |
| 10. 淡茶褐色土 | 28. 暗灰色土 (SK-44、炭片を多く含む) | 46. 黄灰色砂質土 |
| 11. 黄褐色土 (やわらかい) | 29. 淡茶色粘質土 | 47. 暗黄褐色砂質土 |
| 12. 暗黄褐色土 | 30. 暗茶色粘質土 | 48. 黄褐色砂質土 |
| 13. 暗茶色土 | 31. 暗黄灰色土 | 49. 黄褐色土 (礫層石片含む) |
| 14. 黄褐色粘質土 | 32. 黄褐色土 | 50. 黄褐色粘質土、黄灰色砂質土 (地山) |
| 15. 淡黄褐色土 (やや粘質) | 33. 淡黄褐色砂質土 | |
| 16. 黒灰色土 (石片を多く含む) | 34. 暗黄褐色土 | 16, 17 SK-42 |
| 17. 淡茶色粘質土 (やや硬色、炭片を若干含む) | 35. 黒灰色粘質土 | 29-33 周溝埋土 |
| 18. 暗茶色土 (やや粘質) | 36. 淡黄褐色砂質土 | 34-49 礫層埋土 |

図7 2号墳土層断面図

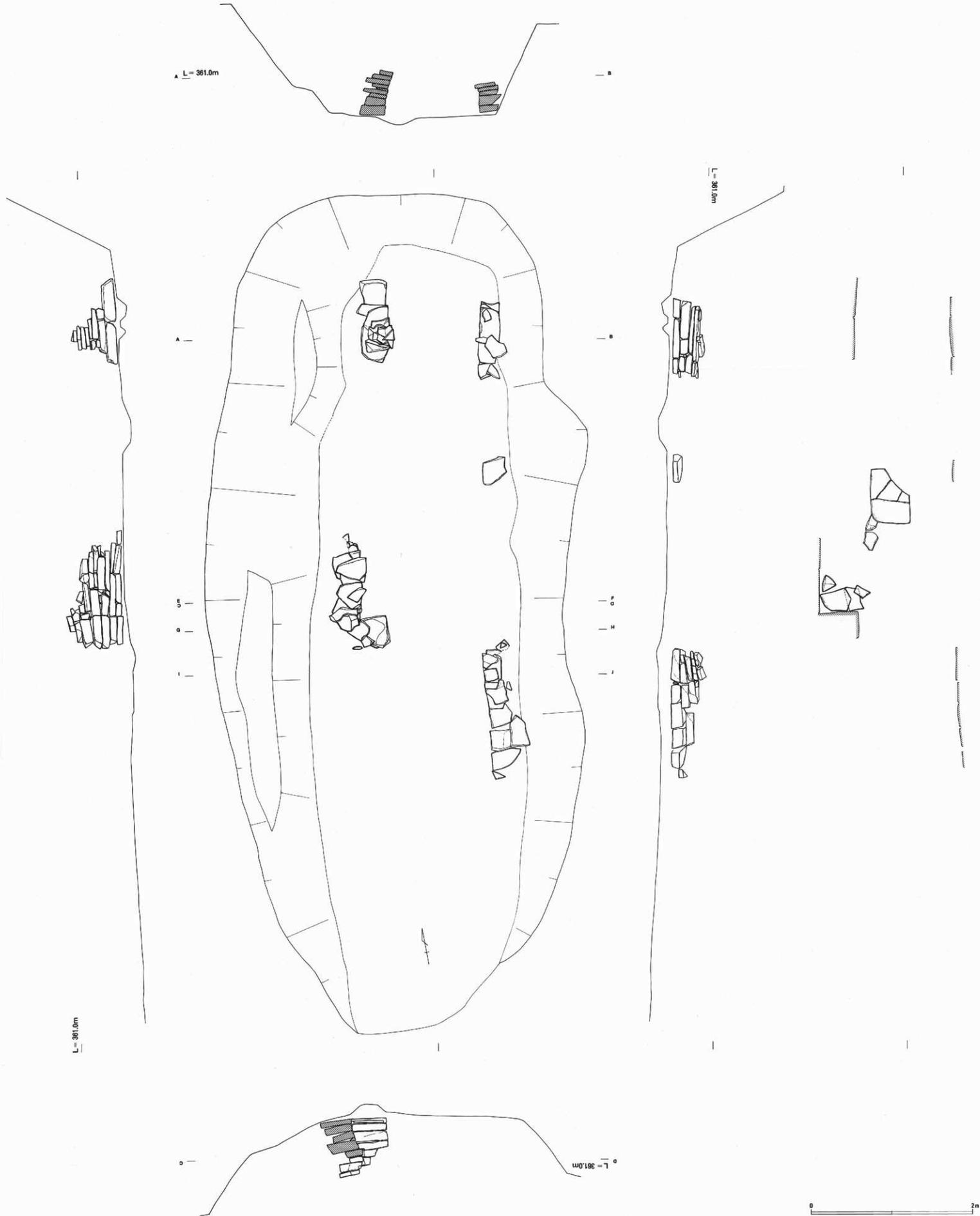


图8 2号墳横穴式石室实测图(1)

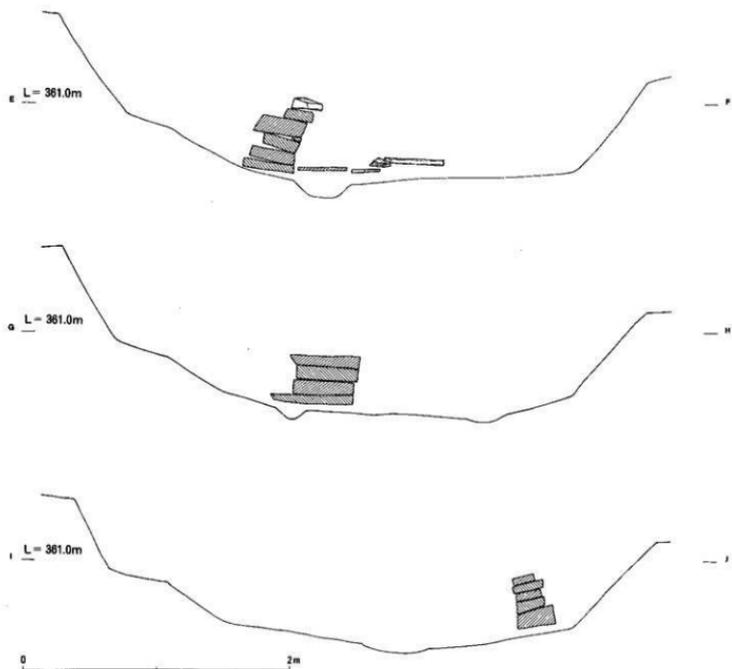


图9 2号填横穴式石室夹测图②

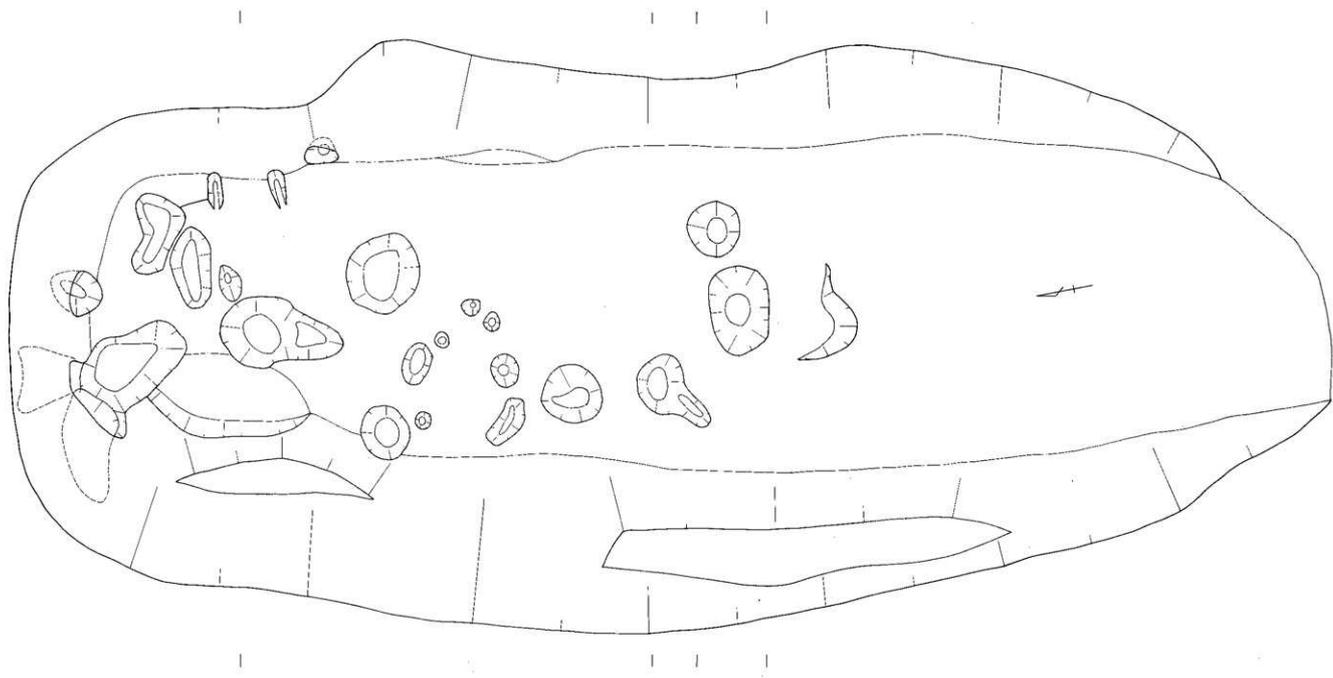


图10 2号墳墓遗址平面图

なお、各壁面とも石材を若干加工して整えているものの、粗面のままである。また、漆喰の塗布は認められない。

奥室は東西両壁の一部が残っていたにすぎず、奥壁および玄室への取り付け部分の詳細は明らかでない。

東壁は5段分の石材が認められ、延長230cm、現存高40cmをはかる。長さ28~48cm、厚さ5~11cmの椽原石の隙間に砂質土を詰めながら、横目地は通るが縦目地は通らないように伍ノ目積みをおこなっている。また、基底石は背後を若干高くし、内傾気味に据えられ、2段目以上は除々に持ち送りがなされている。これらの積み方は各壁面ともほぼ同様である。2段目の奥壁寄りの石材が比較的大きく、厚さ11cmをはかるのに対し、基底石は7cm、3~5段目は5cmと比較的薄い。

西壁は8段分の石材が残っており、延長107cm、高さ58cmをはかる。基底石2石は長さ52~54cm、厚さ13~14cmと最も安定感があるのに対し、他の石材は厚さ4~8cmと比較的薄い。壁面は約10度前後の傾斜をもって内傾している。

玄室は西壁とこれに接する袖部の石材が残る。西壁は長さ17~54cm、厚さ4~11cmの石材が6~8段分認められ、3段目から大きく内傾する。残存規模は延長130cm、高さ70cmをはかる。石材と石材との隙間には小石を詰め安定をはかっている。壁面北端の石材は攪乱により崩壊し、全体的に内傾している。袖部の石材は6段分認められるが、上2段は大きく欠けている。下4段は厚さ7~11cmとややばらつきがあるが、平面形を35~40cm×38~43cmのほぼ正方形にそろえ、やや内傾気味に積み上げている。右袖部幅は43cmをはかる。

なお、袖部とこれに接する西壁の石材は、原則として袖部→西壁の順に交互に積み上げられており、各石材の安定をはかっている。

羨道は東壁が延長150cm分残っている。最高5段分の石材が認められ、この高さは45cmをはかる。



写真19 2号墳奥室石材検出状況



写真20 2号墳石室右袖部の状況



写真21 2号墳西側壁の状況

5 石の基底石は長さ24~42cm、厚さ10~14cmと比較的安定したものが並べられ、その上に長さ28~37cm、厚さ9~5cmのやや小形の石材を積み上げている。

石室床面の詳細な状況は明らかでないが、攪乱土及び玄室内からは石室石材よりも薄い板石を検出していることから、本来の床面は板石が敷かれていたと考えられる。玄室右袖部に比較的多くの板石が認められる。

完掘後の墓壇底は後世の攪乱により多数のピットが穿たれ、明確な石材ほりかたは認められない。墓壇底隅を平らに形成し、その上に各石材を据えたと考えられ、奥室西壁部分で最も明瞭な平坦面(120cm×52cm)が認められる。石材を据えたのち、基底石を整地土で埋め、石室床面を形成したと考えられる。



写真22 2号墳羨門付近石組検出状況

4 後世の遺構 (図11・12、図版7、写真22)

露出した天井石の南側から調査を進めていくと、攪乱土(黒灰褐色粘質土)中から40cm×50cm×10cm程度の石材3石が、略コの字形に置かれた状態で検出した。石材の大きさ、形態から本来、横穴式石室の基底石に用いられていたものと考えられる。後世の木棺の棺台遺構とも推定できるが、この3石の用途は明確にできなかった。

また、この石材のすぐ西側に延長115cm、最大高40cm

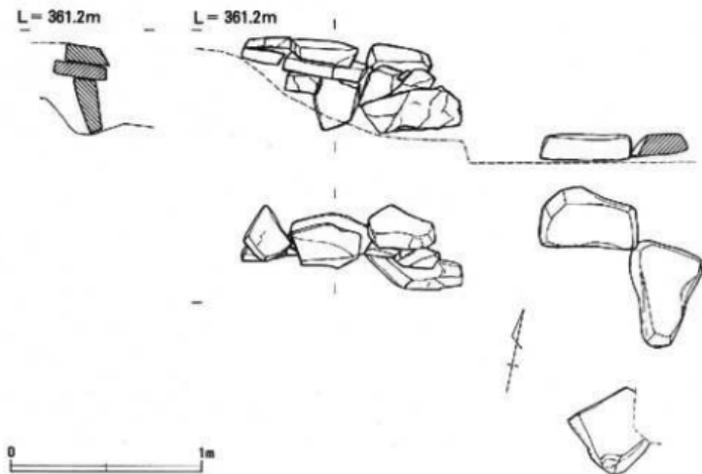


図11 2号墳羨門付近石組実測図

をはかる割石2～3段積の小石垣（石組）を検出している。石組東半部は攪乱土（黒灰褐色粘質土）上に、西半部は地山を穿って積み上げられている。当初、2号墳にともなう列石とも推定されたが、攪乱土との関係から後世の遺構と考えられる。この遺構の性格は明らかでない。

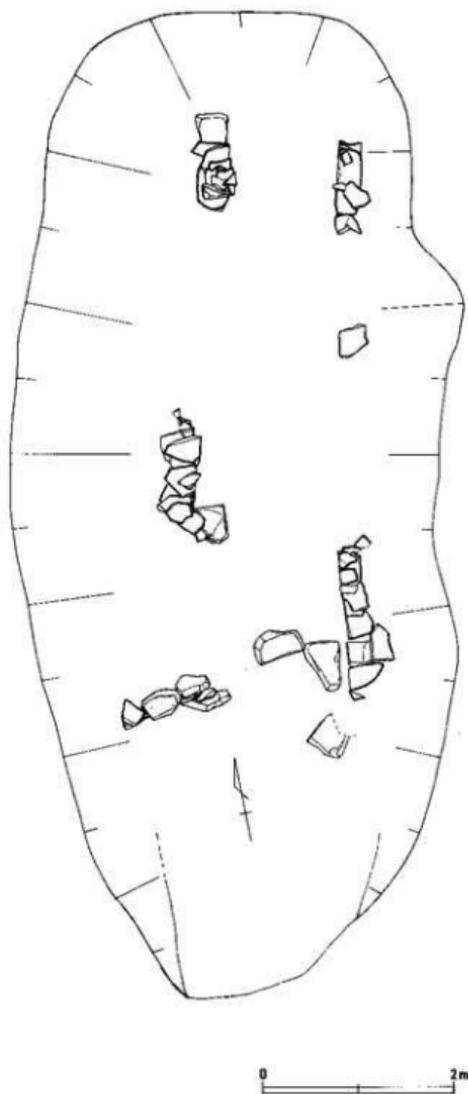


図12 2号墳羨門付近石組位置図

5 遺物の出土状況

(1) 石室内の遺物出土状況 (図13、図版10~13、写真23・25)

石室内は著しい攪乱により、遺物はほとんどが攪乱土中からの出土であり、原位置を保っていない。石室床面近くの出土状況は、玄室右袖部の板石上に土師器 杯身(1)が正位で出土したほかは須恵器、土師器、鉄釘などが散乱している。比較的、玄室付近に土器片が多いのに対し、奥室では鉄釘がまとまって出土している。その他、玄門部付近では針金状鉄製品 (51)、奥室 (奥壁付近) では金環 (53) が出土している。

(2) 周溝内の遺物出土状況 (図6、図版18、写真24)

4層に分かれる埋土中からもいくらかの土器片、鉄釘片が出土しているが、周溝底で置かれた状態で出土したものは認められない。

北西隅の底に近い黄茶灰色土 (第3層) から土師器杯身 (54) が逆位で出土している。この他、この3層からは土師器細片、須恵器 (甕) 細片が出土しているが図示しえない。また、周溝北東隅付近の淡茶色粘質土 (第1層) からは須恵器 平瓶 (55)、暗黄灰色土 (第2層) からは鉄釘片 (56~58) が出土している。

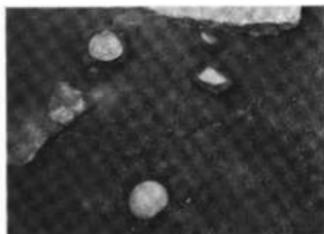


写真23 2号墳石室内遺物出土状況



写真24 2号墳周溝内土師器出土状況

6 出土遺物

(1) 石室及び周辺出土の遺物

土器 (図14・15、図版34、表3)

土師器 杯身 (1、2)

1は石室右袖部の板石から正位で出土しており、口径9.6cm、器高3.2cmをはかる。底部は丸味をおび、口縁部は内彎気味に外上方にのびる。口縁端部は、やや尖り気味である。底部外面には指頭圧痕が認められ、その他は内外面とも横ナデ調整を施す。また、内面には二段の放射状暗文を施している。

2は口径9.9cm、器高3.2cmをはかる。口縁端部がやや肥厚し、内傾する面が認められるほかは、形態、技法とも1のほぼ同様である。石室内から逆位で出土している。

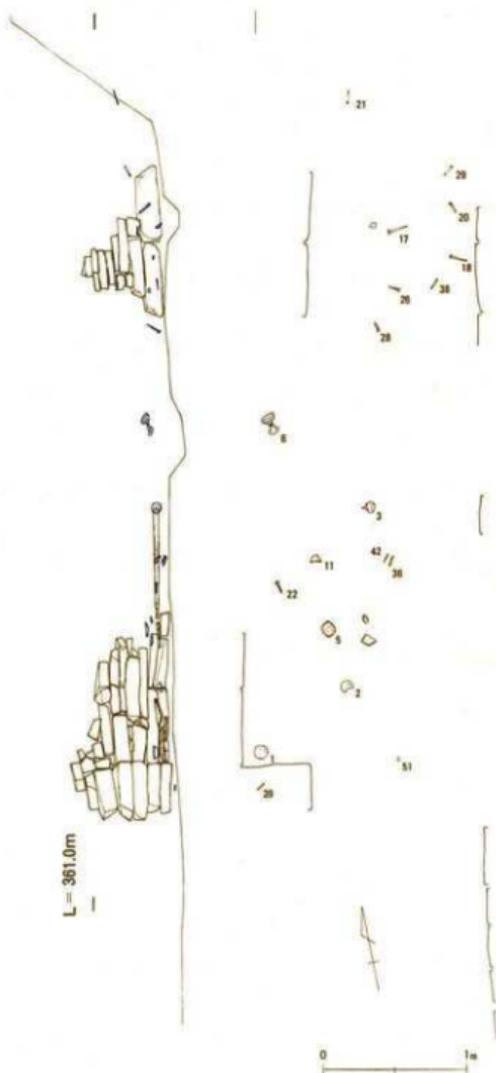


图13 2号墳石室内遺物出土状況
(番号は遺物実測図番号と同じ)

土師器 小壺(3)

口縁部を欠くほかは、ほぼ完形で、頸部径3.7cm、体部最大径7.2cmをはかる。口縁部はほぼ直線的に外上方にのびる。体部最大径は $\frac{1}{2}$ 下位にあり、平坦な底部へとつながり、全体に安定感がある。口縁部外面には縦方向のヘラミガキ、体部外面には横方向(水平方向)のヘラミガキを施す。内面は横ナデ調整、ナデを施し、口縁部と体部、体部中位の2ヶ所に明瞭な接合痕が認められる。石室内(玄室)からの出土である。

土師器 平瓶(4)

口縁部とこれに接する体部の破片である。大半を欠くため、その詳細は明らかでないが口径5.8cmをはかる。口縁部は外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。内外面ともナデが施され、内面には体部形成時と口縁部接合時の接合痕がそれぞれ認められる。

土師器 壺(5)

体部下半の破片で、体部最大径11.4cmをはかる。やや丸味をおびた底部とゆるやかにカーブする体部からなり、体部最大径は $\frac{1}{2}$ 上位に認められる。底部外面はヘラケズリ調整、その他は内外面とも横ナデ調整を施す。内面には粘土のまき上げ痕が認められる。

須恵器 高杯(6・7・8)

6は玄室内の攪乱土中から出土した口径10.6cm、器高12.2cmをはかる完形品である。口縁部は、

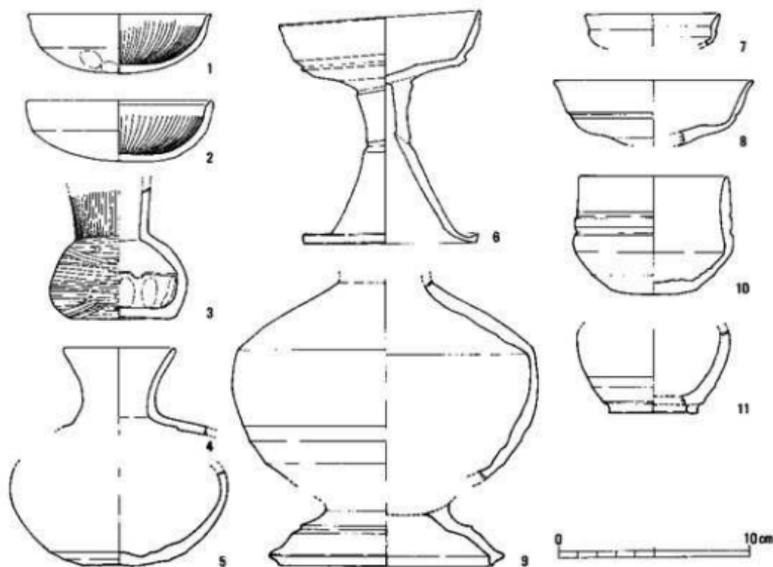


図14 2号墳出土土器実測図

内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめる。口縁部と杯底部との境界には1条の鈍い凹線をめぐらし、凹線下は稜線状を呈する。脚部は上半部が細長く、下半部は大きくひろく。脚部なかに鈍い凹線がめぐるが、透しは穿たれていない。脚端部は上方へ尖り気味にのび、この断面形態は三角形を呈する。杯底部外面は回転ヘラケズリ調整、底部内面中央はナデ調整（仕上げナデ）、その他は内外面とも回転ナデ調整を施す。

7は石室内から出土した口縁部の破片で、復原口径が7.0cmをはかる。口縁部は上方にのび、中位で外上方に屈曲している。

8も石室内から出土した口縁部の破片である。口縁部は外上方にのび、この端部は外反し、丸くおさめる。口縁部と杯底部との境界のやや上方には1条の浅い凹線をめぐらす。内外面とも回転ナデ調整を施す。

須恵器 台付長頸甕（9）

石室内各所から出土した体部と脚部の破片で、体部最大径16cm、脚部径12.4cmをはかる。体部最大径は体部のなかほどより上位にあり、この上方は鈍く屈曲した肩部となっている。脚部のなかほどには凹線と鈍い稜線が認められる。脚端部は外反気味に丸くなり、内側には下方にのびる突起を有する。底部外面は回転ヘラケズリ調整、その他は内外面とも回転ナデ調整を施す。

須恵器 椀（10）

復原口径7.8cm、器高6.2cmをはかる。ほぼ平坦な底部から口縁部は外上方にのび、大きく屈曲して内傾気味に上方にのびる。なかほどには二条の凹線をめぐらす。底部外面は回転ヘラケズリ調整、その他は内外面とも回転ナデ調整を施す。

石室内各所からの出土である。

須恵器 小形瓶（11）

石室内攪乱土および古墳周辺から出土した体部下半の破片で、体部最大径8cmをはかる。底部外面には断面形態が四角形の高台が貼り付けられている。体部は内彎しながら外上方にのびている。体

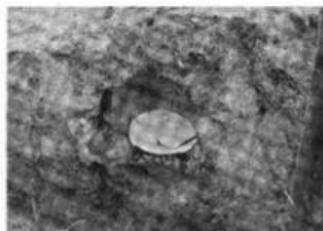


写真25 2号墳攪乱土内の土師器皿出土状況

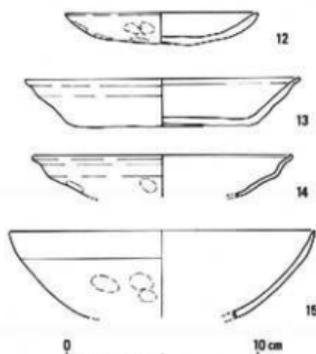


図15 2号墳出土土器実測図

部外面の下半には回転ヘラケズリ調整、その他は内外面とも回転ナデ調整を施す。

土師器 小皿 (12)

羨道部の淡黄茶色土中から出土した口径10.2cm、器高1.7cmの完形品である。底部はやや丸味をおび、口縁部は外上方にゆるやかにのびる。内面は右方向の横ナデ調整を施す。外面はナデ、指頭圧痕、布・ワラ状の痕跡が認められる。色調は黄灰色を呈する。(写真25)

土師器 杯 (13、14)

13は2号墳北東部からの出土で、14.4cmをはかる。口縁部は外反気味に外上方にのび、底部はほぼ平坦である。底部外面はナデ、その他は内外面とも横ナデ調整を施す。

14は石室攪乱土内から出土しており、復原口径13.6cmをはかる。口縁部は外上方にのび口縁端部は外方に屈曲し、上方に軽くつまみ上げる。器壁は比較的、全体に薄い。

黒色土器 椀 (15)

石室内攪乱土中から川土した破片で復原径16cmをはかる。口縁部は内彎しながら外上方にのび、口縁端部を尖り気味におさめる。内面は水平方向(横方向)のヘラミガキ、口縁上部に横ナデ調整を施す。内面および口縁上部外面には炭素を吸着させている。

鉄製品 (図16・17・18、図版34・35・36、表5)

釘 (17~50)

石室内及びその周辺から34点の角釘が出土している。これらの釘は頭部の形態、太さなどから次の3グループに大別される。

A (17~28) 頭部の形態が円形を呈する新状の釘である。円形頭部径は2.0cm~2.6cmをはかる。

また、身部の太さは0.5cm~0.7cmをはかり比較的太いものが多い。21は円形頭部径1.3cm、身部の太さ0.3cm×0.5cmと他のものよりやや小形である。

B (29~35) 頭部が前方に張り出しその形態はL字状を呈する。いずれも頭頂部は丸味をおび、身部の太さは0.6cm~1.0cmをはかる。29の頭部は他のものより比較的小さい。35は身部のみで頭部は残存していないが、身部太さから、このグループに含まれるものと思われる。

C (36~50) 頭部の形態は折り返され、やや二方に張り出すものである。身部の太さは0.3cm~0.6cmをはかり、細身のものが多い。38、40、41、43、44、46~50には頭部が認められないが、身部の太さからこれに含まれると考えられる。

これらの釘の多くには木質が遺存している。個々の釘の詳細な数値、状況等は表5にまとめている。

刀子 (16)

身部の破片で現存長2.3cm、幅1.1cm、棟厚0.2cmをはかる。先端部、茎部等の詳細は明らかでない。

針金状鉄製品 (51)

現存長約9cmをはかり、一方がラセン状を呈する。断面形態は円形を呈し、径0.2cm~0.3cmをはかる。

用途不明鉄製品 (52)

現存長3.3cm、厚さ0.5cmをはかる鉄製品である。残存している形態から本来は環状を呈していたと考えられ、直径約4.8cm、円孔径約1.2cmと推定される。断面形態は台形状を呈し、長辺長1.8cm、短辺長1cmをはかる。

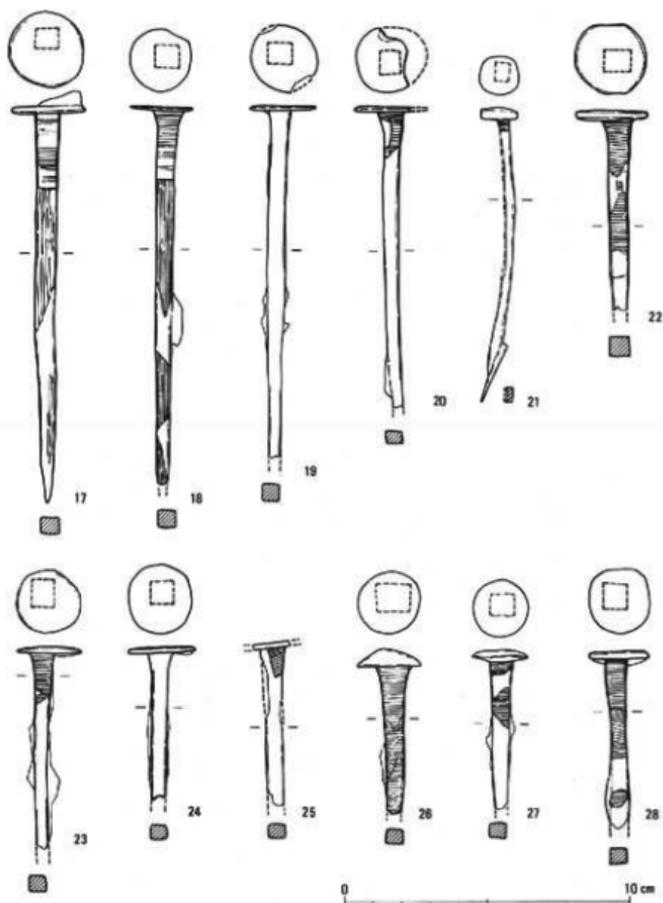


図16 2号墳出土鉄釘実測図(1)

銅製品 (図19、図版34)

金環 (53)

奥室内の攪乱土中から出土している。銅芯金張りであるが、多くの金張りが剥れ緑青がふき、錆化が著しい。直径は1.7cm~1.8cmをはかる。断面形態は円形を呈し、径0.3cm~0.4cmをはかる。

(2) 周溝出土の遺物

土器 (図20、図版37、表4)

土師器 杯 (54)

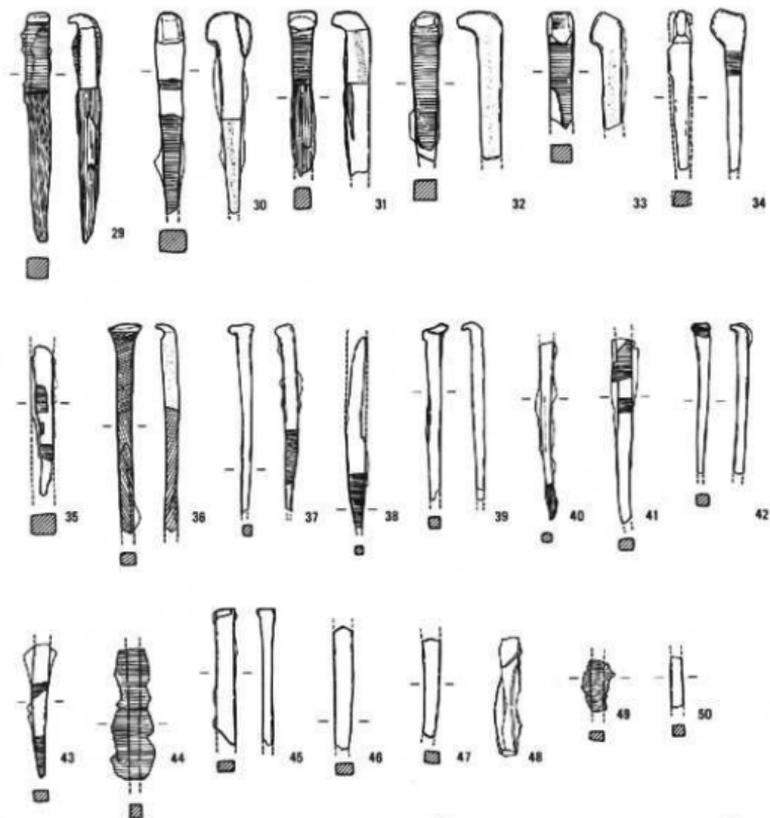


図17 2号墳出土鉄釘実測図(2)

口径11.8cm、器高3.5cmをはかる。底部は丸味をおび、口縁部は内傾気味に上方へのびる。口縁端部は内傾気味におさめる。内面および口縁部外面は回転ナデ調整を施し、底部外面にはナデ、指頭圧痕が認められる。周溝（北西側）下層から出土である。

須恵器 平瓶 (55)

北東側の周溝上層およびその周辺から出土した破片である。底部は平底で、体部は外上方にのびる。肩部は鋭角の線をなし、体部上面は丸味をおびる。口縁部は外反気味に外上方にのびる。また、体部上面には断面形態が長方形を呈する肥手の痕跡が認められる。内外面とも回転ナデ調整を施す。

鉄製品 (図21、図版37、表6)

釘 (56~58)

周溝第2層より3点の角釘片が出土している。56は頭部、肩部先端を欠くが、現存長5.8cmをはかり、最も長いものである。57・58は身部の破片で詳細は不明だが、同一個体の可能性も考えられる。

7 小結

この磚積みされた横穴式石室は攪乱が著しいものの、奥室、玄室、羨道からなることが判明した。出土土器（須恵器、土師器）は、Ⅲ型式1段階、飛鳥Ⅱ期に比定され、この古墳の築造年代は7世紀第2四半期と考えられる。詳細は第6章第1節を参照されたい。

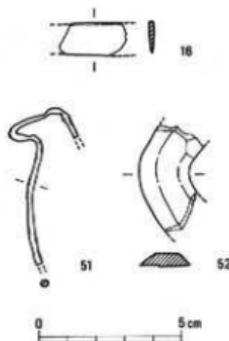


図18 2号墳出土鉄製品実測図

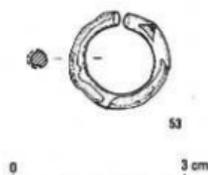


図19 2号墳出土金環実測図

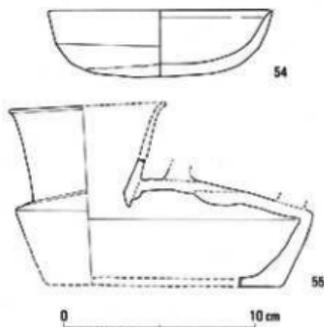


図20 2号墳周溝出土土器実測図

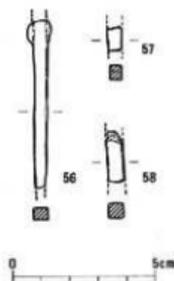


図21 2号墳周溝出土鉄釘実測図

表3 神木坂2号墳出土土器観察表

神図番号	図版番号	器種・器形	法 量(cm)	形 態 の 特 徴
14-1	34-1	土師器 杯身	口径 9.6 器高 3.2	丸い底部からやや内彎気味に外上方にのびる口縁部へとつながる。口縁端部はやや外反し、尖り気味におさめる。底部からゆるやかなカーブのままのびるため口縁部と底部との境界は明確でない。
14-2	34-2	土師器 杯身	口径 9.9 器高 3.2	丸い底部からゆるやかなカーブのまま、やや内彎気味に外上方にのびる口縁部へとつながる。口縁端部は内傾するゆるやかな凹面が認められる。口縁部と底部との境界は明確でない。
14-3	34-3	土師器 小壺	頸部径 3.7 体部最大径 7.2 現存高 7.0	底部は、ほぼ平坦となっており、丸味をおびた体部へとつながる。体部最大径は $\frac{1}{4}$ 下方にあるため、安定感がある。口縁部は、ほぼ直線的に外上方にのびる。
14-4	34-4	土師器 平瓶	口径 5.8 現存高 4.6	体部の大半を欠くため、その詳細は明らかでない。口縁部は外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめる。
14-5	34-5	土師器 壺	体部最大径 11.4 現存高 5.1	やや丸味をおびた底部からゆるやかなカーブのまま体部へとつながる。体部最大径は $\frac{1}{4}$ 上半に認められる。
14-6	34-6	須恵器 高杯	口径 10.6 脚部径 9.2 器高 12.2	口縁部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。口縁部と杯底部との境界には1条の鈍い凹線をめぐらし、凹線下は稜線状をなす。脚部は長脚で透しがなく、上半部は細長く、下半部は大きくひろく。脚部なかほどに鈍く浅い凹線がめぐる。脚端部は上方へ尖り気味におさめ、断面形態は三角形を呈する。
14-7	34-7	須恵器 高杯	復原口径 7.0 現存高 1.7	口縁部は上方にのび、中位で外上方に屈曲する。口縁端部は尖り気味におさめる。
14-8	34-8	須恵器 高杯	復原口径 10.4 現存高 3.4	口縁部は外上方にのびる。口縁端部は外反し丸い。口縁部と杯底部との境界のやや上方に1条の浅い凹線をめぐらす。底部は脚部へと徐々に下り、器壁は厚い。
14-9	34-9	須恵器 台付長頸壺	体部最大径 16.0 脚部径 12.4	体部最大径は体部の約 $\frac{1}{2}$ 上位にあり、そのやや上方に肩部が位置する。肩部は鈍く屈曲し、丸味をおびた底部へと続く。脚部はやや内彎気味に外下方にのび、なかほどに凹線をめぐらし、凹線の上は鈍い稜線をなす。脚端部は外反気味に丸くおさめ、内側には下方にのびる杯蓋のかえり状の突起を有する。この突起の断面形態は三角形を呈する。

技 法 の 特 徴	色 調・胎 土・焼 成	備 考
口縁部の内外面、底部内面に横ナデ調整。底部外面には指頭圧痕。内面には二段の放射状暗文。	色 調 橙 色 胎 土 精良 焼 成 良好	石室右袖部出土 完形
口縁部の内外面、底部内面に横ナデ調整。底部外面には指頭圧痕。内面には二段の放射状暗文。	色 調 橙 色 胎 土 精良 焼 成 良好	石室内出土 ほぼ完形 風化が著しい
口縁部外面は、縦方向のヘラミガキ。体部外面は、横方向（水平方向）のヘラミガキ。底部外面は一定方向のヘラミガキ。口縁部内面は横ナデ調整。頸部内面と体部内面中位に接合痕。体部内面の詳細は不明だが、ナデか。	色 調 橙褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	石室内出土 口縁部欠損
内外面とも不整方向のナデ。体部内面に接合痕。体部形成後に口縁部を接合。	色 調 淡赤褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	石室内出土 破片
底部外面はヘラケズリ調整。他は内外面とも横ナデ調整。	色 調 外面…橙 色 内面…灰黄褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	石室内出土 風化が著しい ロクロ回転 右方向 体部下半残存
杯底部外面は回転ヘラケズリ調整ののち、脚部接合にともなう、回転ナデ調整。底部内面中央にはナデ調整（仕上げナデ）。他は内外面とも回転ナデ調整。脚部内面のなかほどに接合痕。	色 調 青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	石室内出土 ロクロ回転 右方向 完形
内外面とも回転ナデ調整。	色 調 青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	石室内淡茶色上出上 ロクロ回転 右方向 破片
内外面とも回転ナデ調整。底部外面は脚部接合時の回転ナデ調整。	色 調 内面…黄灰色 外面…淡青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	石室内攪乱上及び古墳 周辺出土。 ロクロ回転 右方向 内面に暗褐色の自然釉 破片
底部外面の下方は回転ヘラケズ調整。他は内外面とも回転ナデ調整。	色 調 淡青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	石室内攪乱土出土 ロクロ回転 右方向 破片

神岡番号	図版番号	器種・器形	法量 (cm)	形態の特徴
14-10	34-10	須恵器 壺	復原口径 7.8 器高 6.2	ほは平坦な底部から体部は外上方にのびたのち、大きく屈曲して内傾気味に上方にのびる。口縁部は尖り気味におさめる。体部なかに二条の凹線をめぐらす。
14-11	34-11	須恵器 小形瓶	体部最大径 8.0 現存高 4.4	底部外面には、断面形態が四角形の高台を貼り付け、体部は内傾しながら外上方へのびる。
15-12	34-12	土師器 小皿	口径 10.2 器高 1.7	やや丸味をおびたいびつな底部と外上方にゆるやかにのびる口縁部からなる。口縁部は尖り気味におさめる。
15-13	34-13	土師器 杯	復原口径 14.4 器高 2.2	平坦な底部と外反気味に外上方にのびる口縁部からなる。口縁部は尖り気味におさめ、わずかに外反する。
15-14	34-14	土師器 杯	復原口径 13.6 現存高 2.2	外反気味に外上方にのびる口縁部は口縁部の下方で屈曲し、上方にのびる。口縁部は、外方に屈曲し、上方に軽くつまみ上げる。器壁は全体に薄い。
15-15	34-15	黒色土器 壺	復原口径 16.0 現存高 4.6	口縁部は内傾しながら外上方にのび、口縁部を尖り気味におさめる。

表 4 神木板 2号増局溝出土土器観察表

神岡番号	図版番号	器種・器形	法量 (cm)	形態の特徴
20-54	37-54	土師器 杯	口径 11.8 器高 3.5	丸味をおびた底部から、ゆるやかなカーブのまま、内傾気味に口縁部はのびる。口縁部はゆるやかに内傾する面が認められる。
20-55	37-55	須恵器 平瓶	体部最大径 15.5 器高 9.2	口縁部は外反気味に外上方にのび、丸味をおびた口縁部はさらに外反する。体部上面は、丸味をおび、稜をなす肩部から下方に下る。底部は平底である。体部上面には、断面形態が長方形の把手の痕跡。

技 法 の 特 徴	色 調・胎 土・焼 成	備 考
底部外面に回転ヘラケズリ調整。その他は内外面とも回転ナデ調整。	色 調 内面…淡青灰色 外面…淡青灰色 黒灰色 胎 土 精良 焼 成 良（やや軟質）	石室内各所出土。 ロクロ回転 右方向 ½残存
体部外面の下半には回転ヘラケズリ調整。その他は内外面とも回転ナデ調整。	色 調 青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	石室内攪乱土及び古墳周 辺出土 ロクロ回転 右方向 体部下半残存
内面は、右方向の横ナデ調整。外面はナデ、指頭圧痕のほかは布、ワラ状の痕跡。	色 調 黄灰色 胎 土 精良 焼 成 良好	炭道部（淡黄茶色土）出 土 完形
底部外面はナデ。その他は、内外面とも横ナデ調整。	色 調 橙茶色 胎 土 精良 焼 成 良好	2号墳北東部出土 破片
口縁部外面下半には、ナデ、指頭圧痕。その他は、内外面とも横ナデ調整。	色 調 赤褐色 胎 土 精良 焼 成 良	石室内攪乱土（淡茶色土、 暗灰色土）出土 破片
口縁上部に横ナデ調整。内面には水平方向（横方向）のヘラミガキ。外面はナデ、指頭圧痕。内面および口縁上部外面に炭素の微粒子を吸着。	色 調 内面…黒色 外面…暗茶色 胎 土 精良 焼 成 良好	石室攪乱土出土 破片

技 法 の 特 徴	色 調・胎 土・焼 成	備 考
内面および口縁部外面は横ナデ調整。底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 淡茶褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	周溝下層出土 一部欠損
内外面とも回転ナデ調整。体部内側の上面には体部製作時の粘土板貼付痕跡。	色 調 青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	周溝上層出土 ロクロ回転 右方向

表5 2号墳出土鉄釘観察表

押岡番号	図版番号	全長(現存長)cm	身 部 cm	頭部の形態(頭部径) cm	木質遺存状況	出土地点	備 考
16-17	35-17	14.2	0.6×0.7	円形 (2.6)	横方向、縦方向	石室内	完形
16-18	35-18	(13.5)	0.6×0.6	円形 (2.3)	横方向、縦方向	石室内	ほぼ完形
16-19	35-19	(12.5)	0.6×0.6	円形 (2.4)		石室内攪乱土	ほぼ完形
16-20	35-20	(10.7)	0.5×0.7	円形 (2.3)	横方向	石室内	ほぼ完形
16-21	35-21	10.5	0.3×0.5	円形 (1.3)	横方向	石室内	錆化が著しい 完形
16-22	35-22	(7.2)	0.7×0.7	円形 (2.5)	横方向	石室内	
16-23	35-23	(7.2)	0.6×0.6	円形 (2.3)	横方向	石室内攪乱土	
16-24	35-24	(5.4)	0.6×0.6	円形 (2.4)		石室内攪乱土	
16-25	35-25	(5.8)	0.5×0.6	円形	横方向	石室内攪乱土	錆化が著しい
16-26	35-26	(5.9)	0.7×0.5	円形 (2.2)	横方向	石室内	
16-27	35-27	(5.6)	0.5×0.6	円形 (2.0)	横方向	攪乱土	
16-28	35-28	(6.3)	0.6×0.6	円形 (2.2)	横方向	石室内	
17-29	36-29	8.2	0.7×0.8	L字状	横方向、縦方向	石室内	完形
17-30	36-30	(7.2)	0.8×1.0	L字状	横方向	石室内攪乱土	ほぼ完形
17-31	36-31	(5.9)	0.8×0.6	L字状	横方向、縦方向	石室内攪乱土	
17-32	36-32	(5.2)	0.7×0.7	L字状	横方向	石室内攪乱土	
17-33	36-33	(4.2)	0.6×0.7	L字状	横方向	攪乱土	
17-34	36-34	(5.7)	(0.5×0.5以上)	L字状	横方向	石室内攪内土	錆化が著しい
17-35	36-35	(5.3)	0.7×0.9		横方向	石室内攪乱土	錆化が著しい 頭部欠損
17-36	36-36	(7.4)	0.5×0.5	折り返し	横方向、縦方向	石室内	
17-37	36-37	(6.6)	0.4×0.4	折り返し	横方向、縦方向	攪乱土	
17-38	36-38	(6.8)			横方向、縦方向	石室内	錆化が著しい
17-39	36-39	(6.2)	0.4×0.4	折り返し		石室内	
17-40	36-40	(6.3)	0.3×0.4		縦方向	石室内攪乱土	
17-41	36-41	(6.6)	0.4×0.5		横方向	石室内攪乱土	
17-42	36-42	(5.3)	0.4×0.5	折り返し	横方向	石室内	
17-43	36-43	(4.7)	0.4×0.5		横方向	石室内攪乱土	
17-44	36-44	(4.7)	0.5×0.4		横方向	石室内	
17-45	36-45	(4.9)	0.6×0.4	折り返し		石室内攪乱土	
17-46	36-46	(4.3)	0.4×0.6			石室内攪乱土	
17-47	36-47	(3.5)	0.4×0.5			石室内攪乱土	
17-48	36-48	(4.3)				石室内攪乱土	錆化が著しい
17-49	36-49	(1.8)	0.4×0.5		横方向	石室内攪乱土	
17-50	36-50	(1.7)	0.4×0.4			石室内攪乱土	

表6 2号墳周溝内出土鉄釘観察表

押岡番号	図版番号	全長(現存長)cm	身 部 cm	頭部の形態(頭部径) cm	木質遺存状況	備 考
21-56	37-56	(5.8)	0.5×0.5			錆化が著しい
21-57	37-57	(0.8)	0.6×0.6			
21-58	37-58	(1.5)	0.6×0.5			錆化が著しい

第3節 神木坂3号墳

1 位置と現状 (図5、図版20・22、写真26)

3号墳は谷畑古墳から萩原ドタニ遺跡へと下る南西尾根の稜線上に位置する。先述の2号墳よりも約2mの比高をもって下り、標高359m～360mの傾斜地に築かれている。ここからは標高352.9mの萩原ドタニ遺跡の最高所をかすめて、宇陀川・芳野川流域を望める。

調査前の状況では尾根稜線よりやや東側に3石の天井石が露出しており、ここより北東5mのところには盗掘時に掘られたくぼみが認められる。この盗掘坑内には横穴式石室の石材の一部が露出しているが、規模、構造等の詳細を窺うことができなかった。横穴式石室周辺は明瞭は盛り上がりは認められず、地形測量においても墳形、墳丘規模とも明らかでなかった。

なお、この古墳は1972年、谷畑古墳の発掘調査の際、地形測量が実施されており、「谷畑古墳南方の一古墳」としてすでに報告されている。

2 墳丘と周溝 (図22・23、図版21・22、写真27)

腐植土および流土(黄褐色土)を取り除くとすぐに石室の石材、地山を検出したが、墳丘東西両側の一部で盛土と考えられる淡黄褐色砂質土、淡茶褐色砂質土を確認した。厚さ約10～20cmをはかるわずかなものである。地山と比較的よく似ていることから、墓竈掘穿時の土を墳丘盛土としたのであろう。

石室背後には尾根稜線に直交し、ほぼ直線にのびる長さ5m、幅1.4m、深さ0.3mの浅い溝が穿たれている。溝幅は西側がやや広がっている。溝底はほぼ水平となっており、東西両端にいくにしたがって浅くなり、溝は消える。断面形態はU字状を呈する。溝内の堆積土は2層に大別でき、茶褐色土、淡褐色土の順に堆積している。この遺構は3号墳にともなう溝と考えられる。

傾斜地に位置するため、ほとんどの盛土が流失している。また、地山整形で墳丘が形成されていないことから、明確な墳丘及び、墳丘裾部は検出していない。よって、墳形やその正確な規模を知ることができないが、残存している一部の盛土、背後の溝と埋葬施設との関係から、墳丘規模は径(一辺)約8mと推定される。また、石室全体を覆う程度の盛土が積まれていたものと予想できる。



写真26 調査前の3号墳



写真27 3号墳背後溝の土層断面

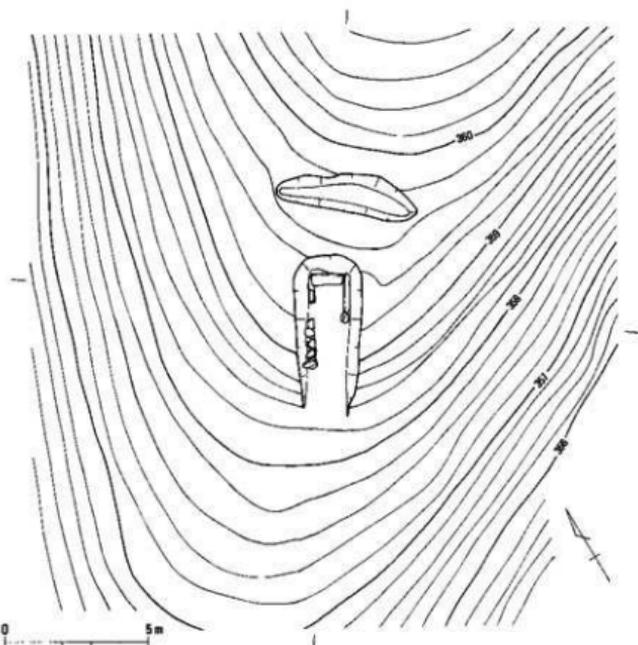


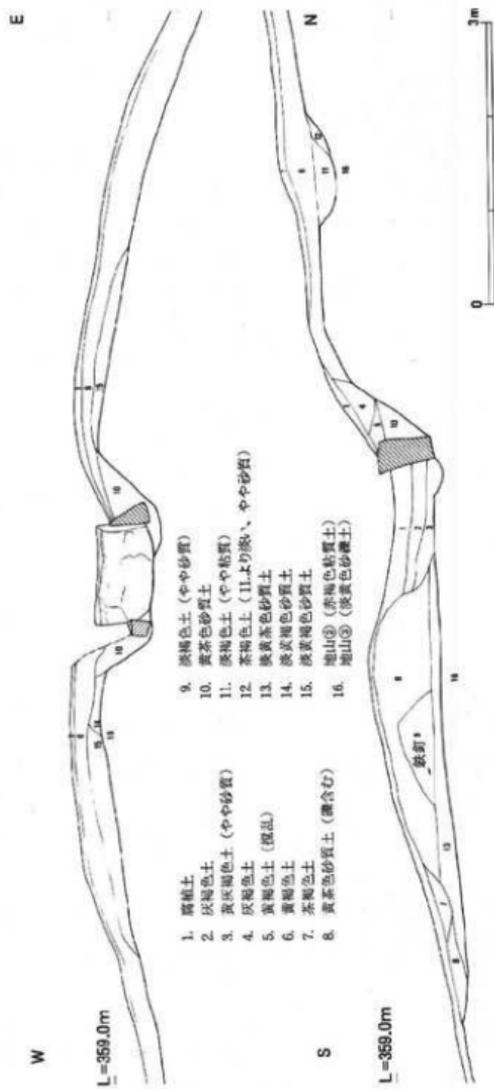
図22 3号墳測量図(調査後)

3 埋葬施設

(1) 墓壇 (図25、図版24)

尾根稜線に平行して墓壇が穿たれ、このなかに横穴式石室が築かれている。地山を削り込んで形成された墓壇は後述する横穴式石室よりひとまわり大きい程度で、南北長5.7m、東西幅2.0~2.4mの規模を有する。深さは北端が最大となっており、0.7mをはかる。平面形態は隅丸方形を呈し、東西両側辺はほぼ直線的にのびる。墓壇北側幅と南側幅とを比較すると、後者のほうが約40cm余り狭い。

墓壇壁は約45度から50度の傾斜をもって形成され、墓壇底には墓底石の石材の形状にあわせてそれぞれ据え付け穴を穿っている。また墓壇底はゆるやかな傾斜をもって南へ下り、南北の比高差は30cmをはかる。このため、南に向かうにしたがい淡黄茶色砂質土の整地土が厚く置かれている。墓壇内の埋土は地山砂礫を含む黄茶色砂質土ないし暗黄茶色土からなる。



- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1. 腐植土 | 9. 淡褐色土 (中や砂質) |
| 2. 灰褐色土 | 10. 黄褐色砂質土 |
| 3. 黄灰褐色土 (中や砂質) | 11. 赤褐色土 (中や粘質) |
| 4. 灰褐色土 | 12. 茶褐色土 (IIより灰、中や砂質) |
| 5. 黄褐色土 (微乱) | 13. 淡黄褐色砂質土 |
| 6. 黄褐色土 | 14. 淡黄褐色砂質土 |
| 7. 茶褐色土 | 15. 淡黄褐色砂質土 |
| 8. 黄褐色砂質土 (微含む) | 16. 地山④ (赤褐色粘質土) |
| | 地山⑤ (淡黄褐色土) |

图23 3号墳土層断面図



写真28 3号墳石室内の散乱石材

(2) 横穴式石室 (図24・26、図版21～23、写真28～30)

墓坑内には地元産するいわゆる榛原石を用いて築かれた無袖式の横穴式石室が構築されている。石室の主軸は墓坑と同様、尾根稜線と平行しており、石室は南西方向に開口する。石室規模は全長3.1m、幅1.05mをはかる。高さについては天井石が残存しておらず確定できないが、強固に座った奥壁からその高さを推定できる。石室床面から奥壁最上部まで0.52m～0.56mをはかることから、本来の石室高は0.56m強と推定される。

石室床面は大きく攪乱されているが、なかでも奥壁付近では墓坑底がさらに掘り込まれている。床面は約10cm～20cmの厚さで淡黄茶色砂質土を充填して、水平に整地しているが、バラス敷、石敷等は認められない。

石室は後世の攪乱のため、側壁の石材の一部が抜き取られたり、天井石が南側へ移動させられたりしている。石室残存高は石室床面から東側壁で0.42m、西側壁で0.3m、奥壁は先述のとおり、0.56mをはかる。

石室の構築に際しては、基本的に石材の長辺を石室内に向けて積み上げ、隙間を小石材で詰めている。石材の平滑な面を最大限に利用するように努め、意識的に石材を立てている箇所も認められる。



写真29 3号墳東側壁

各石材には面取り等の加工は認められない。石室構築の順序は、奥壁とこれに接する西側壁の石材とを噛み合わせて奥壁を内傾させることにはじまる。そして、東西両側壁の基底石を奥から順に据え付けている。

奥壁は幅98cm、高さ60cm、厚さ25cm～35cmの石材が用いられており、約15度ほど内傾させて据え付けている。この奥壁1石をもって石室の幅、高さの基準としている。東側壁は奥から順に2石が残存しており、奥壁に接する石材は側壁の用材のなかでは最も大きく、縦0.5m、横1.44mをはかる。奥壁高より約0.14m低いことから、天井石を架構した際、この間に小石材をつめたことが予想される。南半部の石材は認められないが、石材抜き取り穴からあと4石の基底石の存在が考えられる。西側壁は東側壁より比較的良好に残っているが、上半部の石材は失われている。奥2石は縦20cm～25cm、横40cm～50cmをはかるのに対し、南側の他の石材は縦10cm～15cm、横30



写真30 3号墳西側壁

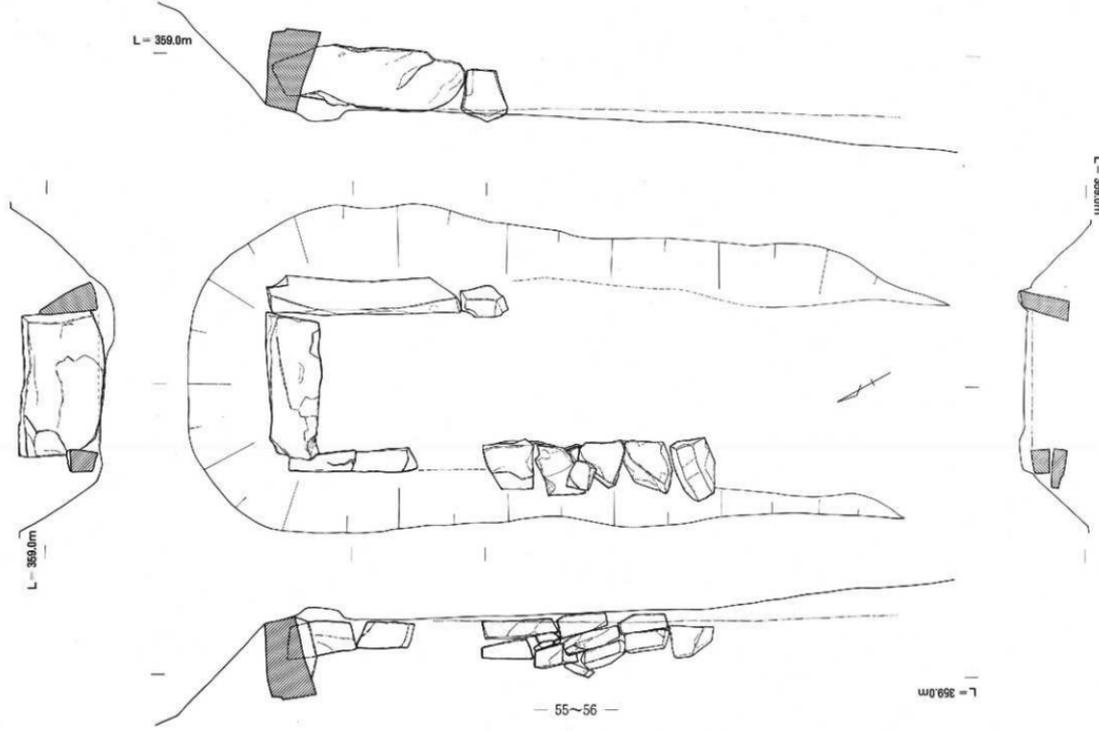


图24 3号塔基式石室基座图

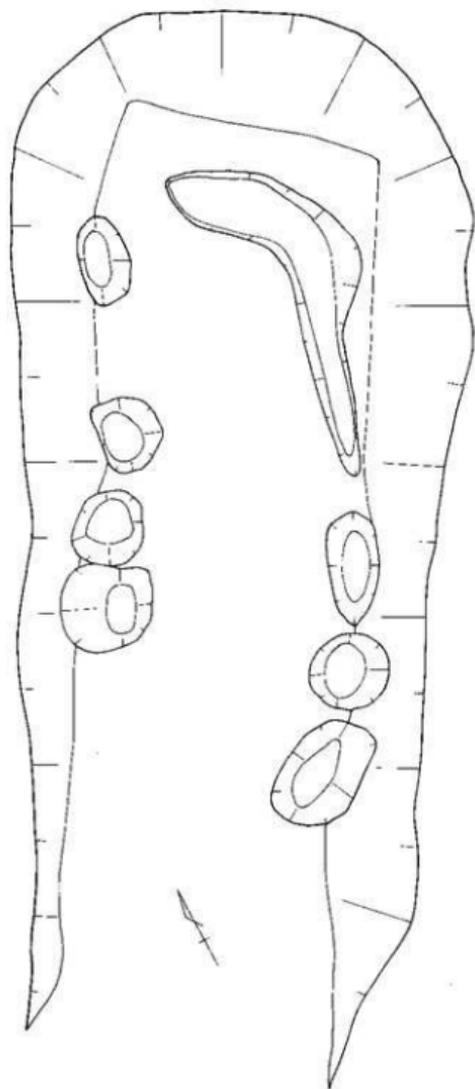


图25 3号墳墓址实测图

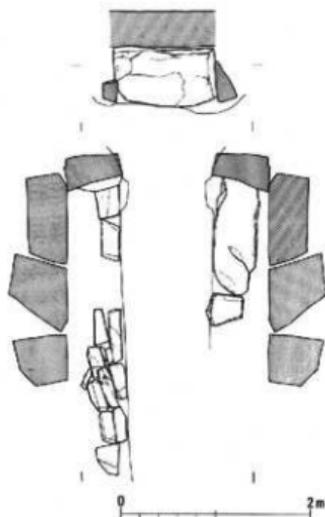


図26 3号墳横穴式石室復原図

cm~50cmとやや小形となり、全体に扁平となっている。基底石は7石からなると考えられるが、南端に位置する1石は整地土上に置かれ、石材据え付け穴は穿たれていない。また、この石材のみが短辺を石室内に向けて置かれている。石室開口部を意識しての造作とも考えられる。

石室内南端には閉塞施設の存在が予想されるが、石材等は認められず、これを明らかにできない。

4 遺物の出土状況

石室内及びその周辺は大きく攪乱されており、攪乱上中には古墳時代から現代に至る各時期の遺物が含まれている。ほとんどが細片のため、図化しえるものは少ない。

この古墳築造時の遺物としては、石室内から須恵器、新羅土器、土師器の各破片と鉄釘2点を検出しているが、いずれも原位置を保っていない。また、石室前庭部からは須恵器・杯蓋・壺の破片が出土し

ている。おそらく、石室攪乱時に南へ掻き出されたものであろう。

このほか石室内及び周辺からは黒色土器、平安時代から中世の土師器などを検出しているが、これにともなう遺構は明らかでない。

5 出土遺物

土器 (図27・28、図版37、表8)

新羅土器 (59)

底辺5.7cm、高さ3.2cmをはかる三角形の破片のみで、詳細な形状は不明である。蓋又は壺体部と推定される。内外面とも横ナテ調整を施し、外面の中ほどに2条の浅い凹線をめぐらす。この凹線の上には、周囲に列点文を配する水滴文状の流線形文のスタンプ文を施す。また、下段には中心に点をもつ同心半円文とその下に上段と同様の流線形文のスタンプ文を施す。上に二重半円文、下に流線形文を配した文様構成と思われるが、組み合わせに若干のズレが認められることから、上段、下段のスタンプ文の数は必ずしも一致していないようである。凹線をめぐらせたのち、二重半円文、流線形文の順にそれぞれ左から右方向へ施文している。

断面形態はゆるやかに内彎しており、上方と下方では前者のほうがやや厚くなっている。内面は青灰色、外面は暗緑灰色を呈し、外面には全面にわたって釉が付着している。石室内の攪乱土から出土している。

須恵器 杯蓋 (60)

天井部だけの破片である。本来、天井部中央には宝珠様のつまみが付され、口縁部内面にはかえりがつくと思われる。外面にはつまみ貼付時の回転ナデ調整、回転ヘラケズリ調整が認められる。内面は回転ナデ調整、中央部にはナデ(仕上げ)を施す。3号墳南斜面からの出土である。

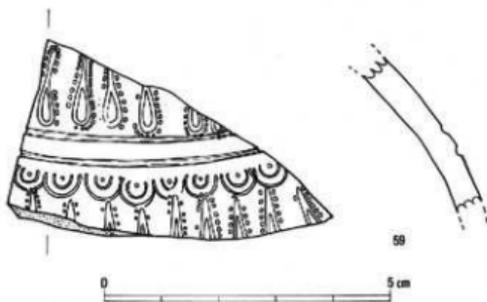


図27 3号墳出土土器実測図

土師器 杯身 (61)

復原口径10.4cm、現存高2.4cmをはかる破片である。内瓣気味にたちあがる口縁部と丸味をおびた底部からなり、口縁端部は内傾する面をもつ。内面は横ナデ調整のち、一段の放射状暗文を施す。石室内攪乱土からの出土である。

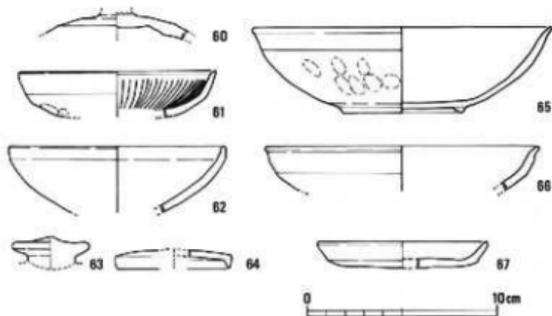


図28 3号墳出土土器実測図

土師器 高杯 (62)

高杯の杯部と考えられる破片である。復原口径11.2cmをはかり、直線的にのびる口縁部は口縁端部で上方へ屈曲する。内面及び口縁端部には横ナデ調整を施す。外面は摩滅が著しいが、ナデが認められる。石室内攪乱土から出土している。

須恵器 杯蓋 (63、64)

63は扁平な宝珠形つまみの版片で、その直径は4.0cmをはかる。外面には回転ナデ調整を施す。3号墳東方の表土中からの出土である。

64は口縁端部の細片である。端部は下方へ短く屈曲し、先端を尖り気味におさめる。3号墳南方の天井石下からの出土である。

黒色土器 椀 (65)

復原口径15.8cm、器高4.5cmをはかる破片である。ほぼ平坦な底部に断面形態が三角形を呈する高台が貼り付けられ、口縁部は内彎気味に外上方にのびる。内面および口縁上部、外面に炭素吸着が認められる。また、底部内面に一定方向(縦方向)、口縁部内面に水平方向(横方向)のヘラミガキを施す。また、図化しえなかったが、同様の椀の破片があと1~2個体分出土している。いずれも、石室内攪乱土中からの出土である。

土師器 皿 (66、67)

66は復原口径14.4cmをはかり、口縁部は内彎気味に外上方へのびる口縁端部は外反し丸い。石室ほりかた内の攪乱土中からの出土である。

67は復原口径9.0cm、器高1.4cmをはかる。ほぼ平坦な底部と外上方にのびる口縁部からなる。口縁部の内外面、底部内面は横ナデ調整底部内面中央はナデを施す。

鉄製品 (図29、図版37、表7)

釘 (68、69)

石室内より2点の角釘が出土しており、いずれもほぼ完形である。68は全長9.4cmをはかり、頭部は一部、欠損するものやや折り曲げられている。69は全長7.8cmをはかり、頭部はL字状に折り曲げられている。身部の上半には横方向の木質がよく残っている。詳細は表7にまとめている。

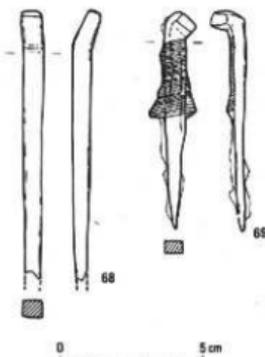


図29 3号墳出土鉄釘実測図

6 小結

無袖の横穴式石室内の攪乱は著しく、各時期の遺物が混在している。遺っていた須恵器、土師器、新羅土器等から、この古墳は7世紀第2四半期の築造と考えられる。詳細は第6章第2節にゆずりたい。

表7 3号墳出土鉄釘観察表

挿図番号	図版番号	全長(現存長)cm	身部cm	頭部の形態(頭径部)cm	木質遺存状況	備考
29-68	37-68	(9.5)	0.7×0.8	L字状		ほぼ完形 錆化が著しい
29-69	37-69	7.7	0.6×0.6	L字状	横方向	完形 錆化が著しい

表8 神木坂3号墳出土土器観察表

神図番号	図版番号	器種・器形	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調・胎土・焼成	備 考
27-59	37-59	新羅土器		内彎気味にゆるやかにカーブする。	内外面とも回転ナデ調整。外面のなかほどに2条の浅い凹線。本来、凹線の上下のいずれにも中心に点をもつ二重半円文とその下に周間に列点文を配する水滸文状の流線形文のスタンプ文を施文。スタンプ文は左から右方向。	色 調 内面…青灰色 外面…暗緑灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	石室内攪乱出土 ロクロ回転 右方向 外面は暗緑灰色の輪 破片
28-60	37-60	須恵器 杯蓋	現存高 1.5	天井部のみの破片。本来、天井部中央には宝珠様つまみが付され、口縁部は内面にかえりがつく。	天井部外面中央にはつまみ貼り付け時の回転ナデ調整。その他は回転ヘラケズリ調整。内面は回転ナデ調整。中央部にはナデ(仕上げナデ)。	色 調 暗黄灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	3号墳南斜面出土 ロクロ回転 右方向 破片
28-61	37-61	土師器 杯身	復原口径 10.4 現存高 2.4	丸い底部からややゆるやかなカーブのまま、やや内彎気味に外上方へのびる口縁部へとつながる。口縁端部には内傾する面が認められる。	口縁部内外面、底部内面は横ナデ調整。底部外面にはナデ、指頭圧痕。内面には正放射状暗文。	色 調 褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	石室内攪乱出土 破片
28-62	37-62	土師器 高杯	復原口径 11.2 現存高 3.5	口縁部はあまりカーブせず外上方へのび、口縁端部付近で上方へ屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。	内面および口縁端部に横ナデ調整。外面は厚紙が響しいが、ナデ。	色 調 褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	石室内攪乱出土 破片
28-63	37-63	須恵器 杯蓋	つまみ径 4.0 現存高 1.8	扁平な宝珠形つまみ。	回転ナデ調整。	色 調 暗黄灰色 胎土 精良 焼成 堅緻	3号墳東方表土中出土
28-64	37-64	須恵器 杯蓋	現存高 1.0	口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端を尖り気味におさめる。	内外面とも回転ナデ調整。	色 調 淡青灰色 胎 土 精良 焼成 堅緻	天井石下出土 破片
28-65	37-65	黒色土器 輪	復原口径 15.8 器高 4.5	ほぼ平坦な底部と内彎気味に外上方へのびる口縁部からなる。口縁端部は外反し、尖り気味におさめる。高台の断面形態は三角形を呈する。	口縁上部は横ナデ調整。底部内面に一方、口縁部内面に水平方向(横方向)のヘラミガキ。外面はナデ、指頭圧痕。内面および口縁上部外面に炭素の微粒子を散らす。高台はナデにより貼り付け。	色 調 外面…赤褐色 内面…黒色 胎土 精良 焼成 良好	石室内攪乱出土 破片
28-66	37-66	土師器 皿	復原口径 14.4 現存高 2.3	口縁部は内彎気味に外上方へのびる。口縁端部は外反し、丸くおさめる。	口縁部外面下位にナデ、指頭圧痕。その他は内外面とも横ナデ調整。	色 調 内面…褐色 胎土 精良 焼成 良好	石室ほりかた内攪乱出土 破片
28-67	37-67	土師器 皿	復原口径 9.0 器高 1.4	ほぼ平坦な底部と外上方へのびる口縁部からなる。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面、底部内面は横ナデ調整。底部内面中央はナデ。底部外面はナデ、指頭圧痕。	色 調 内面…褐色 胎土 精良 焼成 良好	石室内攪乱出土 破片

第4節 神木坂土墳墓7

1 位置と現状

1次調査の際、尾根の斜面からも多くの遺構、遺物を検出したため、今回の調査も尾根斜面を広く調査することとした。

土墳墓7は谷畑古墳、神木坂2号墳間の尾根西斜面に位置し、尾根筋からは約10m下った急峻な斜面に築かれている。調査前の状況では墳丘等の盛り上がりは認められない。

腐植土、黄褐色土、淡茶灰色粘質土を除去すると墓坑と周溝の輪郭を検出した。この墓坑を覆うような盛土は認められない。

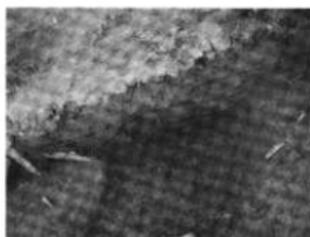


写真31 土墳墓7周溝土層断面



写真32 土墳墓7土層断面

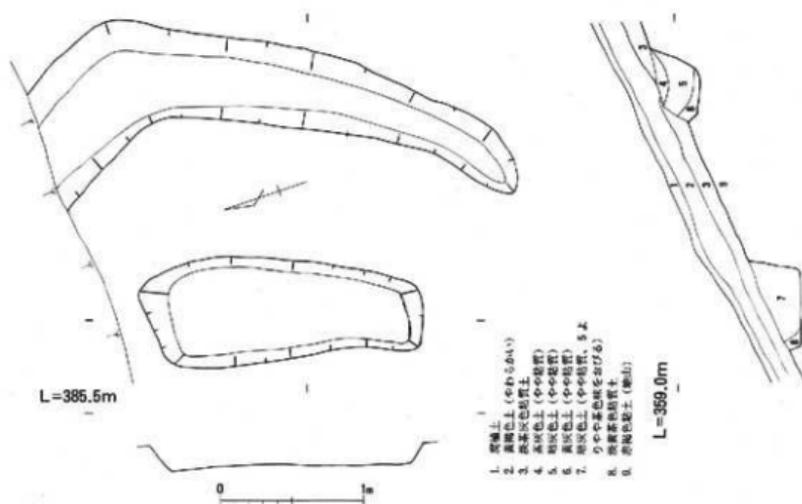


図30 土墳墓7実測図

周溝は後述の墓塚を囲むように背後に穿たれている。平面形態は弧状を呈し、その規模は長さ(現存長)343cm、最大幅77cm、深さ34cmをはかる。断面形態はU字形を呈する。この溝内の堆積土は3層に分けられ、黄灰色土、暗灰色土、茶灰色土の順に堆積している。周溝内から遺物は出土していない。

2 埋葬施設(図30、図版24、写真31・32)

周溝の西側に隅丸長方形の墓塚が穿たれている。この墓塚は長さ198cm、北小口幅77cm、南小口幅51cm、深さ35.6cmの規模をはかる。墓塚底はほぼ平坦であるが、北端が約5cm深い。墓塚壁は、やや傾斜をもって立ち上がっている。墓塚内の埋土は3層に分かれ、上から順に暗灰褐色土、暗灰色土、淡黄茶色粘質土となっている。棺痕跡の確認につとめたが、これを明確にはできなかった。墓塚内からも遺物の出土は認められない。

3 小 結

尾根斜面に位置するこの種の土塚墓は神木坂古墳群ではこれまでに1次調査の際、6基を確認し、今回で7基めとなる。土塚墓1から土塚墓6を神木坂1号墳付近である程度まとまった状態で確認したことから、土塚墓7周辺においてもさらに土塚墓が存在すると考え、精査を重ねた。しかし、土塚墓7の1基を確認したにすぎない。この遺構が比較的深く穿たれていることから、他の土塚墓が流失してしまったとは考えにくく、本来から、この西斜面には1基のみであった可能性が高い。斜面に築かれていることから、遺構上面の一部が流失していることも予想されるが、これまでの土塚墓と同様、墓塚を埋める程度の埋土のみで、明確な墳丘は築かれなかったと考えられる。

遺構検出中に周辺から土師器細片が出土したが遺構内からは築造時期を明確にできるような遺物は出土していない。これまでの調査で土塚墓の築造時期を明らかにできたのは土塚墓3の1基にすぎず、須恵器群から6世紀前半と考えている。土塚墓7と他の土塚墓の築造順序は明らかでないが、築造時期は土塚墓3に近い6世紀前半頃と考えておきたい。

第5節 神木坂中世墓群

1 位置と現状

谷畑古墳の裾部から神木坂2号墳周辺にかけて7基の土葬墓、4基の火葬施設が散在する。谷畑古墳裾部には6基の上葬墓、火葬施設が比較的にまとまった状態で位置する。いずれも土盛り、配石、石造物等の外部表象は認められない。

2 検出遺構

(1) 火葬施設

31号墓 (SK-31、図31、図版25、写真33)

2号墳東辺の周溝から東方へ約6mのところにかかれ、調査範囲の東端に位置している。

楕円形の土塚で長辺80cm、短辺60cm、深さ18cmの規模をはかる。断面形態は碗状を呈する。埋土は2層を確認し、上層は淡灰茶色土、下層は茶色土である。いずれの層からも炭化物、焼骨が散乱した状態で出土しているが、主な骨は収骨されたと思われる。有機質蔵骨器の痕跡は確認できなかった。土塚壁面は、ほとんど焼けておらず、火葬は1回であった可能性が高い。

他に遺物は出土していない。



写真33 31号墓土層断面

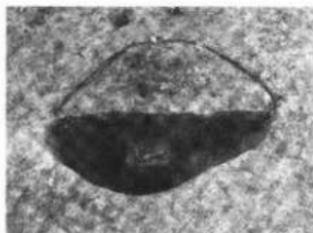
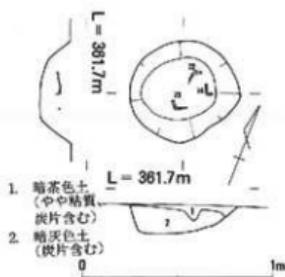


写真34 3号墓土層断面



32号墓 (SK-32、図32、図版25、写真34)

2号墳周溝の北東隅外側に位置している。周溝埋没後、溝及び埋土の一部を穿って築かれた径52cm、深さ16cmの円形土坑である。埋土は2層認められ、上層が暗茶色土、下層が暗灰色土である。炭化物の出土は認められるが、人骨片が見あたらないことから、丁寧に収骨されたものと思われる。上層はあまり炭化物を含んでおらず、火葬後の土坑を埋めた土の可能性がある。土坑壁面はほとんど焼けておらず、火葬は1回のみであったと思われる。

土坑内からはL字状に曲がった鉄釘3点が出土しているが、蔵骨器の痕跡は明らかでない。

36号墓 (SK-36、図33、図版27、写真35)

長辺124cm、短辺107cm、深さ30cmの長方形土坑である。中央長軸部は幅30cm、深さ15cmほど掘りくぼめられ、溝が設けられている。この溝は土坑短辺と接し、外側にはのびていない。火葬の際、通風をよくするため穿たれたと考えられ、溝の両端は比較的良好に焼けている。土坑壁面は赤褐色を呈し、かたく焼けており、複数回の火葬が予想される。また、土層断面からもこのことが予想される。

土坑内には非常に多くの炭火物が遺存しており、土坑底には棺の一部とも考えられる炭が認められる。炭化物の多さと比較して人骨は非常に少なく、細片が認められたにすぎない。火葬後、丁寧に収骨がなされたことがうかがえる。

この土坑上面からは土器片などが出土しているが、土坑内からは、土器、鉄器などの遺物は認められない。

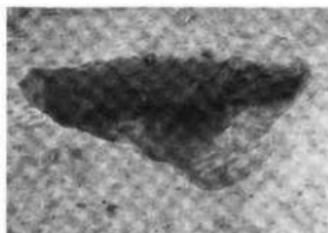
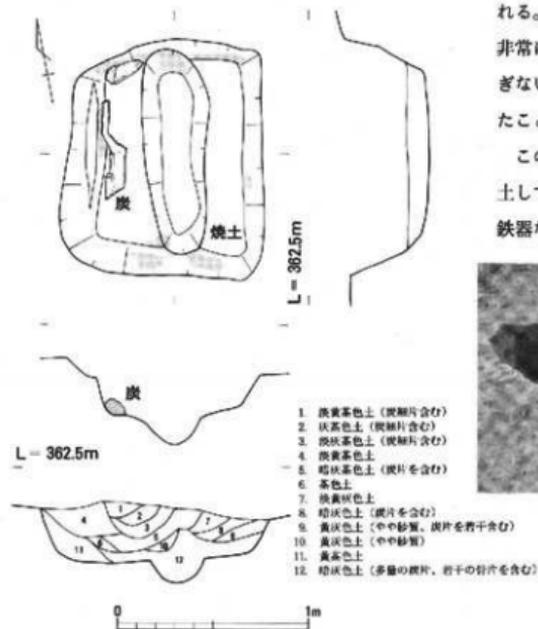


写真35 36号墓土層断面

図33 36号墓実測図

37号墓 (SK-37、図34、図版28、写真36)

ほぼ円形の土塚で径85cm～90cm、深さ20cmの規模をはかる。土塚底はほぼ平坦となっている。埋土は3層に分けることができ、上層は淡茶灰色砂質土、中層は炭化物を多く含む暗灰色土、下層は茶灰色となっている。いずれも焼骨片、炭化物を含んでいる。大きな骨片があまりみられないことから、丁寧に取骨されたものと思われる。土塚壁面は若干、焼けている。有機質炭骨器の痕跡は認められないが、桶状棺の存在が予想される。

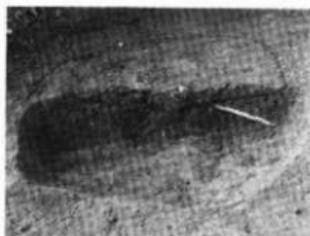


写真36 37号墓土層断面

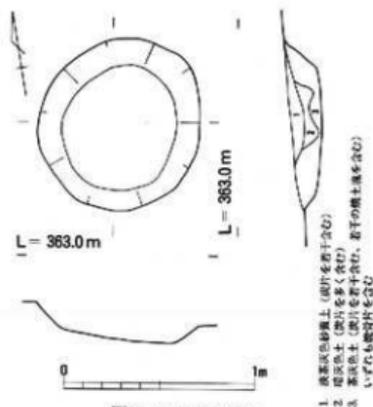


図34 37号墓実測図

(2) 土葬墓

33号墓 (SK-33、図35、図版26、写真37)

2号墳の墳丘内北東側に築かれ、長辺114cm、短辺74cm、深さ74cmの隅丸長方形の土塚である。土塚底はほぼ平坦となっており、ここには埋葬姿勢が推定できる人骨1体が遺存している。遺存する骨は頭蓋骨、大腿骨をはじめ、



写真37 33号墓人骨検出状況

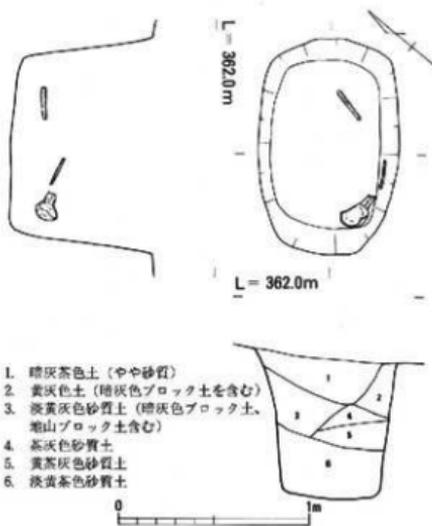


図35 33号墓実測図

比較的多い。頭を南西にし、下肢および肘を強く折り曲げた右側臥葬であったと考えられる。

棺痕跡の検出につとめたが、これを明らかにすることはできなかった。土墳の形態から、桶状棺の存在が予想される。土壇内から遺物の出土は認められない。

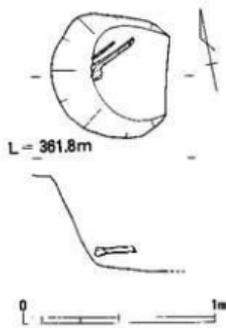


図36 34号墓実測図

34号墓 (SK-34、図36、図版26)

2号墳の墓壇内西側に築かれた土葬墓である。2号墳の東西土層断面観察用のアゼ内に取り込んでいたため、確認がおくれ、遺構の一部を削平してしまった。このため、土壇の平面形態は明らかでないが楕円形を呈していたと考えられる。現存規模では径60cm以上、深さ50cm以上をはかる。土壇底には、大腿骨をはじめとする生骨が遺存していたが、埋葬姿勢を推定するまでには至らなかった。埋土は淡黄茶色を呈し、やや砂質である。棺痕跡の検出につとめたがこれを明らかにすることはできなかった。

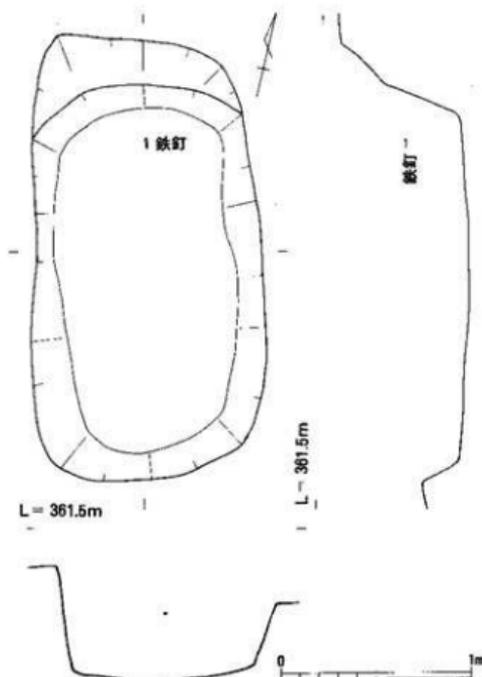


図37 35号墓実測図

35号墓 (SK-35、図37、図版27、写真38)

2号墳周溝の南西隅に接して築かれた隅丸長方形の土壇である。土壇の主軸はほぼ南北にとられており、規模は長辺231cm、短辺123cm、北端での深さ62cmをはかる。土壇底は、ほぼ平坦で北側がやや高くなっている。土壇埋土は淡茶褐色を呈している。ここからは鉄釘片1点が出土しているのみで人骨等は遺存していない。また、棺痕跡の検出につとめたが、明らかにすることはできなかった。覆棺を基本とする土葬墓と考えられる。

35号墓を検出するまでにこの遺構の上層にあたるところで、焼付の細片を若干検出したため、火葬施設墓の存在を予想して精査を進めたが、これを検出することはで

きなかった。先に検出した焼骨片と土葬墓とは別遺構の可能性が高いが、前者にともなう遺構は明らかでない。

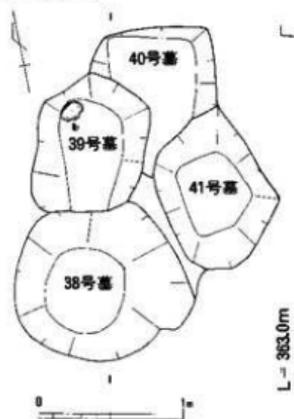


図38 谷畑古墳裾部中世墓実測図

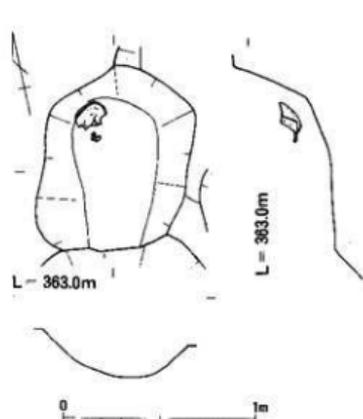


図40 39号墓実測図

38号墓 (SK-38、図39、図版28・29)

ほぼ円形の平面形態を呈する土葬墓で、径125cm～120cm、深さ42cmの規模をはかる。土底は丸味をおび、壁面はゆるやかに立ち上がる。土底埋上は淡茶褐色砂質土で、ここからは生骨片が若干出上している。棺痕跡の検出につとめたが、これを明らかにできなかった。土底の形態から桶状棺の存在が予想される。土底内からは遺物が出土しておらず、この時期を明確にはできない。

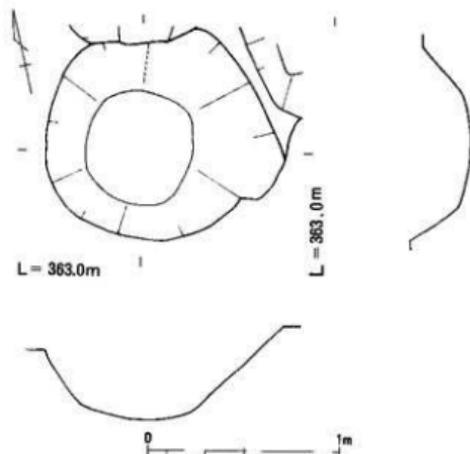


図39 38号墓実測図

39号墓 (SK-39、図40、図版28～30)

楕円形を呈する土葬墓で、その規模は長径100cm以上、短径75cm、深さ53cmである。土底底はやや丸味をおびているが平坦となっている。土底内からは埋葬姿勢が推定できる人骨1体が遺存して

おり、右半分の頭蓋骨、若干の生骨片が認められる。頭を北に向けた右側臥葬であったと考えられる。

埋土は淡茶褐色を呈する砂質土で、棺痕跡の検出にも留意したが、これを確認することはできなかった。土坑の形態から桶状棺の存在が予想される。土坑内からは遺物が出上していないため、これの時期を明らかにできない。

40号墓 (SK-40、図41、図版28・31)

長辺115cm以上、短辺88cm、深さ37cmの規模を有する長方形の土坑である。南半部は39号墓、41号墓によって掘り込まれ、明らかでない。土坑底はほぼ平坦となっており、土坑埋土は淡茶褐色を呈する砂質土である。ここからは遺物、人骨の出土は認められず、棺痕跡も明らかにできなかったが、土葬墓と推定される。

41号墓 (SK-41、図42、図版28・31)

ややいびつな長方形を呈する土坑で、長辺100cm、短辺64cm~77cmの規模を有する。土坑底はほぼ平坦となっており、土坑壁面はゆるやかにたちあがる。埋土は淡茶褐色砂質土のみである。ここからは人骨、遺物などは出土せず、棺痕跡も明らかでないが、土葬墓と考えられる。



図41 40号墓実測図

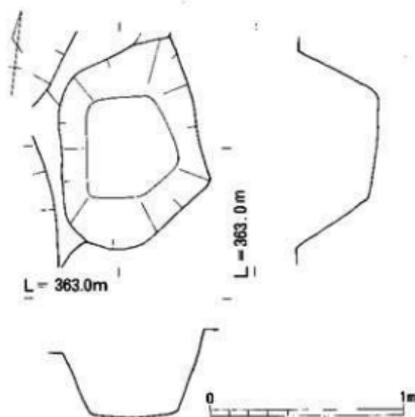


図42 41号墓実測図

3 遺物の出土状態

先述のとおり、32号墓から鉄釘3点、35号墓上層から鉄釘片1点が出土しているのみでその他、遺構にともなう遺物は認められない。

谷畑古墳裾部の表土中から数点の土器片が出土しており、これらは遺構にともなった可能性が強く、うち2点を図化した。

尾根南斜面、西斜面等から出土している遺物のなかで、これらの遺構にともなった推定されるものも認められるが、第7章にあわせて収めている。

4 出土遺物

土 器 (図43、図版38、表9)

土師器 小皿 (70)

口径10cm、器高1.9cmをはかる。底部は丸味をおび、外上方に口縁部がのびる。底部外面はナデ、指頭圧痕が認められ、その他は内外面とも横ナデ調整を施す。また、底部内面中央にはナデを施す。

土師器 土釜 (71)

復原口径15.4cmをはかる。口縁部は内上方にのび、上半を内側へ折り曲げ、口縁端部をやや上方に引き出し気味に仕上げる。鋳端部は丸味をおび、下方がやや肥厚する。外面の鋳以下には煤が付着している。

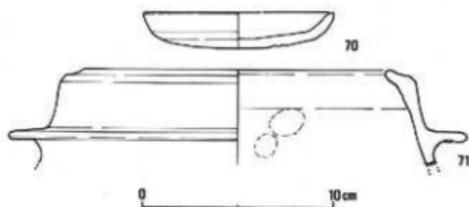


図43 中世墓付近出土土器実測図

鉄 製 品 (図44、図版38、表10)

釘 (72~75)

32号墓から完形ないしほぼ完形のもものが3点 (72、73、74)、35号墓から破片が1点 (75) 出土している。いずれも断面形態はほぼ正方形を呈する。また、木質の遺存は認められない。

72、73、74の頭部の形態は折り返され、やや二方に張り出すものである。いずれも身部の½上半でほぼ直角に折り曲げられ、L字状を呈する。



写真38 35号墓鉄釘出土状況

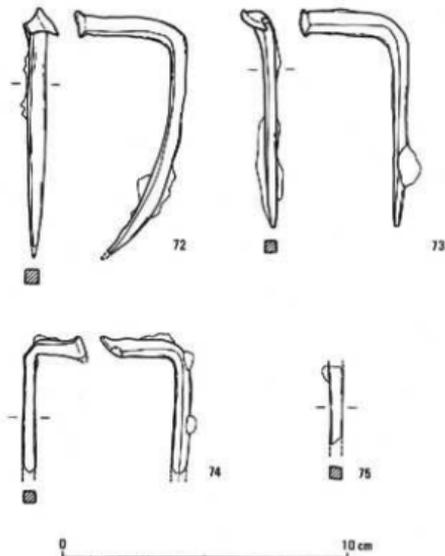


図44 32号墓、35号墓出土鉄釘実測図

また、身部はややねじれる。全長9cm~12cm、身部の太さ0.4cm~0.5cmをはかる。73はやや右方向にひねった状態で直角に曲げられている。

75は身部の破片のみで、頭部の形態、長さ等は明らかでない。なお、個々についての詳細な数値等は表10に掲載している。

5 小 結

土葬墓、火葬施設からは造墓時期を明らかにできるような遺物は認められず、これらの造墓順序も明確にはしえなかった。

火葬施設には、谷畑中世墓地例のような火葬時の通気をはかる溝状の煙道、ドタニ中世墓地例のような石材を用いた台石等は認められず、さらに簡略化がみられる。また、4基の施設ともよく収骨がなされており、少量の焼骨が出上したのみである。なお、周辺では焼骨を容器に収めた火葬収骨埋葬墓は、検出していない。

これらの遺構の周辺から出上した十師器は15世紀後葉に比定され、また、周辺遺跡の調査例から造墓時期の一端をうかがうことができよう。

表9 谷畑古墳裾部中世墓周辺出土土器観察表

扉図番号	図版番号	器種・器形	法 量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備 考
43-70	38-70	十師器 小皿	口径 10.0 器高 1.9	丸味をおびた底部から外上方へ口縁部がのびる。口縁端部は尖り気味におさめる。	口縁部の内外面、底部内面は横ナデ調整。底部内面中央にはナデ。底部外面はナデ、指頭汗痕。	色調 淡黄茶色 胎土 精良 焼成 良好	完形
43-71	38-71	十師器 土釜	復原口径 15.4 現存高 5.4	口縁部は内上方にのび、上半を内側に折り曲げる。口縁端部はやや上方に引き出し気味に仕上げ、丸味をおびる。口縁部下方には水平の罫をめぐらす。罫端部は丸くおさめ、下方がやや肥厚する。	口縁部内面上半は横ナデ調整。以下ナデ、指頭汗痕。外面は、横ナデ調整。罫は貼付。	色調 淡黄茶色 胎土 精良 焼成 良好	外面は罫以下に煤が付着破片

表10 32号墓・35号墓出土鉄釘観察表

扉図番号	図版番号	全 長(現存長)cm	身 部cm	頭部の形態	出 土 地 点	備 考
44-72	38-72	11.3	0.5 × 0.5	折り返し	32号墓	完 形
44-73	38-73	10.0	0.4 × 0.4	折り返し	32号墓	完 形
44-74	38-74	(7.2)	0.4 × 0.4	折り返し	32号墓	ほぼ完形
44-75	38-75	(2.8)	0.5 × 0.4		35号墓	

第6節 神木坂遺跡その他の遺構

1 位置と現状

神木坂2号墳付近で4基の土坑を検出している。これらには企画性は認められず、散在した状態である。

2 検出遺構

SK-42 (図45、図版32、写真39・40)

2号墳石室攪乱土内に設けられた径93cm～97cm、深さ31cmの円形の土坑である。埋土は2層に大別でき、上層は炭化物を多く含む黒灰色土、下層は炭片を若干含む淡茶色粘質土となっている。土坑内からは遺物が出土していないため、時期を明確にできないが、中世頃のものである。なお、土坑壁面は焼けておらず、焼骨も認められない。

SK-43 (図46、図版32)

2号墳周溝北西隅の外側に位置する円形の上坑である。この土坑の規模は径40cm～46cm、深さ18cmをはかる。埋土は2層に分けられ、上層は炭化物の細片を多く含む灰茶色土、下層は淡茶色土となっている。焼土面及び人骨は検出していない。遺物は出土しておらず、時期を明らかにできない。

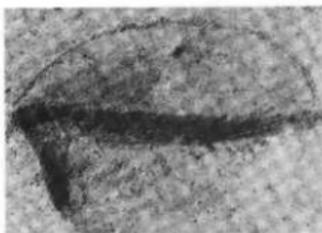


写真39 SK-42土層断面



写真40 2号墳石室攪乱土とSK-42

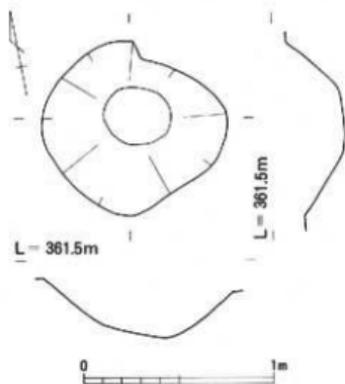


図45 SK-42実測図

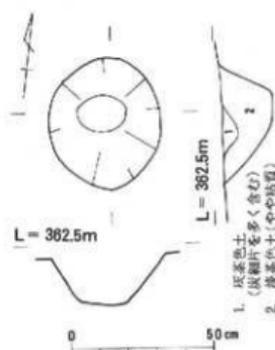


図46 SK-43実測図

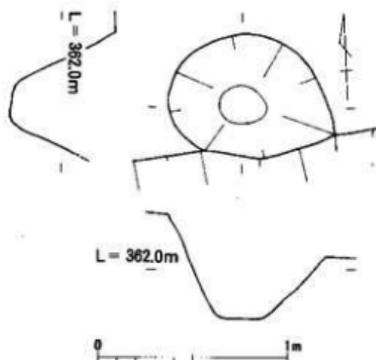


図47 SK-44実測図

SK-44 (図47、図版33)

2号墳周溝北側の外に位置する。周溝埋没後、周溝の一部を穿った円形の土坑である。径83cm~90cm、深さ55cmの規模をはかり、断面形態は逆三角形状を呈している。埋土は炭化物を若干含む暗灰褐色土である。ここからは遺物が出土していないため、時期を明らかにできない。

SK-45 (図48、図版33)

尾根西斜面に位置する土坑というよりむしろ落ち込み状の遺構である。平面形は長方形を呈し、長辺205cm、短辺135cmの規模である。

埋土は暗灰褐色粘質土である。遺構内から遺物が出土していないため、時期は明らかでない。

3 小 結

いずれもその規模、形態等から墳墓ではないが、その性格は明らかでない。また、各遺構からは、遺物を検出していないため、時期を明らかにできない。

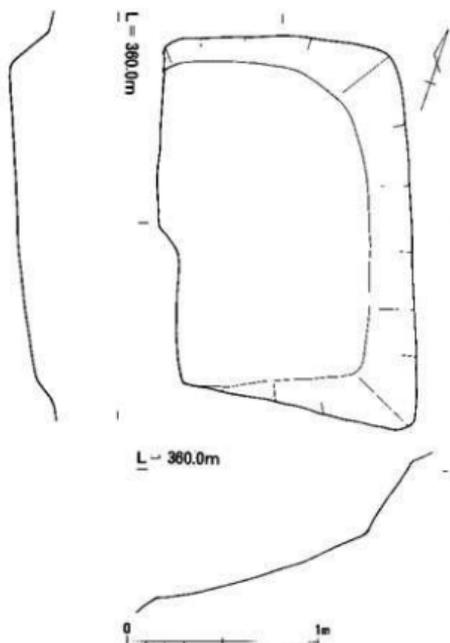


図48 SK-45実測図

第7節 神木坂遺跡出土の遺物

1 遺物の出土状態

3次調査において表土・流土などから遺構にともなわない遺物が出土している。これらの多くは細片のため、図化が可能なものはわずかである。2号墳・3号墳間の尾根南斜面、3号墳西方の尾根西斜面から比較的多くの遺物が出土している。

2 出土遺物

土器 (図49・50、図版38・39、表11)

縄文土器 深鉢 (76)

尾根南斜面の淡茶色土、黒灰色粘質土から4点の破片が出土している。いずれも晩期に属するものである。口縁部は外方に屈曲したのち、やや内彎気味に上方にのび、口縁端部を丸くおさめる。内外面とも摩滅が著しく、調整、技法などの詳細は明らかでない。器壁は口縁部の破片が0.4~0.6cm、その他の体部の破片が0.6~0.9cmをはかる。内面は黒褐色、外面は褐色を程し、胎土は雲母、角閃石を含んでいる。

古式土師器 高杯 (77)

尾根南斜面から出土した高杯脚部の破片である。やや外反気味に外下方にのび、端部は丸い。内外面とも摩滅が著しく、詳細な調整技法は明らかでない。褐色を呈し、軟質である。

須恵器 杯蓋 (78)

数点からなる細片で、復原口径5.2cm、現存高3.7cmをはかる。天井部の大半を欠くが、丸味をおびるものと思われる。天井部と口縁部とをわける稜線は突出するものの、やや鋭さに欠ける。口縁端部はやや外反し、内傾する凹面が認められる。天井部外面の上半に回転ヘラケズリ、その他は内外面とも横ナデ調整を施す。

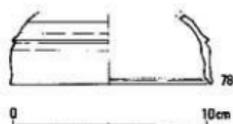


図49 神木坂遺跡出土
土器実測図(1)

口縁部及び稜線の形態から中村編年のI型式5段階、田辺編年のTK47型式に比定できる。

尾根南斜面からの出土である。

須恵器 壺 (79)

肩部から体部下半にかけての破片である。肩部は丸味をおび、体部は内彎している。内外面とも回転ナデ調整を施している。2号墳・3号墳間の尾根上からの出土である。

須恵器 壺 (80~82)

いずれも体部の破片で、外面に平行叩き目文、内面に同心円文が認められる。80は同心円文の上に軽くナデを施している。同様の破片が尾根南斜面から数点出土しているが、ここでは最も大きいものを図版38に掲載している。82は内面の同心円文を丁寧にナデで消している。3号墳南斜面から出土している。

土師器 小皿 (83~100)

83～91は尾根南斜面、92は2号墳～3号墳間、93は3号墳周辺、94～100は尾根西斜面からの出土である。細片が多く、図化したのは18点にすぎないが、同一個体となるものを含めても、実数はもう少し増加するものと思われる。口径は小片からの復原によっているものがほとんどで、必ずしも正確とはいえないが、おおむね7～8cm（83～91、93、94、96～99）、10cm前後（92、95、100）の2種に分かれる。

いずれも口縁部外面上半部と内面に横ナデ、内面中央に一定方向のナデ（不整方向のナデ）を施す。また、底部外面には型造り時の指頭圧痕、ナデが認められる。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。

83～89、93は底部中央が上方へ大きく突出するいわゆるヘソ皿である。その他は底部がほぼ平坦、または丸味をおびたものとなっている。

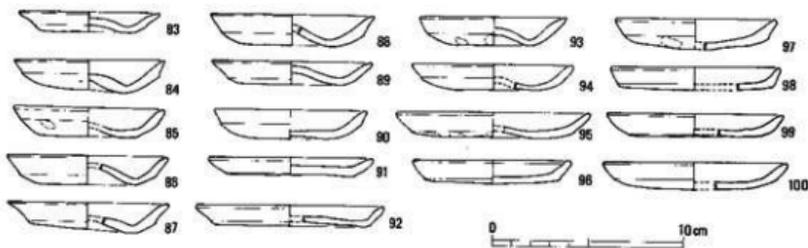


図50 神木坂遺跡出土土器実測図(2)

鉄製品 (図51、図版39)

刀子 (101)

身部の一部と茎部の先端を欠く片閃のもので、現存長8.6cmをはかる。身部は関部付近が1.2cmと最も広く、先端にいくにしたがい徐々に細くなっている。身部は現存長4.4cm、棟厚0.3cmをはかる。茎部は現存長4.2cmをはかり関部から徐々に細くなっている。最大幅0.7cm、厚さ0.5cmである。木質の遺存等は認められない。2号墳南斜面（尾根南斜面）から出土しており、2号墳盗掘時に投棄された可能性がある。

鎌 (102)

刀部、茎部ともその大半を欠き、現存長4.5cmをはかる。刀部は錆化が著しく、その詳細は明らかでないが、反っている。茎部の断面形態は長方形を呈し、最大幅0.9cm、最大厚0.5cmをはかる。2号墳周辺の流土中からの出土である。

鎌 (103)

茎部のみ破片で、刃部と茎部先端を欠く。現存長10.5cmをはかる。断面形態は方形を呈し、0.3cm～0.5cmをはかる。尾根西斜面からの出土である。

鉄滓 (104、105)

104、105とも神木板2号墳周辺の流土、攪乱土中からの出土である。

釘 (106、107)

神木板2号墳付近の表土中より出土したものである。106は現存長2.2cm、身部の太さ0.4cm、107は現存長2.8cm、身部の太さ0.5cmをはかる。いずれも頭部と先端部を欠き、その詳細は明らかでない。

鎌 (108)

刀部から柄着装部にかけての破片である。刀部の大半を欠くため、その形態は明らかでないが、半月状を呈すると思われる。刀部幅2.9cm、棟厚0.5cmをはかる。柄着装部は幅1.4cm、厚さ0.5cmをはかり、断面形態は長方形を呈する。ここには縦方向の木質が遺存している。神木板2号墳～谷畑古墳間の尾根上より出土している。

不明鉄製品 (109～112)

2号墳周辺の表土中から4点の板状鉄製品が出土している。109は現存長7.6cm、幅1.0cm、厚さ0.4cmをはかり、なかほどでゆるやかに曲がる。径0.3cmの穴が穿たれていたと考えられる。110は109と同様のもので現存長9.4cm、幅1.0cm、厚さ0.2～0.3cmをはかる。111は現存長4.2cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmをはかる。径0.3cmの穴が穿たれていたようである。112は現存長4.7cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmをはかる。

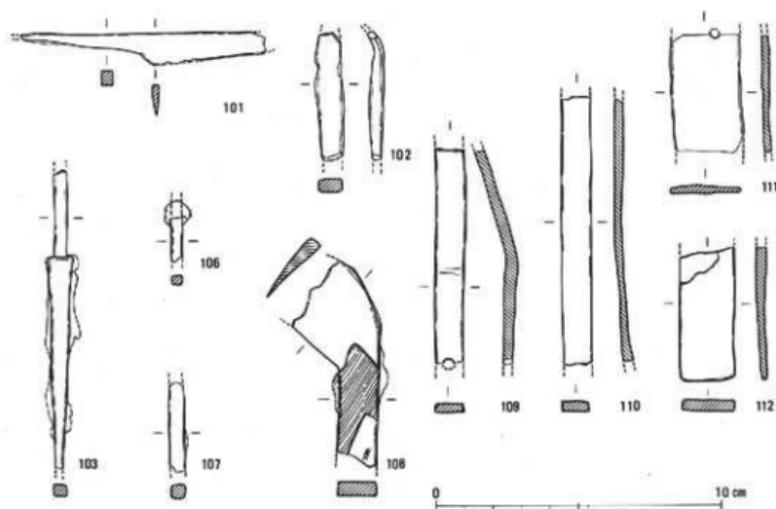


図51 神木板遺跡出土鉄製品実測図



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



图52 神木坂遺跡出土銭貨拓影



127



128



图53 神木坂遺跡出土銭貨実測図

銭貨 (図52・53、図版40、表11、113～128)

調査地各所から銅銭14点、鉄銭2点が出土しており、宋銭の元豊通宝3点、元祐通宝1点、鉄銭(種類不明)2点のほかはすべて寛永通宝である。銭貨の法量、初鑄年代等は表11にまとめた。

3 小 結

これまでの調査と同様、調査地内からは縄文時代以降、各時期の遺物が出土している。

縄文時代の遺物は先述の土器片のほか、サヌカイト剥片が数点認められる。明確な遺構を検出していないものの、遺跡全体が生活域であったことが推定される。

古式土師器片が1点出土しているが、この時期の遺構は明らかでない。

須臾器杯、壺、甕、鉄刀子、鉄鏃、鉄鏝、鉄滓など古墳にともなった遺物の可能性が高い。

神木坂2号墳・3号墳にともなった遺物も含まれていると推定されるが、時期が遡るものも認められる。遺構は明らかでないが、5世紀後半頃、2号墳附近には古墳が存在していたとも予想される。

土師器小皿、鉄釘、鉄鎌などは、中世墓にともなっていた遺物とも考えられるが、これらの関係を明らかにできない。土師器は15世紀後半から16世紀後半の時期に比定され、造墓時期の一端をうかがえる資料ともなる。

表11 神木坂遺跡(3次調査)出土銭貨一覧表

押 番 号	図 版 番 号	種 類	初 鑄 年 次		銭 径 (mm)		備 考
			年 号	西 暦	外 径	内 径	
52-113	40-113	元豊通宝	神宗元豊元年	1078	25	18.5	
52-114	40-114				25	20	錆化が著しい 一部欠損
52-115	40-115				24	19	錆化が著しい
52-116	40-116	元祐通宝	哲宗元祐元年	1086	23	18	錆化が著しい
52-117	40-117	寛永通宝			24.5	20	
52-118	40-118				24.5	20	背に「文」字を有する
52-119	40-119				23	19	
52-120	40-120				22.5	18.5	
52-121	40-121				24	19	摩滅が著しい
52-122	40-122				24	18.5	
52-123	40-123				22.5	18.5	
52-124	40-124				23	19	
52-125	40-125				22.5	20	
52-126	40-126				23.5	19	摩滅が著しい 拓影化不能
53-127	40-127	不 明			24	19	鉄製 錆化が著しい 約1/4欠損
53-128	40-128	不 明			(25)	—	鉄製 錆化が著しい 約1/4欠損

表12 神木板遺跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	器種・器形	法量(cm)	形態の特徴
—	38-76	縄文土器 深鉢	厚さ 0.4~0.9	口縁部は外方へ屈曲したのち、やや内彎気味に上方へのびる。口縁端部は丸くおさめる。
—	38-77	古式土師器 高杯	厚さ 0.5~0.7	脚部はやや外反気味に外下方へのび、脚端部は丸くおさめる。
49-78	38-78	須恵器 杯蓋	復原口径 5.2 現存高 3.7	天井部は丸味をおびると思われる。天井部と口縁部とをわける稜は突出しているが、やや鋭さに欠ける。口縁端部はやや外反し、内傾する凹面をなす。
—	38-79	須恵器 壺		肩部は丸味をおび、内彎気味に体部下方へとくだる。
—	38-80	須恵器 甕	厚さ 1.2	内彎する。
—	38-81	須恵器 甕	厚さ 1.0	
—	38-82	須恵器 甕	厚さ 1.0	
50-83	39-83	土師器 小皿	復原口径 7.4 器高 1.0	口縁部は外反気味に外上方へのびる。口縁端部は、尖り気味におさめる。底部中央はゆるやかに隆起する。
50-84	39-84	土師器 小皿	復原口径 7.8 器高 1.7	口縁部は外上方へのび、口縁端部の断面形態は三角形を呈する。底部の中央は隆起する。器壁は4mm~6mmと比較的厚い。
50-85	39-85	土師器 小皿	復原口径 7.8 器高 1.5	口縁部は外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。底部の中央はやや隆起する。
50-86	39-86	土師器 小皿	復原口径 8.4 器高 1.5	口縁部はやや外反気味に外上方へのび、口縁端部は尖り気味におさめる。底部はやや隆起する。
50-87	39-87	土師器 小皿	復原口径 8.4 器高 1.5	口縁部は外反気味に外上方へのびる。口縁端部は丸くおさめる。底部はややいびつなものゆるやかに隆起する。

技 法 の 特 徴	色 調・胎 土・焼 成	備 考
厚減が著しく、詳細は不明。	色 調 内面…黒褐色 外面…褐色 胎 土 蜜母、角閃石を含む 焼 成 良好	尾根南斜面（淡茶色土、 黒灰色粘質土）出土 口縁部、体部の破片
厚減が著しく、詳細は不明。	色 調 褐色 胎 土 精良 焼 成 軟質	尾根南斜面出土 脚部の破片
天井部外面の上半は、回転ヘラケズリ調整。その他は、内外面とも回転ナデ調整。	色 調 淡青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	尾根南斜面出土 ロクロ回転 右方向 破片
内外面とも回転ナデ調整。	色 調 内面…青灰色 外面…暗緑灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	2号墳・3号墳間出土 体部の破片
外面は縦横に平行叩き目文。 内面は同心円文の上にナデ。	色 調 内面…青灰色 外面…赤灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	尾根南斜面出土 体部の破片
外面は平行叩き目文。 内面は同心円文。	色 調 青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	3号墳南側斜面出土 体部の破片
外面は平行叩き目文。 内面は同心円文を丁寧にナデ消す。	色 調 青灰色 胎 土 精良 焼 成 堅緻	3号墳南側斜面出土 体部の破片
口縁部の内外面、底部内面に横ナデ調整。 底部内面の隆起部分はナデ。 底部外面には指頭圧痕。	色 調 にぶい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 破片
口縁部内面および外面上半に横ナデ調整。 内面の隆起部分にナデ。 底部外面に指頭圧痕、ワラ状痕。	色 調 にぶい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 完形
口縁部内面、および外面上半に横ナデ調整。 底部内面にナデ。 底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にぶい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面に横ナデ調整。 底部内面はナデ。 底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にぶい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面に横ナデ調整。 底部内面はナデ。 底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にぶい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 破片

神図番号	図版番号	器種・器形	法量(cm)	形態の特徴
50-88	39-88	土師器 小皿	復原口径 8.6 器高 1.6	口縁部はやや外反気味に外上方にのびる。口縁端部はやや尖り気味におさめる。底部は隆起する。
50-89	39-89	土師器 小皿	復原口径 8.4 器高 1.2	口縁部は外上方にのび、口縁端部は、やや尖り気味におさめる。底部は口縁部付近まで大きく隆起する。
50-90	39-90	土師器 小皿	復原口径 8.0 器高 1.5	やや丸味をおびた底部から、ゆるやかなカーブで外上方へのびる口縁部へとつながる。口縁端部は丸くおさめる。底部外面中央はややくぼむ。
50-91	39-91	土師器 小皿	復原口径 8.6 器高 0.9	平坦な底部から短い口縁部が外上方へとびる。口縁端部は、丸くおさめる。
50-92	39-92	土師器 小皿	復原口径 9.8 器高 1.1	口縁部は外上方にのび、口縁端部をやや尖り気味におさめる。口縁部なかほどは、肥厚する。底部はほぼ平坦となっている。
50-93	39-93	土師器 小皿	復原口径 7.6~8.0 器高 1.5	なかほどが肥厚した口縁部は外上方にのび、口縁端部は尖り気味におさめる。底部中央は隆起する。
50-94	39-94	土師器 小皿	復原口径 8.2 器高 1.3	口縁部は、外上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。
50-95	39-95	土師器 小皿	復原口径 10.0 器高 1.3	やや内彎気味に口縁部はのび、口縁端部を丸くおさめる。底部中央は、やや隆起する。
50-96	39-96	土師器 小皿	復原口径 8.2 器高 1.2	口縁部は外上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。底部は、ほぼ平坦である。
50-97	39-97	土師器 小皿	復原口径 8.4 器高 1.6	口縁部は外反気味に外上方にのび、口縁端部は丸い。底部は丸味をおびる。
50-98	39-98	土師器 小皿	復原口径 8.8 器高 1.2	口縁部は外上方にのび、底部はほぼ平坦である。
50-99	39-99	土師器 小皿	復原口径 9.2 器高 1.2	ほぼ平坦な底部からゆるやかに、口縁部が外上方へのびる。口縁端部は、丸くおさめる。
50-100	39-100	土師器 小皿	復原口径 9.6 器高 1.4	やや丸味をおびた底部からゆるやかに、口縁部が外上方へのびる。口縁端部は丸くおさめる。

技 法 の 特 徴	色 調 ・ 胎 土 ・ 焼 成	備 考
口縁部の内外面、底部内面に横ナデ調整。 底部内面はナデ。 底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 破片
口縁部は内外面とも右方向の横ナデ調整。 底部内面はナデ。 底部外面にはナデ、指頭圧痕、ワラ状痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 破片
口縁部内面および外面上半、底部内面に横ナデ調整。 底部内面中央にナデ。 底部外面、口縁部下半にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面に右方向の横ナデ調整。底部内面中央にナデ。 底部外面には指ナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根南斜面出土 破片
口縁部は内外面とも横ナデ調整。底部内外面ともナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	2号墳・3号墳間出土 破片
口縁部の内外面、底部内面は横ナデ調整。底部内面にはナデ。底部外面はナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	3号墳周辺出土 破片
口縁部内外面、底部内面は横ナデ調整。底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根西斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面は横ナデ調整。底部内面中央にナデ。 底部外面はナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根西斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面は横ナデ調整。底部内面中央にナデ。底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根西斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面に横ナデ調整。底部内面中央にナデ。 底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根西斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面に横ナデ調整。底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根西斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面は横ナデ調整。底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根西斜面出土 破片
口縁部の内外面、底部内面は横ナデ調整。底部内面中央にはナデ。 底部外面にはナデ、指頭圧痕。	色 調 にふい褐色 胎 土 精良 焼 成 良好	尾根西斜面出土 破片

第8節 谷畑古墳裾部

1 位置と現状 (図54)

谷畑古墳は1972年に埋葬施設(箱形木棺)とその周辺の発掘調査を実施し、多くの遺物が出土したことはすでに第2章で述べた。

神木坂2号墳、3号墳の横穴式石室をこの古墳裾部周辺に移築することになったので、移築予定地の2ヶ所にトレンチを設定した。ひとつは谷畑古墳南側に設定し、4基の中世墓(38・39・40・41号墓)を検出している(本章、第5節参照)。そして、もうひとつは古墳の南西側に設定している。本節では後者の概要をのべる。

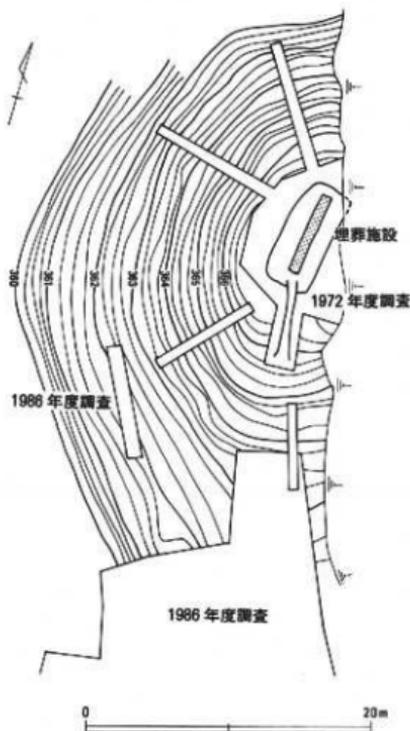


図54 谷畑古墳裾部調査位置図

2 調査の概要 (図55、写真41)

2号墳移築予定地に幅1m、長さ7.7mのトレンチを設定した。腐植土下は砂粒を多く含む黄褐色土となっており、この下は風化花崗岩の地山となっている。地表からこの地山面までの深さは40cm~50cmをはかる。黄褐色土中から土師器細片1点が出土しているが、時期、器形等は明らかでない。

3 小結

東から西へと傾斜する地山面を検出したが調査面積が狭いこともあり、古墳の墳丘裾となるような明確な遺構は検出していない。古墳の北側の一部と東半部が既に消滅しているが、現状の地形測量図から西側は標高362mライン、南側は標高



写真41 谷畑古墳裾部調査地

363mラインが比較的緩傾斜となっており、この付近に墳丘裾部が推定される。埋葬施設を墳丘の中心と考えると約30m+αの規模を有する円墳となる。なお、南側は先述の中世墓によって墳丘裾は改変されたと考えられ、明確な遺構は検出していない。

将来、谷畑古墳を整境整備し、史跡公園化をはかるならば、再度、発掘調査を実施し、墳丘規模の確定が必要であろう。

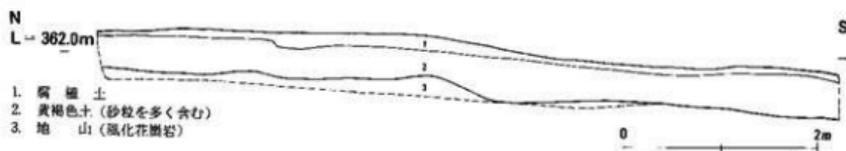


図55 谷畑古墳裾部土層断面図

第5章 自然科学的研究

第1節 奈良県榛原町神木坂古墳群遺跡出土の中世人骨について

池田 次郎

奈良県宇陀郡榛原町の萩原地区と下井足地区に所在する神木坂古墳群遺跡の発掘調査は昭和59年(第1次)、61年4月(第2次)、61年9月(第3次)の3回にわたって榛原町教育委員会により実施された。第1次調査では、ドタニ遺跡から中世の土葬墓1基と火葬施設8基が、神木坂2号墳、3号墳の調査を主体とした第3次調査では、調査地の全域から中世の土葬墓7基と火葬施設4基が検出され、第1次調査のすべての中世墓、第3次調査の土葬墓4基と火葬施設4基に、人骨が遺存していた。ドタニ遺跡中世墓の人骨についての所見はすでに報告されているので、今回は第3次調査で発掘された人骨について検討する。

火葬墓

残存する焼けた人骨の破片はいずれも少量で、性不明の成人骨である。

S K-31 頭蓋骨、椎骨、四肢長骨の骨体の破片が残存する。最も多いのは頭蓋骨の破片で、左の下顎頭以外は頭頂骨、側頭骨など脳頭蓋骨片である。

S K-35

35号墓は土葬墓であるが、その上層から焼けた頭蓋骨、椎骨、長骨骨体の小破片が少量検出された。

S K-36

長骨骨体の小破片がわずかに遺存する。

S K-37

長骨骨体の破片が多いが、それ以外に左上顎骨の口蓋突起、下顎骨の骨体、椎骨、肋骨、距骨などが同定された。

土葬墓

S K-33

頭蓋骨のほかに、第2頸椎の椎体、仙骨の正中仙骨稜上部、左寛骨の大坐骨切痕付近、左大腿骨の骨頭と骨体の破片が残存する。

頭蓋骨は脳頭蓋骨、しかもその右半分がよく残っている。すなわち、前頭縁と鱗縁を欠く右の頭頂骨、左頭頂骨の後頭角付近、後頭骨の後頭平面からなる頭蓋冠と、これには接続しないが後頭骨の底部と右の外側部、右側頭骨の大部分、左側頭骨の椎体の小破片、蝶形骨の右大翼などが遺存する。顔面頭蓋骨でも、右上顎骨の犬歯から第2臼歯までの歯槽突起と口蓋突起の破片と、右下顎枝から右の犬歯までの下顎骨体の一部が残っている。上顎骨には第2小臼歯と第1大臼歯が、下顎骨

には第1・第2小臼歯が釘植しており、下顎右の大臼歯の歯槽はすべて閉鎖している。

左寛骨の大坐骨切痕の形状から女性骨と判定される。頭蓋骨の矢状縫合と人字縫合はまだ癒合していないが、残存する歯の磨滅は著しく、大臼歯の歯槽が閉鎖していることなどから、被葬者の死亡年齢は壮年後半と推定される。

計測できたのは右の下顎枝だけで、下顎枝高56mm、下顎枝幅35mm、下顎切痕幅41mm、下顎切痕高13mm、下顎枝示数62.5、下顎切痕示数31.7である。後頭骨にインカ骨が認められる。

SK-34

下顎骨の正中部破片と右の寛骨臼付近の破片以外は、すべて右の四肢長骨である。

上腕骨は遠位端と骨体、桡骨は桡骨粗面までの近位部、尺骨も桡骨に対応する近位部、頭骨と腓骨は骨体の、いずれも小破片であるが、大腿骨は頭の一部、大転子、小転子、遠位端を欠くものの比較的よく残っている。

大腿骨は太く、その殿筋粗面や尺骨の回外筋稜が強く隆起しているなど、男性的特徴が強い。成人骨であるが、詳しい年齢は推定できない。

右大腿骨骨体の中央部と上部および顎の諸径が計測できた。中央部の矢状径29mm、横径27mm、周89mm、横断示数107.4、上部の矢状径26mm、横径32mm、最大径32mm、最小径23mm、横断示数81.3、顎の垂直径33mm、矢状径25mm、周100mm、横断示数75.8である。

SK-38

成人の左上腕骨骨体遠位部の破片だけが残存する。

SK-39

頭蓋骨と第1・第2頸椎の破片が残っている。

頭蓋骨は、脳頭蓋骨と頬骨、上顎骨、下顎骨のいずれも右半分である。前頭骨、右の頭頂骨と側頭骨、後頭骨、蝶形骨からなる脳頭蓋に右頬骨が接合している。このうち、前頭骨は前頭鱗の右半分で、眉間や眉弓を欠き、眼高上縁も外側よりの一部を残すだけである。右の頭頂骨と側頭骨はほぼ完全で、後頭骨は後頭鱗の右半分と外側部、底部を、蝶形骨は右大翼の大部分を残し、右頬骨は体の一部を欠く。脳頭蓋の右半分では、頭頂骨の後頭角付近と後頭骨の後頭平面の一部が存在するだけである。右上顎骨は第1・第2小臼歯と第1・第2大臼歯の歯槽突起とそれに続く体の一部、下顎骨は右の下顎枝から右の側切歯までの骨体であるが、下顎枝の下半分と体の底部より半分を欠く。下顎骨には側切歯、犬歯、第1小臼歯、第1大臼歯が釘植しているが、第2小臼歯と第2大臼歯の歯槽は閉鎖している。

頭蓋冠の骨壁は厚く、冠状縫合は癒合を完了し、残存する歯の磨耗が著しいので、熟年男性骨の可能性が高い。

註) 池田次郎 1986 「奈良県橿原町萩原Dタ-遺跡中世墓出土の人体について」 『神木坂古墳群』

(橿原町文化財調査報告 第2集) pp67-69 橿原町教育委員会。

第6章 考 察

第1節 神木坂2号墳と磚梯式石室

神木坂2号墳の埋葬施設は第4章第2節で述べたように、著しい擾亂を被っていたものの、奥室を有する磚積の横穴式石室（磚積石梯、磚梯式石室）であることが明らかとなった。石室は側壁の一部が残存するのみであるが、全長（現存長）6.1m、羨道長（現存長）1.95m、羨道幅1.2～1.36m、奥室長（現存長）1.15m、奥室幅1.17mを計測できる。玄室部は右側に幅0.48mの袖を有するが、左袖部の詳細は明らかでない。石室主軸を基に図上復原すると、玄室幅2.14mとなるが、左袖部相当箇所と石室ほりかたとは接することから、玄室の平面形は左右対称とはならない。左袖部は石室構築時から設けられず、右片袖であった可能性も考えられる。なお、片袖の場合、玄室幅は1.69mに復原できる。玄室部と奥室部との取り付け箇所の石材も認められないため、その詳細は明らかでない。石室なかほどに東壁を構成した基底石1石が残っており、ここまでを奥室とするとその長さは2.55m以上となる。この場合の玄室長は1.5m前後と推定される。

石室を概観すると、いわゆる「横口式石梯」状の形態を呈し、「ハ」字形の羨道から左右不对称の玄室、奥室へと続くが、玄室はそれほど大きなものではないと推定される。石室壁面はやや内傾する基底石を残すのみで、詳細な石室の断面形態は明らかでない。残存石材の積み方、各石材の規模等から、奥ノ芝2号墳に比較的、類似していると考えられる。

石室内の各所から埋葬時の遺物が若干、出土している。擾亂により、ほとんど原位置を保っていないものの、玄室部分からは土師器、須恵器等の上器類、奥室部分からは木棺に使用されたと考えられる鉄釘類が比較的まとまって出土している。奥室内から金環も検出していることから、奥室に木棺が安置されたと考えられるが、釘は散乱したような状態のため、棺の法量等は復原できない。玄室内での木棺の安置、追葬の有無は明らかでないが、その可能性は少ないと思われる。

出土した須恵器はⅢ型式1段階、土師器は飛鳥Ⅱ期に比定でき、この古墳の築造年代は7世紀第2四半期と考えられ、磚梯墳の一時期を明らかにできたといえよう。

榛原石（室生火山岩：流紋岩質熔結凝灰岩）の板石を磚積みにしたこの種の古墳が大和盆地東南部の桜井から宇陀・榛原の地域を中心に分布していることは、以前から知られている（表13）。丹切33号墳は、古墳群中に位置しているが、その他の古墳は、従来、古墳が築かれなかった地域、あるいは数少ない地域に認められ、大和から伊賀、伊勢、東国へと通じる山中の主要道付近に点在している。榛原町域では神木坂古墳群を中心として周辺に比較的まとまっており、南北2km、東西1.5kmの範囲に6基が存在している。

これらの磚梯式石室は、すでに平面形、玄室の断面形態から第1類から第4類の4種類に分類されている。このうち、奥ノ芝2号墳、丹切33号墳は第1類に分類されており、奥壁および側壁は基

底部から徐々に内側に持ち送られ、途中から大きく内傾し穹窿状を呈する。また、神木坂2号墳と同種の平面形を呈する花山西塚古墳は第3類に属し、美しく整えられた石材を垂直に積み上げ、天井近くで壁面は鋭く内傾する。奥室を有しないが、南山古墳もここに属している。

出土土器、石材の加工法、榛原石の石棺、漆喰等の評価も含めてこれらの築造順序を列挙すると、丹切33号墳→奥ノ芝2号墳→奥ノ芝1号墳→花山西塚古墳・南山古墳となる。神木坂2号墳の石室石材の加工は、花山西塚古墳のものより粗雑で、漆喰の使用も認められない。むしろ、石材の積み方、加工法は奥ノ芝2号墳に近いといえる。先の順序に神木坂2号墳を組み入れるなら、奥ノ芝2号墳と並行と考えられ、花山西塚古墳に先行するものである。発掘調査等が実施されていないため詳細は明らかでないが、奥室の一部が露出している西峠古墳も、石材の積み方、加工法等から花山西塚古墳より先行するものと推定される。現段階では、奥室を有する磚槨石室の初現は神木坂2号墳といえよう。西峠古墳も神木坂2号墳と同時期、またはやや下降するものと考えられ、7世紀第2四半期でも後半としておきたい。なお、近接した2基の古墳に構造上の共通点が多く、築造時期も同時期または相前後したものは、『日本書紀』でいう「双墓」とも考えられている。5基からなる舞谷古墳群を除いても、花山西塚・東塚古墳、忍坂8・9号墳、奥ノ芝1・2号墳が2基1組となっており、双墓としての特長を備えているといえよう。神木坂2号墳・西峠古墳も同構造、同時期と考えられ、双墓としてとらえられている。しかし、この2古墳はふたつの大きな谷部と尾根を挟み、直線距離にしても約700mをはかる非常に離れた位置関係となっている。いわゆる「双墓」ではないが、むしろ神木坂2・3号墳を1セットと捉えることができよう。

磚槨式石室の被葬者については、各古墳の諸要素によって以前から、渡来系氏族を含む中央官人、地方支配者層などといわれている。また、大和や河内に多く分布する「横口式石槨」は、石室の規模、構造等に一定の共通性が認められることから、中央の政治的影響のもとに築かれたと考えられている。磚槨式石室等に用いられる磚状に加工した榛原石の使用は、6世紀末の飛鳥寺造営を契機としてはじまる。飛鳥寺造営にあたっては、中央政権によって掌握された技術者集団の存在が指摘され、ここには、高麗系、百濟系など渡来系の人々の関与が考えられている。このことから榛原石を加工した工人集団にも渡来系技術者の存在が推定されている。

磚槨式石室のなかでも、立地、平面形、構造、漆喰の有無等、様々な相違が見うけられる。これらの違いは被葬者の地位・階層差に起因するものと考えられ、なかでも、特殊な奥室を有する花山西塚古墳、神木坂2号墳、西峠古墳等の被葬者は、より中央的な地位にあった人物と推定される。

表13 磚式石室 - 覽表

古墳名	所在地	墳形、規模	石室全長	縦		支		竪		高	寬	容
				長	幅	高	長	幅	高			
丹切33号墳	榛原町萩原	円墳、径12	(4.28)、容6.6	(1.35)	1.08	(0.95)	2.93	1.71	1.40~1.57	—	—	—
奥ノ芝1号墳	榛原町福地	円墳、径15	6.31	3.75	0.90~1.05	(1.20)	2.56	1.20	1.45	—	—	—
奥ノ芝2号墳	榛原町福地	円墳、径10	7.05	4.05	1.26~1.37	1.55	3.00	2.00	1.90	—	—	—
南山古墳	榛原町萩原	円墳、径15	(3.60)	(0.50)	1.3	(0.60)	3.10	2.21	(2.3)	—	—	—
神木坂2号墳	榛原町萩原	方墳、一辺15	(6.1)	(1.95)	容1.2~1.36	(0.45)	(1.30)	—	(0.70)	(1.15)	1.17	(0.58)
西峠古墳	榛原町下井足	円墳、径10	—	—	—	—	—	—	—	(1.00)	0.8	—
花山西塚古墳	桜井市栗原	円墳?径17	8.17	4.00	1.10	1.45	2.20	1.38	1.63	1.97	0.71	0.91
花山東塚古墳	桜井市栗原	円墳、径20	(3.15)	—	—	—	(3.15)	1.74	容1.90	—	—	—
舞谷1号墳	桜井市浅古	方墳、一辺13.8×9.7	(4.40)	(1.74)	1.12	—	2.40	1.35	1.68	—	—	—
舞谷2号墳	桜井市浅古	方墳、一辺10.6×9	—	—	0.95	(0.80)	—	—	—	—	0.90	—
舞谷3号墳	桜井市浅古	方墳、一辺14×9	—	—	容0.90	(0.60)	—	—	—	—	0.85	—
舞谷4号墳	桜井市浅古	方墳、一辺14.2×10.2	—	—	1.01	(0.59)	—	—	—	2.32	0.86	(0.94)
舞谷5号墳	桜井市浅古	方墳、一辺13×11	—	—	0.99	(0.25)	—	—	—	2.37	(0.90)	(0.20)
忍坂8号墳	桜井市忍坂	円墳?径11	(1.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
忍坂9号墳	桜井市忍坂	円墳?径11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
康中塚古墳	桜井市山川	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
黄金塚古墳	奈良市蓮之江町	方墳、一辺26	12.5	9.54	1.5	1.3	2.95	3.30	2.56	—	—	—
塔の腰2号墳	免田野町東郷	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
平田12号墳	三重県安濃町	円墳、径9m	(2.74)	—	—	—	—	—	—	2.10	0.72	0.95

(単位 m、() は現存規模、容は復原規模)

参考文献

- 中村 浩『陶邑』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 大阪府文化財調査報告書第28・29・30輯 大阪府教育委員会 1976・1977・1978
- 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ 奈良国立文化財研究所学報第31冊 奈良国立文化財研究所 1978
- 泉森 皎ほか『宇陀福地の古墳』 奈良県文化財調査報告第17集 奈良県教育委員会 1972
- 菅谷文則ほか『宇陀・丹切古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊 奈良県教育委員会 1975
- 前岡実知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊 奈良県教育委員会 1982
- 岡崎晋明ほか『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』 奈良県文化財調査報告書第39集 奈良県教育委員会 1982
- 泉 武ほか「舞谷3号墳」『奈良県遺跡調査概報』1980年度 奈良県立橿原考古学研究所 1982
- 堀田啓一、林部 均「桜井市舞谷4号墳の発掘調査」『考古学ジャーナル』No.238 ニューサイエンス社 1984
- 柳沢一宏『橿原町遺跡分布調査概報』 橿原町文化財調査概要2 橿原町教育委員会 1987
- 伊藤秋男ほか『平田古墳群』 安濃町遺跡調査会 1987
- 猪熊兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所学報第28冊 奈良国立文化財研究所 1976
- 泉森 皎「『双墓』に関する二・三の問題について」『藤井佑介君追悼 考古学論叢』 藤井佑介君を偲ぶ会 1980
- 泉森 皎「磚柙式横穴石室墳」『月刊奈良』11月号 1987
- 菅谷文則「橿原石考—大化前後における石工集団の興廢」『末永先生米寿記念献呈論文集』 乾 末永先生米寿記念会 1985
- 楠元恒夫「大和橿原石棺の系譜」『考古学と移住・移動』 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1985
- 林部 均「飛鳥時代の古墳の地域性—特に大和、河内を中心として—」『考古学論叢』第11冊 奈良県立橿原考古学研究所 1985

第2節 神木坂3号墳と新羅土器

大きく攪乱された神木坂3号墳の横穴式石室内から新羅土器の小片が出土したことは、すでに第4章第3節で触れた。また、この土器についても詳述しているが、本節で若干のまとめをしておきたい。

朝鮮半島では、器壁の外面にスタンプ文を施す土器群を統一新羅様式と呼んでおり、7世紀の初頭には成立する土器様式と考えられている。慶州を中心に古墳墓、宮都・寺院関係の遺跡から多数出土している。

日本でも朝鮮半島で出土しているような新羅土器^(註1)(統一新羅系土器)は、これまでに44遺跡、約60点が知られており、今後これらの数は増加していくものと思われる。これらの分布状況は対馬を含む北部九州、畿内で比較的まとまって出土しており、その他、関東でも数点確認されている^(註2)(図56)。以下、主な出土地の概略に触れておきたい。

対馬では、下ガヤノキ遺跡をはじめ、墳墓関係遺跡から台付長頸壺、広口壺などが出土しており、6世紀末から7世紀後半の時期が考えられている。北部九州では福岡市吉武塚原古墳群、宗像市相原古墳群、大野城市王城山C古墳群など数基の古墳から壺、蓋形土器などが出土しており、6世紀後半から7世紀後半の遺物と共伴している。また、太宰府では7世紀後半の整地層から新羅土器と考えられる破片が出土している。この北部九州では、伝世品も含めて古墳出土例が比較的多く知られている。

九州に次いで畿内でも多くの出土例が確認されているが、なかでも大和南部の飛鳥地域の宮都・寺院関係遺跡からの出土が多い。現在までに石神遺跡、豊浦寺跡、橋寺跡、大官大寺跡、西橋遺跡から台付長頸壺、緑釉壺などの出土が知られており、小野田宮推定地、藤原宮跡でも確認されている。また、平城京跡・平城宮跡からも数点出土している。大和では神木坂3号墳例を除けばほとんどが宮都または寺院関係の遺跡からの出土であり、北部九州とは異なった様相を呈しているといえる。これらの他、京都では、大覚寺3号墳から7世紀初頭の台付長頸壺、大阪では金属加工関係の遺跡である太井遺跡から7世紀中頃の有蓋壺が出土している。

関東では千葉、栃木の遺跡で数点出土しており、これらが現在の東限となっている。千葉県野々間古墳では台付長頸壺と蓋形土器がセットで出土しており、7世紀代の年代が考えられている。

神木坂3号墳の資料は小片のため器形、法量等は明らかでない。外面には2条の浅い凹線がめぐり、この上には列点文をまわりに配する水滴文状の流線形文、下には中心に点をもつ点半円文(二重半円文)と流線形文を縦方向に連続させたスタンプ文を施している。現状での基本的な文様は流線形文と点半円文で構成されている。

日本で確認されている新羅土器のうち、この種の流線形文を施しているものは、豊浦寺跡出土の緑釉壺、相原古墳群(2号墳)出土の壺にその類例を求めることができる。前者は8世紀から10世

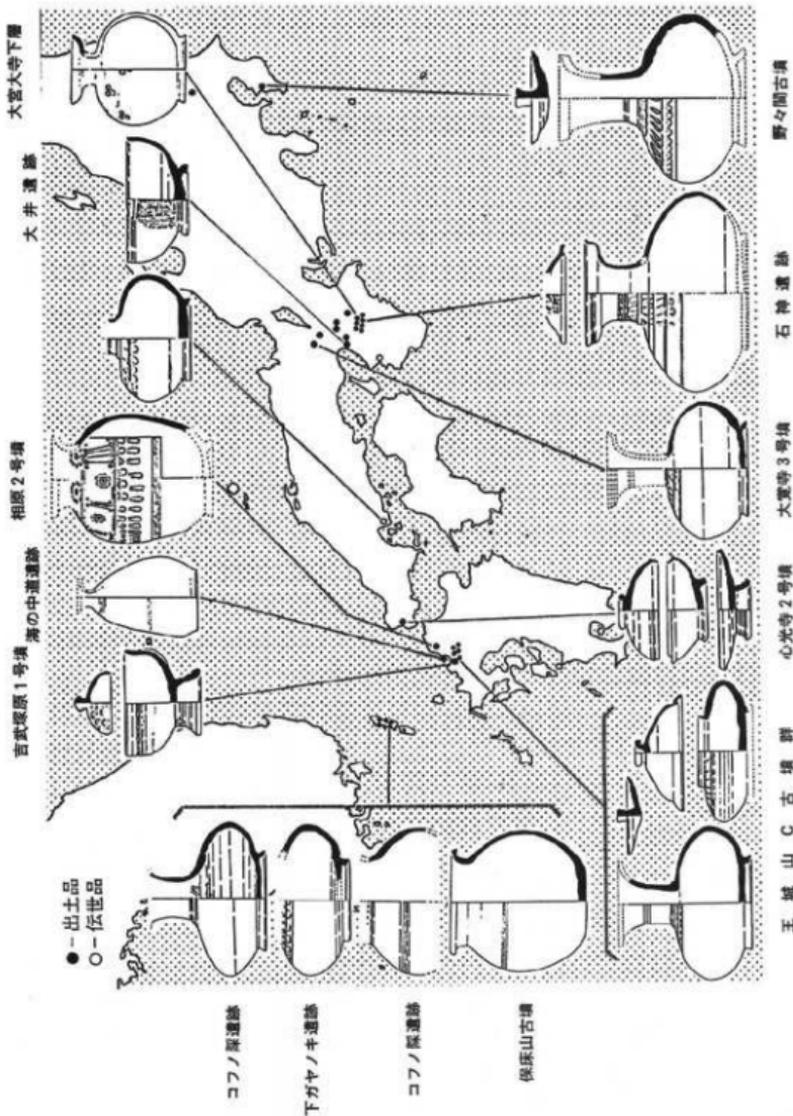


図56 日本出土の新羅土器分布図

紀の遺物と共存しているが、7世紀代の年代が考えられている。後者は横穴式石室の墓道部分からの出土で、7世紀初頭の遺物を伴っている。また、流線形文の周辺に列点文を施さない流線形文のみの文様は、福岡玉城山古墳群（16号墳）、対馬下ガヤノキ遺跡、大阪国府遺跡、千葉野々間古墳などの出土資料に認められ、ほとんどが7世紀代のものである。なお、流線形文は台付広口壺、台付長頸壺に施文が認められることから、神木坂3号墳例の場合、この種の器形の可能性がある。

もうひとつの文様である点半円文（二重半円文）は、慶州忠孝里6号墳出土の台付椀にその類別を求めることができる。この種の椀は文様、器形等から型式学的に系統だった変遷が示されており、忠孝里6号墳例は6世紀末～7世紀前半の比較的古い時期に位置付けられている。

流線形文が列点文を配するものから配さないものへと、点半円文が二重から一重へとそれぞれの文様が形骸化していくものとすれば、神木坂3号墳例は丁寧な文様を施していることから、比較的古い時期に位置付けることが可能となってくる。先述の相原2号墳例や忠孝里6号墳例を参考に神木坂3号墳例の年代を考えるなら、7世紀前半頃に比定できる。

古墳出土の新羅土器は北部九州、山口心光寺1号墳、京都人覚寺3号墳、千葉野々間古墳などのものが知られている。この土器をもって古墳の被葬者は渡来人と断定することはできないが、直接、間接のいずれかに渡来人が関わっていた可能性が考えられる。当時、大和の宮都や寺院には多くの大陸文化がもたらされたのは明らかであり、新羅土器もその傍証といえる。宇陀地方において、直接、大陸文化が流入した事実は明らかでないが、渡来系人が関わった磚積石室の分布が注目される。この地方に産する榛原石の切り出し、加工等に渡来系の工人が携わったと推定されている。

古くから宇陀は大和と伊賀、伊勢、東国へと通じる主要道の要衝であり、この地の掌握は軍事上も大変重要となってくる。3号墳の被葬者は中央の影響のもと、この地を掌握した人物であろうか。この古墳の被葬者は飛鳥を経て、新羅土器を手中にしたと考えられるが、渡来人によって直接、当地へもたらされた可能性も否定できない。

神木坂3号墳は、7世紀前半頃の新羅土器が出土するものの、石室の構造、その他の遺物から神木坂2号墳と同時期の7世紀第2四半期の築造と考えられる。また、2号墳よりやや遅れる中頃に近い時期とも推定されるが、詳細は明らかにできない。

この2基の古墳は在地的な系譜を辿れる丹切古墳群とは異なり、7世紀代にこれまで古墳が少なかった地域に突如として出現する。また、神木坂1号墳とは約1世紀もの時期差があり、ある程度の断絶が認められる。神木坂2・3号墳の被葬者は、当地とは直接の系譜を辿らない飛鳥から派遣された人物とも推定できる。いずれにせよ、この2基の古墳の被葬者は何らかの形で大陸文化に関わっていた人物であろう。

註

- 1) 田辺昭三氏は山門心光寺1号墳例のように舶載品の存在を認めつつ、福岡下城山C5号墳の出土資料から、朝鮮半島から渡来した陶工が周辺地域で製作を行ったと考えられている。(田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981)
- 2) 江浦 洋「日本出土の統一新羅系土器とその諸問題1」『太井遺跡(その2)一調査の概要一』(財)大阪文化財センター 1987
江浦 洋「日本出土の統一新羅系土器とその諸問題2」韓式系土器研究会発表資料 1988
に負うところが大きい。江浦 洋氏には、種々のご教示をいただいた。

参考文献

- 『慶州忠孝里古墳調査報告書』昭和7年度古墳調査報告第2冊 朝鮮総督府 1937
- 『蔚州華山里古墳群』釜山大学校博物館遺蹟調査報告第6輯 釜山大学校博物館 1983
- 金 元龍「統一新羅土器」『韓国史論』15 国史編纂委員会 1985
- 韓 炳三「統一新羅の土器」『世界陶磁全集』17 小学館 1979
- 小田富士雄「対馬・北部九州の新羅系陶質土器」『古文化談叢』第5集 九州古文化研究会 1978
- 清家 博「下ガヤノキ遺跡発見の新羅土器の新資料」『九州考古学』No51 九州考古学会 1976
- 二宮忠司ほか「吉武・塚原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 1980
- 番井仁夫『相原古墳群』宗像町文化財調査報告書第1集 宗像町教育委員会 1979
- 番井仁夫ほか「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」IX 福岡県教育委員会 1977
- 石松好雄ほか「太宰府史跡」『昭和53年度発掘調査概報』九州歴史資料館 1979
- 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』6 奈良国立文化財研究所 1976
- 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』15 奈良国立文化財研究所 1985
- 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』16 奈良国立文化財研究所 1986
- 土橋理子「奈良県出土の輸入陶磁器について」『考古学論叢』第7冊 奈良県立橿原考古学研究所 1982
- 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要』京都府教育委員会 1976
- 江浦 洋「太井遺跡(その2)一調査の概要一」(財)大阪文化財センター 1987
- 石井則孝「千葉県富津市出土の新羅焼土器」『史跡』第8号 1977

あ と が き

神木坂2・3号墳を中心とする第3次の発掘調査を実施したのは、1986年の9月であった。2基の古墳はいずれも貴重な7世紀代の終末期古墳であったことから、関係者が協議を重ねて遺跡の保存方法を模索した結果、これらの古墳は谷畑古墳の横へ腰を落ち着けることとなった。字陀の見聞らしはどうであろうか。

現地調査をはじめ、遺物等の整理から報告書の刊行に至るまで、榛原町役場・計画課の諸氏には多大のご迷惑をおかけした。この場を借りて、深くおわびしたい。また、色々とお手伝いをお願いした調査補助員の方々にも厚くお礼申し上げる。印刷をお願いした共同精版印刷株式会社・林 義喜氏には、原稿の延滞、追加でご迷惑をおかけしたにもかかわらず、本書をまとめていただいた。あわせてお礼申し上げます。

最後にこの間、ご指導、ご教示をいただいた方々の芳名を記し、感謝の言葉にかえさせていただく。(五十音順)

東 湖、石野博信、泉森 毅、伊藤勇輔、今尾文昭、江浦 洋、岡崎晋明、岡幸二郎、
楠元哲夫、久野邦雄、菅谷文則、関川尚功、竹田政敬、辻本宗久、豊岡卓之、朴 美子、
林部 均、松永博明

圖 版



空からみた神木坂古墳群周辺 (1981年撮影)



調査後の神木坂古墳群（西上空から）



調査後の神木坂古墳群（北上空から）



調査前の神木坂古墳群全景（南から）



調査前の神木坂古墳群（西から）



2次調査後の神木坂古墳群（西から）



3次調査後の神木坂古墳群



調査前の神木坂古墳群（南西から）



3次調査後の神木坂古墳群（南西から）



調査前の神木坂西尾根地区（東から）



調査後の神木坂西尾根地区（東から）



調査前の2号墳（南から）



石組検出状況（南西から）



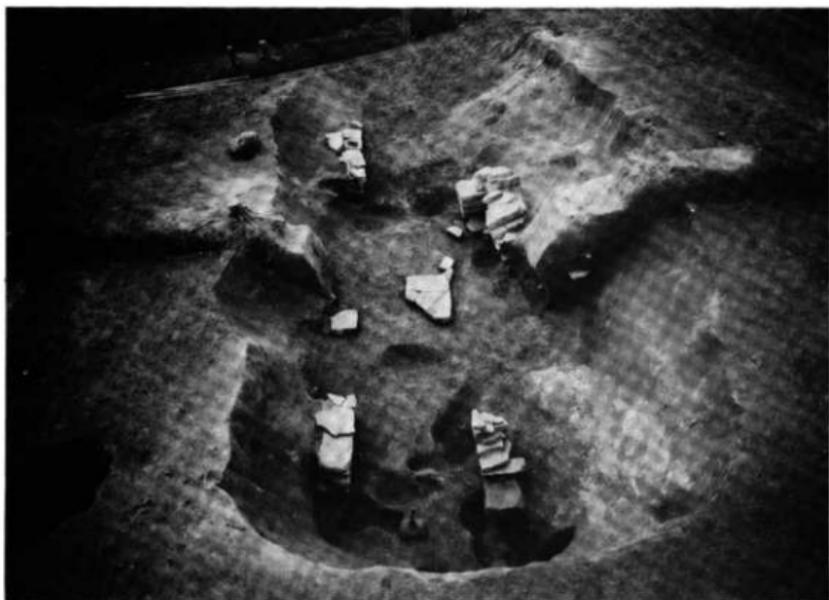
2号墳全景（南東から）



2号墳全景（北から）



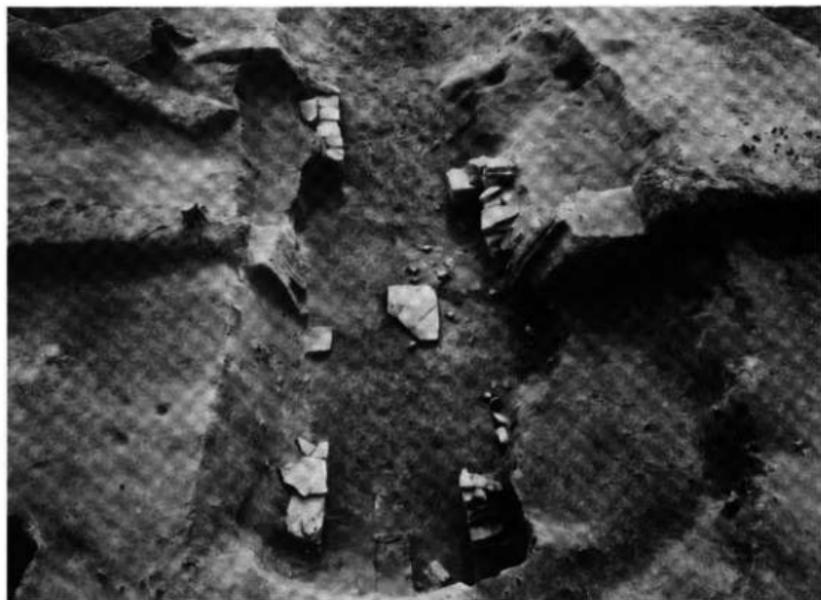
2号墳石室検出状況(南から)



2号墳石室検出状況(北から)



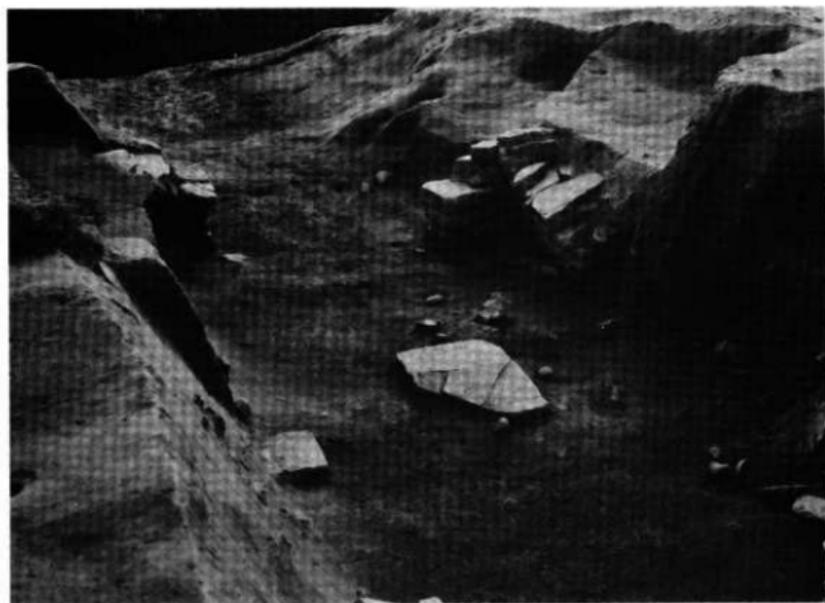
2号墳石室内遺物出土状況（南から）



2号墳石室内遺物出土状況（北から）



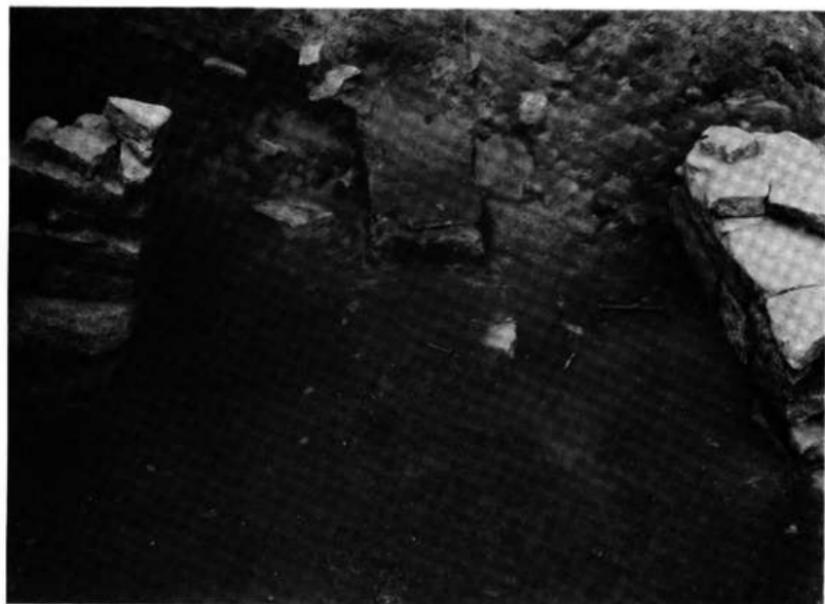
2号墳石室内遺物出土状況(南から)



2号墳石室内遺物出土状況(北東から)



2号墳玄室内遺物出土状況（東から）



2号墳奥室内遺物出土状況（南から）